一橋大学審査学位論文

博士論文

なぜ貧しい人ほど寄付をするのか

－金銭的欠乏感の影響に着目した検討－

竹部成崇

一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程
SD141013

WHY DO THE POOR DONATE MORE?
THE EFFECT OF SENSE OF MONEY SCARCITY ON INTENTION TO DONATE

TAKEBE, Masataka

Doctoral Dissertation
Graduate School of Social Sciences
Hitotsubashi University

私は、博士学位請求論文を作成するにあたり、「一橋大学における研究活動に係る行動規範」*および、本研究科の「大学院生研究倫理規範」**を遵守したことを、ここに宣誓します。

＊「一橋大学における研究活動に係る行動規範」(2007年7月4日)

＊＊「一橋大学大学院社会学研究科　大学院生研究倫理規範」(2015年11月11日)

2017 年 10 月 30 日

学位申請者(自署)：　竹部 成崇

なぜ貧しい人ほど寄付をするのか
－金銭的欠乏感の影響に着目した検討－

目次

第Ⅰ部　問題

序章

0-1　はじめに　・・・・・・・・・ 2

0-2　本論文の構成　・・・・・・・・・ 4

第 1 章　なぜ貧しい人ほど寄付をするのか

1-1　貧しさと寄付のパラドクス　・・・・・・・・・ 7

1-1-1　貧しい人の方が寄付をする　・・・・・・・・・ 7

1-1-2　より詳細な関係　・・・・・・・・・ 9

1-1-3　寄付金控除の影響　・・・・・・・・・13

1-2　宗教性・年齢・寄付額の相場という観点からの説明　・・・・・・・・・14

1-2-1　宗教性という観点からの説明　・・・・・・・・・14

1-2-2　年齢という観点からの説明　・・・・・・・・・14

1-2-3　寄付額の相場という観点からの説明　・・・・・・・・・16

1-3　利他性という観点からの説明　・・・・・・・・・17

1-3-1　社会経済的地位と社会的認知傾向　・・・・・・・・・17

1-3-2　社会経済的地位と利他性　・・・・・・・・・21

1-3-3　利他性という観点からの説明　・・・・・・・・・23

1-4　残されている謎　・・・・・・・・・25

第 2 章　なぜ貧しい人はわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか
2-1　欠乏感とその影響　・・・・・・・・27
2-1-1　欠乏感とは　・・・・・・・・27
2-1-2　欠乏感の影響：トンネリング　・・・・・・・・28
2-1-3　欠乏は人の心を占拠する　・・・・・・・・32
2-2　金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響　・・・・・・・・33
2-2-1　欠乏感研究の知見から　・・・・・・・・33
2-2-2　社会的推論研究の知見から　・・・・・・・・33
2-3　金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響　・・・・・・・・36
2-3-1　対立する予測　・・・・・・・・36
2-3-2　利他的動機づけの調整効果　・・・・・・・・37
2-3-3　貧しさと寄付のパラドクスの再考　・・・・・・・・38

第 3 章　実験の概要－金銭的欠乏感の因果的影響を実験により明らかにする－
3-1　実験の目的　・・・・・・・・41
3-2　実験の流れと仮説　・・・・・・・・43
3-3　方法の概要　・・・・・・・・45
3-3-1　独立変数の操作　・・・・・・・・45
3-3-2　従属変数の測定　・・・・・・・・46
3-3-3　調整変数の測定　・・・・・・・・47

第Ⅱ部　実証的検討

第 4 章　金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響
4-1　実験 1－大学生の旅行キャンセルに対する原因帰属－　・・・・・・・・50
4-1-1　問題　・・・・・・・・50
4-1-2　方法　・・・・・・・・51
4-1-3　結果　・・・・・・・・53

4-1-4　考察　・・・・・・・・55
4-2　実験 2－児童養護施設の運営難に対する原因帰属－　・・・・・・・・57
4-2-1　問題　・・・・・・・・57
4-2-2　方法　・・・・・・・・57
4-2-3　結果　・・・・・・・・58
4-2-4　考察　・・・・・・・・59
4-3　全体考察　・・・・・・・・62

第 5 章　金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響
5-1　実験 3－食費計画による欠乏感操作－　・・・・・・・・64
5-1-1　問題　・・・・・・・・64
5-1-2　方法　・・・・・・・・65
5-1-3　結果　・・・・・・・・67
5-1-4　考察　・・・・・・・・71
5-2　実験 4－旅行計画による欠乏感操作－　・・・・・・・・74
5-2-1　問題　・・・・・・・・74
5-2-2　方法　・・・・・・・・74
5-2-3　結果　・・・・・・・・77
5-2-4　考察　・・・・・・・・82
5-3　実験 5－寄付意図の測定方法を変更して－　・・・・・・・・84
5-3-1　問題　・・・・・・・・84
5-3-2　方法　・・・・・・・・84
5-3-3　結果　・・・・・・・・85
5-3-4　考察　・・・・・・・・87
5-4　全体考察　・・・・・・・・89

第 6 章　時間的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属とボランティア意図に及ぼす影響
6-1　実験 6－旅行計画による欠乏感操作－　・・・・・・・・91
6-1-1　問題　・・・・・・・・91
6-1-2　方法　・・・・・・・・92

6-1-3　結果 ・・・・・・・・95
6-1-4　考察 ・・・・・・・・99

第Ⅲ部　総合考察

第 7 章　総合考察
7-1　知見のまとめ ・・・・・・・ 104
7-1-1　金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響 ・・・・・・・ 104
7-1-2　金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響 ・・・・・・・ 105
7-1-3　時間的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属と ボランティア意図に及ぼす影響 ・・・・・・・ 108
7-2　本研究の意義と限界 ・・・・・・・ 110
7-2-1　意義－貧しさと寄付のパラドクスについて残る謎の解明－ ・・・・・・・ 110
7-2-2　限界－モデルのより詳細な検討の必要性－ ・・・・・・・ 112
7-3　今後の展望 ・・・・・・・ 115
7-4　結論 ・・・・・・・ 117

引用文献 ・・・・・・・ 118

謝辞 ・・・・・・・ 128

付録 ・・・・・・・ 129

第Ⅰ部： 問題

序 章

0－1　はじめに

貧しい人と豊かな人では、どちらの方が他者にお金を分け与えるであろうか。直感的には、お金を多く持っている豊かな人の方が、他者にお金を分け与えるように思われる。しかし、社会調査ではしばしば、貧しい人の方が豊かな人より寄付をすることが示されている（e.g., Greeve, 2009; Johnston, 2005）。なぜ、このような直感に反する現象が生じるのであろうか。

これまでの研究は、この現象に、宗教性・年齢・寄付額の相場が関連していることを示唆してきた（e.g., Iannaccone, 1988; James III & Sharpe, 2007; Wiepking, 2007）。しかし、貧しい人の方が寄付をする傾向は、宗教関連でない寄付においても認められ（e.g., James III & Sharpe, 2007）、年齢の効果を統制しても確認された（e.g., Wiepking, 2007）。また、寄付額に相場があるとしても、お金がなく生活が苦しければ、相場より少ない金額を寄付するのが自然であろう。そのため、宗教性・年齢・寄付額の相場という観点では、この逆説的現象を十分に説明できない。

近年の心理学研究は、この現象に、貧しい人の利他性の高さが関連していることを示唆している。具体的には、貧しい人は主観的社会経済的地位が低く、慢性的に外的な力を知覚しているため、他者に注意を払いやすく、その結果、苦境にいる他者に対する利他的動機づけが高まりやすいことが示されている（for reviews, Kraus, Piff, & Keltner, 2011; Kraus, Piff, Mendoza-Denton, Rheinschmidt, & Keltner, 2012）。それゆえ、貧しい人の方が他者を援助することは十分に予測できる。この際、合理的な観点から考えれば、金銭的援助でなく、その他の援助（e.g., 時間的援助としてのボランティア）を行うべきであろう。しかし、彼らは寄付以外の援助をあまり行わない（e.g., Independent Sector, 2002）。そのため、主観的社会経済的地位の低さに伴う利他性の高さでは、この逆説的現象を十分に説明できない。

ではなぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すの

であろうか。この謎について本論文では、「欠乏感」に着目した検討を行う。欠乏とは、自分の持っている量が必要と感じる量より少ないことを指す（Mullainathan & Shafir, 2013）。主観的社会経済的地位の低さと金銭的欠乏感はともに貧しさに伴う感覚であるが、主観的社会経済的地位は他者との比較によって生じる「順位」が本質である一方（Kraus, Tan, & Tannenbaum, 2013）、欠乏感は個人内の比較によって生じる「不足」が本質であり（Mullainathan & Shafir, 2013）、比較の対象やその本質という点で、2つの概念は異なる。

欠乏感に関するこれまでの研究では、欠乏を感じると、当該欠乏が関わることに対する集中は高まる一方で、無関連なことを処理する能力は低下することが示されている（for a review, Mullainathan & Shafir, 2013）。こうした欠乏の影響は、比喩的に「トンネリング」と呼ばれている。トンネルの中に入ると、中のことはよく見えるようになる一方、トンネルの外のことは見えなくなってしまうためである。トンネリングが生じるのは、欠乏が人の心を占拠し、欠乏している資源のことをよく考えるようにさせたり、それに注意を払うようにさせたりするためであると考えられている（Mullainathan & Shafir, 2013）。このことを考慮すると、欠乏感は寄付に関連する認知にも影響を及ぼすことが考えられる。具体的には、金銭的欠乏感が高まると、お金が足りない状況のことをよく考えたり、そうした状況により注意を払ったりするようになり、結果として、他者の苦境の原因も金銭の少なさにあると認知しやすくなることが考えられる。他者の苦境の原因が金銭の少なさにあると認知したならば、その他者を助けたいと思う場合には、金銭的な援助を行おうとするであろう。このように考えると、貧しい人が他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのは、彼らが他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいためであることが考えられる。

以上のことから、本論文では、貧しさと寄付のパラドクスに関して残されている謎を解明するため、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属と寄付意図に及ぼす影響について、実証的検討を行うこととする。

0－2　本論文の構成

本論文の構成は、以下の表0-1のとおりである。

表0-1　本論文の構成

第Ⅰ部：　問題

序　章　：　はじめに

第 1 章：　なぜ貧しい人ほど寄付をするのか

第 2 章：　なぜ貧しい人はわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか

第 3 章：　実験の概要－金銭的欠乏感の因果的影響を実験により明らかにする－

第Ⅱ部：　実証的検討

第 4 章：　金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響

（実験1、実験2）

第 5 章：　金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響

（実験3、実験4、実験5）

第 6 章：　時間的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属とボランティア意図に及ぼす影響

（実験6）

第Ⅲ部：　総合考察

第 7 章：　総合考察

まず、「第Ⅰ部：問題」では、本論文の目的について述べていく。

「序章」（本章）では、本論文の目的について簡単に説明し、本論文全体の構成について説明を行う。

「第1章：なぜ貧しい人ほど寄付をするのか」では、まず、貧しい人の方が豊かな人よりも寄付をすることを示す社会調査をいくつか紹介する。次に、この現象に関連するこれまでの研究を概観していく。そして、貧しさと寄付のパラドクスにおける残された謎（なぜ貧しい人は他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか）について述べる。

「第2章：なぜ貧しい人はわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」では、第1章の内容を受けて、なぜ貧しい人は他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか、という謎について、金銭的欠乏感に着目して説明を試みる。そのため、この章ではまず、欠乏とは何であるかを確認し、欠乏感に関する研究知見を概観する。そして、それらを踏まえ、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属と寄付意図に影響を及ぼす可能性を指摘する。すなわち、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を高め、結果として、他者を助けようとする際に、金銭的な援助を行う意図を高める、という仮説を導く。

「第3章：実験の概要－金銭的欠乏感の因果的影響を実験により明らかにする－」では、第1章と第2章の内容を簡潔にまとめ、本研究の検討課題、実験の流れ、および本研究で検証する仮説について整理する。そして、実験における独立変数の操作方法、従属変数と調整変数の測定方法について、簡単に説明する。

次に、「第Ⅱ部：実証的検討」では、仮説を検討するために行った6つの実験研究について、具体的に説明していく。そして、どのような結果が得られ、その結果はどのように解釈できるのかについて、考察していく。

「第4章：金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響」では、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を高める、という仮説を検証するために行った2つの実験研究について説明する。得られた結果は仮説を概ね支持するものであり、その結果を基に考察する。

「第5章：金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響」では、他者を助けようという動機づけが高い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を高める、という仮説を検証するために行った3つの実験研究について説明する。寄付意図の測定方法によっては「男性においてのみ」という限定条件がつく場合もあるものの、得られた結果は概ね、上記の仮説を支持するものであり、その結果を基に考察する。

「第6章：時間的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属とボランティア意図に及ぼす影響」

では、第4章と第5章で検証した仮説が金銭以外の資源における欠乏感においても当てはまるかどうかを検証するために行った1つの実験研究について説明する。得られた結果は仮説を概ね支持するものであり、その結果を基に考察する。

最後に、「第Ⅲ部：総合考察」では、第Ⅰ部、第Ⅱ部を総括して議論を行う。

「第7章：総合考察」では、まず、第Ⅱ部で行った6つの実験研究で得られた知見について簡潔にまとめる。次に、それらの研究意義について、関連する領域の研究を含めながら、総合的に議論をしていく。また、本研究の限界と残された課題についても述べる。そして最後に、今後の展望について議論する。

第 1 章　なぜ貧しい人ほど寄付をするのか

1－1　貧しさと寄付のパラドクス

1－1－1　貧しい人の方が寄付をする

貧しい人と豊かな人では、どちらの方が他者にお金を分け与えるであろうか。直感的には、お金を多く持っている豊かな人の方が、他者にお金を分け与えるように思われる。お金を多く持つ豊かな人の方が、お金を少ししか持たない貧しい人より、相対的に、お金を手放すことのコストが小さいと考えられるためである。しかし、社会調査のデータではしばしば、貧しい人の方が豊かな人より寄付をすることが示されることが報告されている（e.g., Greeve, 2009; Johnston, 2005）。

例えば、シアトルタイムズの記事では、2007年のアメリカ国税庁の調査によると、人口の上位20%の収入を得ている人々は収入の2.1%しか寄付に費やしていないのに対し、下位20%の人々は4.3%も寄付に費やしていることが紹介されている（Greeve, 2009）。同様に、2001年のインディペンデント・セクター[1]による調査では、世帯収入が10万ドル以上の人々は収入の2.7%しか寄付に費やしていないのに対し、2万5千ドル未満の人々は4.2%も寄付に費やしていることが明らかにされている（Independent Sector, 2002）。また、ニューヨークタイムズの記事でも、2003年のアメリカ労働統計局の調査によると、年収が5～10万ドルの35歳以下の人々は運用資産の2.5%を寄付に費やしているのに対し、年収が1千万ドル以上の35歳以下の人々は0.4%しか寄付に費やしていないことが紹介されている（Johnston, 2005）。このように、直感的な予測とは反対に、お金を少ししか持たない人の方が、それを他者に多く分け与えるようである。

[1] 多様な非営利団体・財団・公益のための企業を統合する、アメリカで唯一の会員制組織。ワシントン D.C. に本部を置く（http://www.independentsector.org/）。

もちろん、絶対額で見れば、お金を多く持つ人の方がより寄付をしている（for reviews, Bekkers & Wiepking, 2007; Wiepking & Bekkers, 2012）。貧しい人の方が豊かな人より寄付をするというのは、あくまで、「収入に対する寄付金額の割合」で見た場合の話である。しかしそれでも、この現象が常識的な予測とは一致しないことに変わりはない。なぜならば、生活に最低限必要な金額が一定であると考えると、豊かな人の方が余剰金額の割合が多くなる、つまり、寄付に費やすことができる金額の割合が多くなるためである。この場合、常識的には、収入が高いほど収入に対する寄付金額の割合も高くなることが自然であるように思われる。ただし、生活に最低限必要な金額は一定とは限らないかもしれない。貧しい人にとって車は必要ないかもしれないが、ある程度以上の収入を持つ人にとって車は必須のもので、さらに高収入の人にとっては高級な車を持つことが必須かもしれない。しかし、もし生活に最低限必要な金額が収入によって異なっており、どの収入層においても一定の割合が最低限必要であるとしても、貧しい人ほど収入に対する寄付金額の割合が高くなることは考えにくい。この場合、収入に対する寄付金額の割合は、収入に関わらず一定になることが自然であるように思われる。インディペンデント・セクターの元副研究長のVirginia Hodgkinsonは、人口の下位20%の収入を得ている人々は自身の許容範囲を超えるほど寄付している一方、上位40%の人々は現在寄付している割合の2～3倍は寄付に費やすことができる、と話している（Greeve, 2009）。

なお、確実な証拠はないものの、こうした「貧しい人の方が寄付をする」という現象は、日本においても生じていると考えられる。日本の調査の多くは収入や寄付金額について、「550～650万円」「1,000～5,000円」といった、範囲を示す選択肢を用いて回答させているため、収入に対する寄付金額の割合の正確な値を算出することは難しい。しかし、こうした範囲を示す選択肢についてはその中央を用いることとして（e.g., 「550～650万円」の場合は600万円とする）、おおよその値を算出すると、例えばJGSSの2005年のデータでは[2]、世帯収入が1千万円以上の人々は平均して年間0.05%しか寄付をしていないのに対し、世帯収入が150万円未満の人々は0.62%寄付をしていることが示される[3]。また、「くらしの好みと満足度

[2] 日本版 General Social Surveys（JGSS）は、大阪商業大学比較地域研究所が、文部科学省から学術フロンティア推進拠点としての指定を受けて（1999–2008 年度）、東京大学社会科学研究所と共同で実施している研究プロジェクトである（研究代表：谷岡一郎・仁田道夫、代表幹事：岩井紀子、副代表幹事：保田時男）。東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターがデータの作成と配布を行っている。データを提供して下さった当センターに感謝します。

[3] 収入について、「2 千 300 万円以上」という回答は「3 千万円」として計算している。また、寄付金額について「10 万円以上」という回答は「30 万円」として計算している。

についてのアンケート」の2012年データにおいても[4]、世帯年収が1千万円以上の人々は平均して年間0.37%しか寄付をしていないのに対し、世帯収入が200万円未満の人々は1.59%寄付をしていることが示される[5]。このように、欧米と比較すると総じて寄付金額の割合は小さいものの、日本においても、貧しい人の方が寄付をするという現象が生じていることが示唆される。

1－1－2　より詳細な関係

ここまでは主に、貧しさと寄付の関係を簡潔に記述した新聞記事を紹介したが、貧しさと寄付の関係については学術的な研究も数多くなされている（for reviews, Bekkers & Wiepking, 2007; Wiepking & Bekkers, 2012）。そして、それらの研究のいくつかでは、収入とそれに対する寄付金額の割合の関係は、より詳細には単純な線形ではなく、U字型であることが示されている。すなわち、最も貧しい人々と最も豊かな人々が、最も多くの割合を寄付に費やしていることが示されている（Andreoni, 2004; Auten, Clotfelter, & Schmalbeck, 2000; Clothelter & Steuerle, 1981; Hodgkinson & Weitzman, 1996; James III & Sharpe, 2007; Jencks, 1987; Schervish & Havens, 1995a, 1995b）。例えば、Andreoni（2004）では、世帯年収が1万ドル未満の人々は収入の4.8%、1万ドル以上2万ドル未満の人々は2.9%、2万ドル以上3万ドル未満の人々は2.3%、3万ドル以上4万ドル未満の人々は2.2%、4万ドル以上5万ドル未満の人々は1.3%、5万ドル以上6万ドル未満の人々は1.9%、6万ドル以上7万5千ドル未満の人々は2.0%、7万5千ドル以上10万ドル未満の人々は2.0%、10万ドルより多い人々は3.0%を、寄付に費やしていることが示されている（図1-1）。

他方、収入とそれに対する寄付金額の割合は単純な線形であることを示す研究もある。すなわち、収入に対する寄付金額の割合は、収入が増えるにつれてずっと減少していくことを示す研究もある（Breeze, 2004; Hoge & Yang, 1994; Independent Sector, 2002; McClelland & Brooks, 2004; Wiepking, 2004; Wiepking, 2007）。例えば、Independent Secotor（2002）では、世帯年収が2万5千ドル未満の人々は収入の4.2%、2万5千ドル以上5万ドル未満の人々は3.0%、

---

[4] 「くらしと好みの満足度についてのアンケート」は、大阪大学 21 世紀 COE プロジェクト「アンケートと実験によるマクロ動学」及びグローバル COE プロジェクト「人間行動と社会経済のダイナミクス」によって実施されている。本アンケート調査の作成に寄与された、筒井義郎、大竹文雄、池田新介の各氏に感謝します。

[5] 収入について、「2 千万円以上」という回答は「2 千 100 万円」として計算している。また、寄付金額について「100 万円以上」という回答は「300 万円」として計算している。

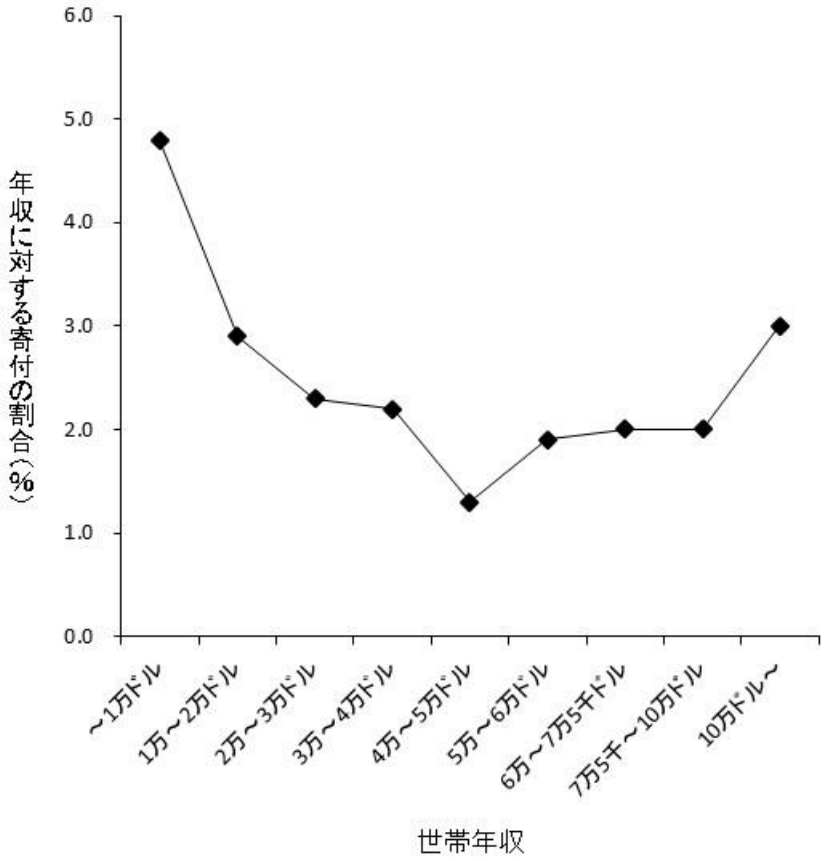


図1-1　世帯年収ごとの寄付に費やされた金額の割合

（Andreoni（2004）を基に作成）

5万ドル以上7万5千ドル未満の人々は3.0%、7万5千ドル以上10万ドル未満の人々は2.7%、10万ドルより多い人々は2.7%を、寄付に費やしていることが示されている（図1-2）。

このように、より詳細な関係については、知見が一貫しない点もある。U字型であることを示す研究はすべてアメリカにおける調査データに基づく一方、単純な線形であることを示す研究にはイギリス（e.g., Breeze, 2004）やオランダ（e.g., Wiepking, 2004; Wiepking, 2007）における調査データを用いた研究が含まれるため、最も豊かな人々がより寄付をするかどうかは、国によって異なるのかもしれない。しかし、単純な線形であることを示した研究の中にはアメリカにおける調査データに基づいたものもあるため（e.g., Independent Sector, 2002; McClelland & Brooks, 2004）、国による差異というよりは、各研究が用いている調査データの取得方法による差異である可能性もある。例えばHavens, O'Herlihy & Schervish（2007）

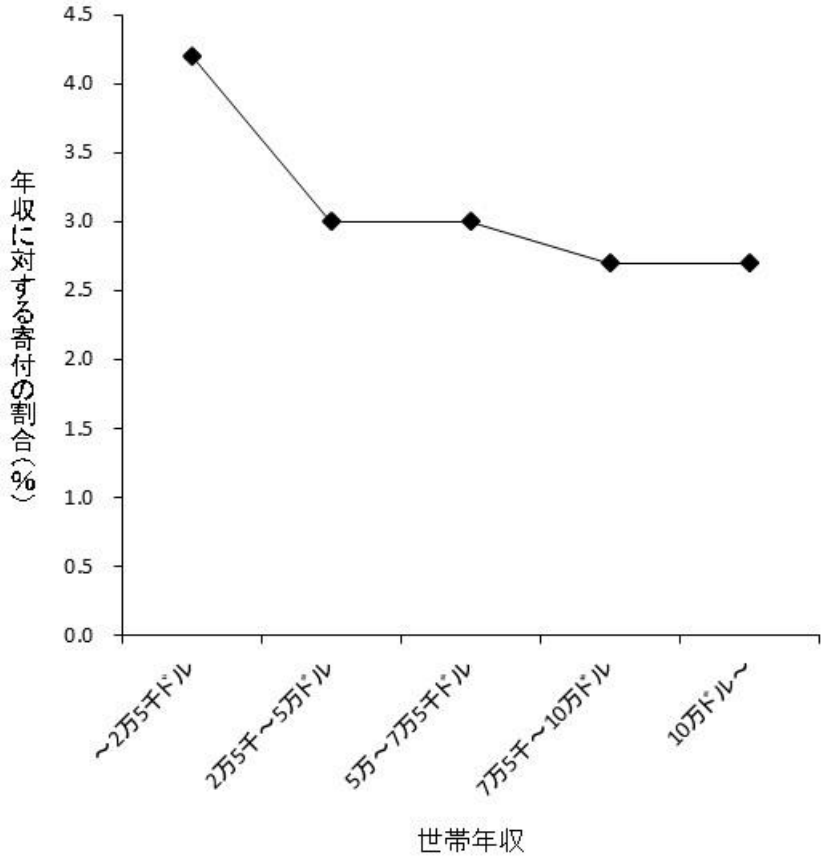


図1-2　世帯年収ごとの寄付に費やされた金額の割合

（Independent Sector（2002）を基に作成）

は、単純な線形が見られた研究では、極端に豊かな人々がサンプルに含まれていないために、U字型が見られなかった可能性を指摘している。ビル・ゲイツ、マック・ザッカーバーグ、孫正義のように、莫大な額を寄付している大富豪がいることは有名であるが、そういった極端な富裕者がこうした社会調査のサンプルに含まれるかどうかは偶然に左右されるところもあり、それが、U字型になるか単純な右肩下がりの線形になるかに影響しているのかもしれない。

ただし、このように一貫していない点がある一方で、一貫している知見もある。それは、最も豊かな層を除けば、貧しい人の方がより寄付をしていることである。ほとんどすべての研究において、貧しい人の方が収入に対する寄付金額の割合が高いことが示されている。

なお、「収入に対する寄付金額の割合」だけでなく、「寄付をする人の割合」に関しても、

知見が一貫しない点がある。いくつかの研究では、寄付をする人の割合は収入が高いほど高いことが示されている（Andreoni 2004; Banks & Tanner, 1999; James III & Sharpe, 2007; Regnerus, Smith, & Sikkink, 1998; Rooney, Steinberg, & Schervish, 2001; Schervish & Havens, 1995a）。他方、寄付をする人の割合と収入には関係がないことを示す研究もある（Smith, Kehoe, & Cremer, 1995; Wiepking, 2007）。ただし、前者の場合でも、ある一定の割合以上を寄付している人の割合でみると（e.g., 10%, James & Sharpe, 2007）、貧しい人の方が寄付をする人の割合が高い（図1-3）。そのため、いずれにしても、直感的な予測（豊かな人の方がより寄付をする）とは一致しない部分がある。

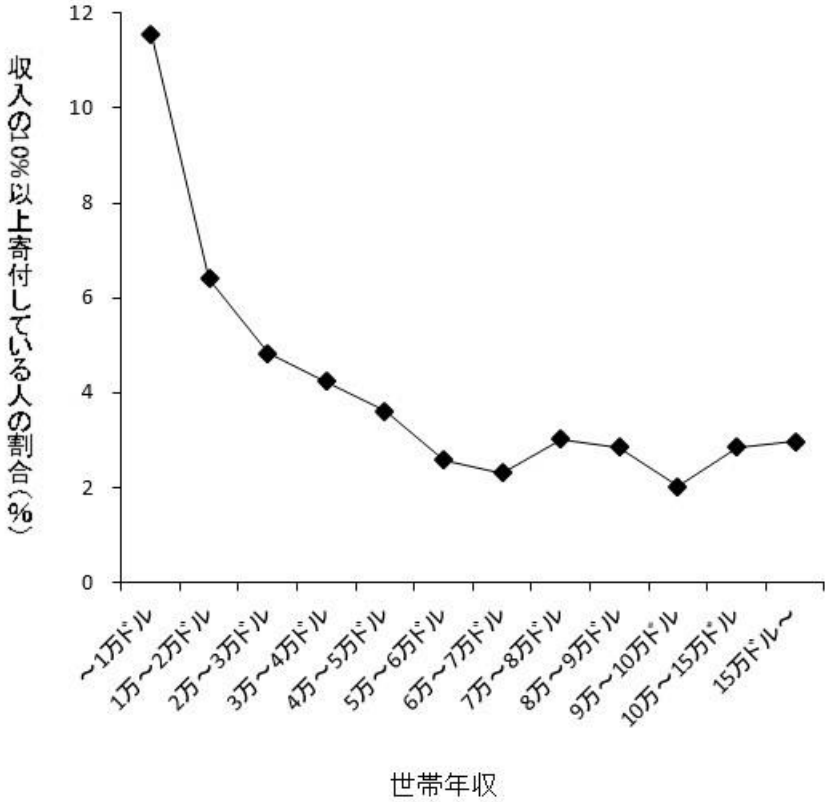


図1-3　世帯年収ごとの、収入の10%以上を寄付している人の割合

（James III & Sharpe（2007）を基に作成）

以上を簡単にまとめると、詳細な関係については知見が一致しない部分もあるものの、直感的な予測（豊かな人ほど寄付をする）に反して、貧しい人でも（あるいは貧しい人ほど）寄付をすることについては、多くの研究で一貫して示されている。

1－1－3　寄付金控除の影響

ここまで、直感的には「豊かな人の方が貧しい人より寄付をする」と予測される理由として、豊かな人の方がお金を持っていることを挙げていた。しかし実は、別の理由からも、「豊かな人の方が貧しい人より寄付をする」と予測される。それは、豊かな人の方が貧しい人より寄付税制の恩恵を受けやすいためである。

アメリカにおける寄付金控除を例に挙げて説明しよう。アメリカの所得控除方法には、概算控除と項目別控除の2種類があり、そのうちの有利な方法を選択して控除することができる。項目別控除には、医療費、固定資産税、消費税、支払利息などがあり、寄付金も控除項目の1つに含まれている。概算控除は控除される金額が決まっているため、項目別控除を選択した方が有利な豊かな人のみが、寄付金控除が受けられることになる。また、寄付金控除の方法は税額控除ではなく所得控除であるため、収入が多い人の方が寄付金控除を多く受けられることになる。つまり、豊かな人の方が寄付税制の恩恵を受けやすいのである。このアメリカの例と同様に、イギリスやオランダにおいても、所得が多い人の方が寄付金控除を多く受けることができる。

このように、寄付税制によって、豊かな人における寄付のコストがさらに小さくなる。それにも関わらず、貧しい人の方が豊かな人よりも寄付をするのである。いったいなぜ、貧しい人は寄付をするのであろうか。

1－2　宗教性・年齢・寄付額の相場という観点からの説明

1－2－1　宗教性という観点からの説明

初期の研究は、貧しい人の方が豊かな人より寄付をする理由として、宗教性の違いを指摘してきた（Andreoni, 2004; Iannaccone, 1988; Jencks, 1987; Schervish & Havens, 1995a）。例えばIannaccone（1988）では、宗教的組織をチャーチ型組織とセクト型組織[6]に分け、各組織に所属する人々の年収・学歴・組織へ参加する程度・組織への寄付などが比較されている。そしてそこでは、セクト型組織に所属する人々は、チャーチ型組織に所属する人々よりも、年収と学歴が低く、組織へ参加する程度と組織への寄付が高いことが示されている。この結果は、貧しい人の方が豊かな人よりも寄付を行うのは、貧しい人が豊かな人とは異なるタイプの宗教的組織に所属していることが多く、組織へのコミットメントが高く、結果として、組織への寄付が多いためである可能性を示唆している。

しかし、宗教関連の寄付とそうでない寄付に分けて分析したその後の研究では、宗教関連でない寄付においても、貧しい人の方が寄付をする傾向が認められている（James III & Sharpe, 2007; Schervish & Havens, 1995b; Wiepking, 2007）。例えば、James III & Sharpe（2007）では、図1-4のように、貧しい人の方が寄付をする傾向は特に宗教関連の寄付において強く見られるものの、宗教関連でない寄付においても見られている。また、Wiepking（2007）では、そもそも貧しい人の方が宗教関連の寄付をするという現象が認められていない。そのため、宗教性という観点だけでは、貧しい人ほど寄付をするという現象を十分に説明できない。

1－2－2　年齢という観点からの説明

いくつかの研究は、貧しい人の方が豊かな人より寄付をするという現象には、年齢が影響している可能性を指摘している（Andreoni, 2004; James III & Sharpe, 2007）。例えばAndreoni

[6] Max Weber がや Ernst Troeltsch が提案した宗教組織の分類。セクト型組織は閉鎖的（exclusive）で、小さく、禁欲主義的であり、世俗的社会と優勢なチャーチを無視あるいは拒否し、官僚的組織を持っていない。チャーチ型組織は反対に、包含的（inclusive）で、大きく、個人に関与せず（impersonal）、官僚的で、現存する社会秩序を受け入れ、それに順応する。

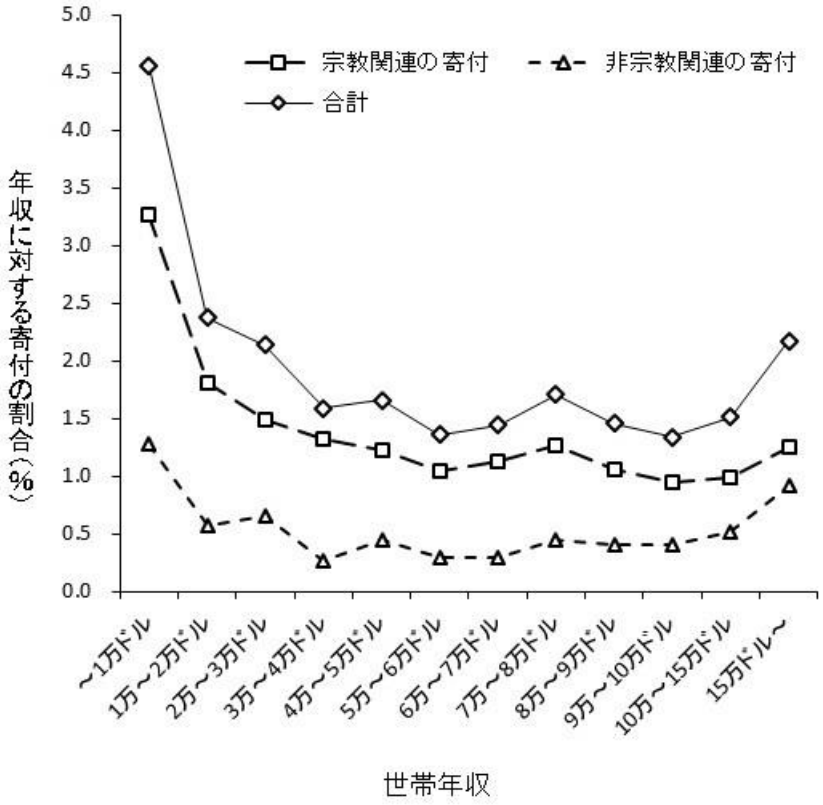


図1-4　年収・寄付先ごとの寄付に費やされた金額の割合

（James III & Sharpe（2007）を基に作成）

（2004）は、収入が低い人は若者であることが多く、彼らは将来収入が上がると考えているため、寄付に多くのお金を費やすのだと議論している。この主張とは中身が異なるが、James III & Sharpe（2007）も、年齢が影響している可能性を指摘している。彼らは、低所得者の中で収入の多くの割合を寄付に費やす人は、すでに退職をしており、収入はほとんどないが資産は持っている高齢者であると議論している。実際に彼らの分析では、収入の10%以上を寄付に費やす高割合寄付者においては65歳以上が43%であるのに対し、非高割合寄付者のうち65歳以上であるのは23%のみであることが示されている。

しかし、年齢という観点からの説明も、十分な説明を提供しない。James III & Sharpe（2007）の議論からは、収入というよりは支出金額ごとに、寄付に費やした割合を見るのが適切であることが考えられる。なぜならば、退職をした高齢者は収入はないものの、資産をもとに支出は行うと考えられるためである。しかし、そのような分析を行っても、標準誤差がある程

度大きくなるものの、依然としてU字型は残っていた（James III & Sharpe, 2007）。また、Wiepking（2007）では、年齢の影響を統制しても、収入の低さが寄付に費やす割合の高さを有意に予測することが示されている。このように、年齢という観点でも、貧しい人ほど寄付をするという現象を十分に説明することはできない。

1－2－3　寄付額の相場という観点からの説明

他の研究は、寄付額の相場が影響している可能性を指摘している（Wiepking, 2007; Wiepking & Heijnen, 2011）。すなわち、人は一般的に「1回の寄付で支払う金額は○○くらいである」という考えを持っており、その金額が収入層に関わらず広く共有されているために、結果として、収入が低い人の方が収入に対する寄付の割合が高くなっている、という可能性が指摘されている。実際に、Wiepking & Heijnen（2011）は、「1回の寄付で支払うべきと考える寄付額」について、若干のU字型が見られる場合もあるものの、収入層による違いは統計的に有意とはならないことを報告している。

寄付額には相場が存在するという事実は、収入が少ない人ほど収入に対する寄付金額の割合が高いという現象をある程度説明する可能性があるが、説明が難しい部分もある。なぜならば、「1回の寄付で支払う寄付額」に相場があるならば、お金に余裕がない貧しい人は寄付をする回数を減らせばよいためである。また、相場があるとしても、実際にそれに従う必要はない。お金がなく生活が苦しければ、相場より少ない金額を寄付するのが自然であろう。それにも関わらず、なぜ、貧しい人は多くの割合を寄付に費やすのであろうか。

1－3　利他性という観点からの説明

1－3－1　社会経済的地位と社会的認知傾向

近年の心理学研究は、貧しい人ほど寄付をするのは、貧しい人と豊かな人の間で利他性に関わる社会的認知傾向に差異が存在するためであることを示唆している。

Kraus, Piff, et al.（2011）やKraus et al.（2012, 2013）は、関心対象・健康・文化が社会経済的地位[7]によって異なるように、社会的認知傾向も社会経済的地位によって異なると議論している（図1-5）。人は、収入・学歴・職業的地位といった社会経済的地位の構成要素を周囲の他者と比較することで、他者と比べた社会経済的な順位を知覚し、主観的な社会経済的地位を形成する。社会経済的地位が低いと感じている人は、生活において脅威や不確実性が多かったり、行為や社会的機会が制限されたりしている。このように慢性的に外的な力を知覚しているため、社会経済的地位が低い人は、それらとうまくやっていくための文脈主義的な社会的認知傾向（contextualist social cognitive tendency）をとりやすいと議論されている。他方、社会経済的地位が高いと感じている人は、自分の目標や関心を自由に追求したり、他者をコントロールしたり、多くの選択肢から希望するものを選択をできることが多い。このように慢性的に自由を経験しているため、社会経済的地位が高い人は、自分の心こそが自分の思考や行動に最も重要な影響を与えるものであるとする、唯我論的な社会的認知傾向（solipsistic social cognitive tendency）をとりやすいと議論されている。

実際に、これまでの実証研究の多くは、こうした議論から導かれる予測と一致する結果を示している（for reveiws, Kraus, Piff, et al., 2011; Kraus et al., 2012, 2013）。例えば、出来事を説明する際に、社会経済的地位が低い人は文脈や環境の影響に注目する一方、社会経済的地位が高い人は個人の特性の影響に注目することが示されている（Grossmann & Varnum, 2011; Kraus, Piff, & Keltner, 2009; Varnum, Na, Murata, & Kitayama, 2012）。Kraus et al.（2009）は、参加者に経済格差が縮小あるいは拡大していることを示す図を提示し、その原因として、文脈

[7] 社会経済的地位（socioeconomic status）ではなく、社会階層（social class）と呼ぶ研究もあるが、本章で紹介する最近の心理学研究の多くは、両者をほとんど同義のものとして扱っているため、ここでは社会経済的地位と呼ぶこととする。

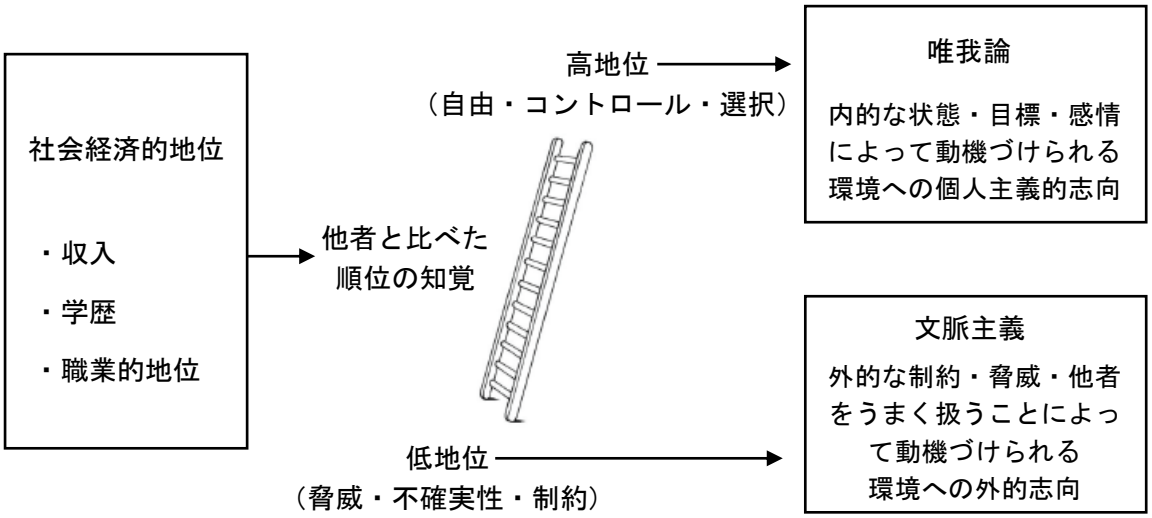


図1-5　社会経済的地位が社会的認知傾向に及ぼす影響についての概念的モデル[8]

（Kraus, Piff, et al.（2011）とKraus et al.（2012, 2013）を基に作成）

的な要因（e.g., 相続財産・政治・教育機会・偏見や差別）と特性的な要因（e.g., 野心・能力や才能・努力・お金の管理能力）が、それぞれどの程度寄与していると思うかを評定させた。その結果、主観的社会経済的地位が低い人は文脈的な要因の影響力を高く評定していた一方、主観的社会経済的地位が高い人は特性的な要因の影響力を高く評定していた。経済格差の縮小・拡大だけではなく、様々なポジティブな結果（e.g., 医学部への入学・適切なヘルスケアを受けていること・本の出版）やネガティブな結果（e.g., エイズへの感染・肥満であること・仕事を解雇されること）についても、同様に、主観的社会経済的地位が低い人は個人外の責任に帰属する一方、主観的社会経済的地位が高い人は個人の責任に帰属する傾向が見られた。Varnum et al.（2012）は、外的あるいは内的な事象に時間的に関連して生じる脳の一過性の電位変動である、事象関連電位を測定する実験を行った。より具体的には、期待に反する刺激を知覚した約400ms後に生じる陰性の電圧変位である、N400（Kutas & Hillyard, 1980）に着目して実験を行った。Varnum et al.（2012）は、まず記憶課題として参加者に、顔写真と2つの文章がセットになったものをいくつか提示した。2つの文章は同じ1つ

[8] 図中の梯子は主観的社会経済的地位を意味する。このような梯子は実際に、欧米の研究において、主観的社会経済的地位を測定する際に最もよく用いられる。回答者は梯子において自分が何段目に位置するか答えるよう求められる（e.g., Adler, Epel, Castellazzo, & Ickovics, 2000）。

の特性を示唆する行動についての文章であった（e.g., 彼女はセールスマンが説得するすべての点を疑った、彼女は自分に同意しない人なら誰でも疑った）。そして記憶課題の後、語彙性判断課題を行ってもらった。この語彙性判断課題は、実際には、顔と特性の連合を測定するものであった。具体的には、まず、さきほど記憶した顔写真が注視位置固定点として現れ、その後、その顔写真とセットで示された文章が表す特性と一致する単語（e.g., 注意深い）、反対の単語（e.g., 不注意な）、擬似語のいずれかが現れた。参加者は現れた単語が意味を持つ単語かどうかを判断した。もし記憶課題において各行動を個人に帰属していた場合（i.e., 顔と特性を連合させていた場合）、語彙性判断課題において、顔写真と対で提示された特性と一致しない単語（e.g., 不注意な）が出てきたとき、N400が強く見られると考えられる。分析の結果、大卒の参加者においてはそのような傾向が見られた一方、高卒の参加者においてはそのような傾向が見られなかった。これは、記憶課題において、大卒の参加者は行動を個人に帰属していた一方、高卒の参加者はそうしていなかったことを示唆している。要するに、これらの研究結果は、上述した社会経済的地位と社会的認知傾向に関する議論と一致して、社会経済的地位が低い人は文脈や環境に関する事柄の影響に注目する一方、社会経済的地位が高い人は個人の特性の影響に注目しやすいことを示している。

社会経済的地位に伴う社会的認知傾向の違いは、出来事や行動の解釈の仕方だけでなく、他者への注意や関心にも影響を及ぼすことが示されている。すなわち、唯我論的な社会的認知傾向を持つ高地位者は他者に注意や関心を払いにくい一方、文脈主義的な認知傾向を持つ低地位者は他者に注意や関心を払いやすいことが示されている（Dietze & Knowles, 2016; Kraus & Keltner, 2009）。Kraus & Keltner（2009）は、お互いに初対面の大学生の参加者をペアにして5分間の会話をさせ、その様子を観察した。その結果、親の学歴と世帯年収の合算指標が低い参加者ほど、笑顔・注視・うなずきといった他者に関心を示す行動を多くとっており、親の学歴と世帯年収が高い参加者ほど、手遊びやいたずら書きといった他者への関心の欠如を示す行動をとっていた。Dietze & Knowles（2016）は、Google Glassのビデオ機能を用いて歩行中に人を注視している時間を計測したり、アイトラッキングシステムを用いて道路の写真を見ているときに人を注視している時間を計測したりした。その結果、主観的社会経済的地位が低い人ほど、人を注視している時間が長かった。これらの研究結果は、社会経済的地位が低い人の方が、他者に注意や関心を払いやすいことを示している。

社会経済的地位に伴う社会的認知傾向の違いは、他者の感情推論の正確性にも影響を及ぼすことが示されている。すなわち、唯我論的な社会的認知傾向を持ち、他者にあまり注意

や関心を払いにくい高地位者は、他者の感情推論が不正確になりやすい一方、文脈主義的な認知傾向を持ち、他者に注意と関心を払いやすい低地位者は、他者の感情推論が正確になりやすいことが示されている（Kraus, Côté, & Keltner, 2010; Nakashima & Lee, 2016）。例えばKraus et al.（2010）は、ある大学の職員を対象に、顔写真から感情を推測する課題の成績と学歴との関連を調査した。その結果、高卒の職員の方が大卒の職員よりも成績がよかった。また別の調査では、2人の大学生参加者をペアにし、同時に模擬面接を受けさせ、その後、面接時の自分の感情と相手の感情を評定させた。その結果、主観的社会経済的地位が低い人ほど、ペアとなった相手の模擬面接時の感情を正確に推論していたことが示された。Nakashima & Lee（2016）のある研究では、被排斥場面を取り上げて同様のことが検討されている。その結果、主観的社会経済的地位が低い人ほど、被排斥者の心理的痛みやネガティブ感情を正確に推測できていたことが示された。これらの研究結果は、社会経済的地位が低い人の方が、他者の感情を正確に推論しやすいことを示している。

以上のように、近年の心理学研究の多くは、Kraus, Piff, et al.（2011）やKraus et al.（2012, 2013）の議論と一致して、社会経済的地位が高い人は唯我論的な認知傾向を持つ一方、社会経済的地位が低い人は文脈主義的な認知傾向を持つことを示している。なお、Kraus et al.（2013）は、こうした社会的認知傾向の差異を生み出すものの本質は、実際の社会経済的地位ではなく、「他者と比べた順位の知覚」であると議論している。実際に、上に挙げた研究のいくつかにおいても、客観的な社会経済的地位より、主観的な社会経済的地位の方が予測力が高いことが報告されている（Dietze & Knowles, 2016; Kraus et al., 2009）。また、主観的社会経済的地位を実験的に操作した場合でも、社会経済的地位を測定した場合と同様の結果が得られることが示されている。例えばいくつかの研究では、低社会経済的地位条件では社会経済的地位が高い人々を、高社会経済的地位条件では社会経済的地位が低い人々をイメージさせ、その後、イメージした人々との相互作用を想像させるといった方法で、主観的社会経済的地位を操作している（Kraus et al., 2010; Kraus, Horberg, Goetz, & Keltner, 2011; Piff, Stancato, Cote, Mendoza-Denton, & Keltner, 2012; Piff, Kraus, Côté, Cheng, & Keltner, 2010）。他の研究では、高社会経済的地位条件では高社会経済的地位を連想させる衣服（i.e., ビジネススーツ）を、低社会経済的地位条件では低社会経済的地位を連想させる衣服（i.e., スウェットとTシャツ）を着用させている（Kraus & Mendes, 2014）。このように主観的社会経済的地位を操作した場合でも、社会経済的地位を測定した場合と同様の結果が得られることが示されている。これらは、社会経済的地位に伴う社会的認知傾向の差異を生み出すものの本質

は、客観的な社会経済的地位や実際に保有する物質的資源の量ではなく、「他者と比べた順位の知覚」であることを示唆している。

1－3－2　社会経済的地位と利他性

社会経済的地位が低い人の方が他者に注意や関心を払いやすいこと、また、共感的配慮という利他的な感情は他者の欲求の知覚によって喚起すること（for a review, Batson, 2010）を考慮すると、社会経済的地位が低い人の方が共感的配慮を感じやすいことが考えられる。実際にいくつかの研究が、この予測と一致する結果を示している（Stellar, Manzo, Kraus, & Keltner, 2012; Varnum, Blais, Hampton, & Brewer, 2015）。Stellar et al.（2012）は、階層帰属意識と日常で感じる共感的配慮の関係を調査した。その結果、主観的社会経済的地位が低い人ほど、普段から他者に対して共感的配慮を感じやすいことが示された。また別の調査では、大学生参加者に、癌に苦しむ子どもとその家族の映像を見せ、そのときに感じた共感的配慮の自己報告と、心拍数を測定した。なお、心拍数の低下は、共感的配慮の喚起と関係しており、対象への援助行動を予測することが示されている（Eisenberg, et al., 1989; Eisenberg et al., 1991）。分析の結果、親の学歴と世帯年収の合算指標が低いほど、映像視聴時に感じた共感的配慮を高く報告しており、心拍数が低かったことが示された。Varnum et al.（2015）は、事象関連電位、より具体的にはP200に着目した実験を行った。P200は、苦痛を表出している他者や、痛みを伴う出来事を経験している他者を目撃した約200ms後に生じる陽性の電圧変位で、共感と関連している脳活動である（Fan & Han, 2008; Sheng & Han, 2012; Sheng et al., 2013）。Varnum et al.（2015）は、苦痛の表情を示す顔写真、無表情の顔写真、渦巻きの模様を参加者に見せ、そのときの脳活動を計測した。その結果、主観的社会経済的地位や親の学歴が低い参加者ほど、苦痛の表情を示す顔写真を提示されたときのP200が強かったことが示された。これらの研究結果は、社会経済的地位が低い人の方が共感的配慮を感じやすいことを示している。

社会経済的地位が低い人は共感的配慮を感じやすいだけでなく、実際に利他的な行動をとりやすいことも示されている（Callan, Kim, Gheorghiu, & Matthews, in press; Dubois, Rucker, & Galinsky, 2015; Guinote, Cotzia, Sandhu, & Siwa, 2015; Piff et al., 2010）。例えば、Piff et al.（2010）のある実験では、苦痛の表情を示しながら実験に遅刻したことを謝罪するペアの参加者（実際は実験協力者）のために、参加者がどれほど援助行動をとるかを測定した。援助

行動の指標は、2人で行わなければいけない9つの課題のうち、自分が行う課題として、時間のかかる（負担の重い）課題をどれほど選択するかであった。分析の結果、幼少期と現在の収入の合算指標が低い参加者ほど、時間のかかる課題を選択していた、つまり、もう1人の参加者（実際は実験協力者）を援助しようとしていたことが示された。Dubois et al.（2015）は、社会経済的地位と反倫理的行動の関係を検討した。その中のある実験では、反倫理的行動を行う8つのシナリオを提示し、それぞれについて、自分ならその状況においてどの程度、当該行動を行うかを回答させた。その際、反倫理的行動が自己を利する条件と、他者を利する条件の2つがあった（e.g., 自分／友人がお腹を空かせているために、アルバイトをしているファーストフードレストランで、誰も見ていないときに、お金を払わずに食べ物をくすねる）。分析の結果、反倫理的行動が自己を利する場合には、主観的社会経済的地位が高い人ほど当該行動を行う意図が高かった一方、反倫理的行動が他者を利する場合には、主観的社会経済的地位が低い人ほど当該行動を行う意図が高かった。このように、社会経済的地位が低い人の方が利他的な行動をとりやすいことが示されている。

しかし、いつも社会経済的地位が低い人の方が利他的であるとは限らない。なぜならば、人は利己的な理由によって利他的に振る舞う場合もあるからである。例えば、利他的な行動には、自身の評判や印象をよくする（悪くしない）という機能がある（Flynn, Reagans, Amanatullah, & Ames, 2006）。また、自身の評判や印象への関心は、社会経済的地位が低い人より高い人において高い（Hart & Edelstein, 1992; Weininger & Lareau, 2009）。これらから、唯我論的な認知傾向を持ち、自己の目標や感情に基づいて行動しやすい傾向を持つ、社会経済的地位が高い人においては、利他的な行動が自身の評判や印象に影響を及ぼす場合に、利他的に振る舞いやすいことが考えられる。実際に、Kraus & Callaghan（2016）のある研究では、他者の目に触れやすいアイスバケツチャレンジ[9]への参加は、社会経済的地位が低い人々より高い人々において多いことが示されている。別の研究では、社会経済的地位が高い人は、匿名性の確保された通常の独裁者ゲームより、分配者の名前と都市情報が公開されると教示された匿名性の低い独裁者ゲームにおいて、多くの額を分配することが示されている[10]。またこの傾向は、「利他的な行動は誇り（pride）という感情によって動機づけられる」とい

[9] 筋萎縮性側索硬化症（ALS）の研究を支援するため、バケツに入った氷水を頭からかぶるか、またはアメリカ ALS 協会に寄付をする運動。参加者は、アイスバケツチャレンジに参加することを宣言し、続いてバケツに入った氷水を頭からかぶり、その後、このチャレンジを受けてもらいたい人物を 2～3 名程度指名する。そしてこの様子を撮影した動画を、フェイスブックやツイッターなどの SNS 上で公開する。指名された人は、「氷水をかぶる」「100 ドルを ALS 協会に寄付する」のいずれか、あるいは両方を行う。
[10] 社会経済的地位が低い人は、反対に、匿名性が高い状況でより利他的に振る舞っていた。

う考えにより、部分的に説明されていた。これは、社会経済的地位が高い人は相手ではなく自分のために、利他的に振る舞いやすいことを示唆している。このように、利他的な行動が自身の評判や印象に及ぼす影響が特に大きい場合には、社会経済的地位が高い人の方が利他的に振る舞いやすいことが示唆される。

まとめると、近年の社会経済的地位と社会的認知傾向に関する議論や実証研究の結果は、社会経済的地位が低い人は他者に利他的な感情（共感的配慮）を感じやすく、結果として、利他的な行動を行いやすい一方、社会経済的地が高い人は利己的な理由（評判や印象の上昇・維持）のために、利他的な行動を行いやすいことを示唆している。

1－3－3　利他性という観点からの説明

以上の知見は、貧しい人ほど寄付をするのは、貧しい人は社会経済的地位が低いために、他者に注意や関心を払いやすく、利他的な動機づけが高まりやすいためであることを示唆している。これは、収入層による寄付先の違いとも、整合的である。Stern（2013）によると、アメリカにおいて、貧しい人は宗教や社会奉仕に関する組織に寄付をする傾向がある一方、豊かな人は大学や芸術に関する組織に寄付をする傾向があるという。アメリカの慈善団体の評価機関であるCharity NavigatorのCEOのKen Bergerも、貧しい人は福祉に関する組織に寄付をする傾向がある一方、豊かな人は芸術・大学・ヘルスケアに関する組織に寄付をする傾向があると述べている（Rogers, 2013）。イギリスにおいては、貧しい人は子ども・ホームレス・高齢者を支援する組織に寄付をする傾向がある一方、豊かな人は環境のための組織に寄付をする傾向があることが示されている（Reed, 1998）。このように、概して、貧しい人は苦境にいる他者などを援助する組織に寄付を行いやすいという傾向は、心理学研究における議論と一致して、貧しい人ほど寄付をするのは、彼らが利他的な動機づけを感じやすいためであることを示唆している。

また、一部の研究が示す、特に豊かな人も多くの割合を寄付に費やすという現象は、豊かな人は自身の評判や印象への関心が高く、他者に知られる状況で寄付を行いやすいためであることが示唆される。実際に、4億ドルをハーバード大学に寄付したJohn Paulsonは、メディアでも大きく取り上げられた。そのうえ、寄付先のSchool of Engineering and Apllied Sicencesは彼の名にちなみ、Harvard John A. Paulson School of Engineering and Applied Sciencesとなると言われている（e.g., Lewin, 2015; Weissmann, 2015）。アメリカにおいてトヨタのプリウス

がセレブに人気であった理由も、豊かな人が寄付をする背景に利己的な感情が存在する可能性を示唆している。トヨタのプリウスはハイブリッド車で環境に優しいが、値段は安くはない。ある購入者はそれを購入した理由について、「私のプリウスは、私が社会に配慮するすばらしい人間であることを世界に伝えてくれる」と語っている（Maynard, 2007）。このことも、豊かな人は、自身の評判や印象を高めるために、多額の寄付を行いやすいことを示唆している。

1－4　残されている謎

ここまで見てきたように、近年の心理学研究は、貧しさと関連するであろう主観的社会経済的地位の低さが、他者に対する注意や関心を高め、結果として、苦境にいる他者に対する利他的動機づけを高めやすいことを示している。それゆえ、貧しい人の方が他者を援助することは十分に予測できる。この際、合理的な観点から考えれば、金銭的援助でなく、その他の援助（e.g., 時間的援助としてのボランティア）を行うべきであろう。なぜならば、彼らはお金を十分に持っていないからである[11]。しかし彼らは、寄付以外の援助をあまり行わない。

例えば、2001年のインディペンデント・セクターによる調査では、世帯収入が7万5千ドル以上の人々は2人に1人以上の人がボランティアを行っているのに対し、2万5千ドル未満の人々は4人に1人の割合でしか行っていないことが明らかにされている（Independent Sector, 2002）。また、アメリカにおいて献血を行っている人の割合は、世帯収入が低い人より高い人において高いことも示されている（Boulware et al., 2002; Moss, 1976）。同様にPutnam（2001）も、大卒者は高卒以下の者と比べて倍の割合で、過去1年間にボランティア・献血を行っていたことを明らかにしている。さらに、2007年と2009年のオランダにおける調査では、献血を行った人は、初等教育までしか受けていない人々においては約1%で、中等教育まで受けた人々においては3～4%、それ以上の学歴を持つ人々においては5%以上となっており、学歴が低くなるにつれて献血を行う割合が少ないことが示されている（Van den Berg & Frenken, 2010）。Bekkers（2004）においても、学歴は献血・ボランティア経験を正に予測し、世帯収入は献血・ボランティア経験と無関連であることが示されている。Trautmann, Kuilen, & Zeckhauser（2013）においても、資産や収入は1週間当たりのボランティア時間を予測せず、学歴は正に予測することが示されている。このように、寄付以外の援助については、特に貧しい人の方が行うという傾向は見られない。

こうした知見は、貧しい人は他者を援助する際に、特にお金による援助を選択しやすいことを示唆している。しかし、これは合理的な観点から考えると、逆説的である。なぜならば、

[11] 一般的にはお金を稼いでいる豊かな人の方が忙しいように思われるが（例えば古川・山下・八木（1993）では、年収は時間的ゆとりと負の関連があることが示されている）、「貧乏暇なし」という言葉にあるように、貧しい人の方が時間的ゆとりもない可能性もあり、この点について明確な結論は下せない。

合理的な観点から考えると、お金を持っていない人は、他者を助けたいと思った場合でも、お金以外の方法でそれを遂行すべきであると考えられるためである。

なぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのであろうか。貧しさと寄付のパラドクスについて残されているこの謎について、本論文では、「欠乏感」に着目した検討を行う。

第 2 章　なぜ貧しい人はわざわざ自身に不足している お金を差し出すのか

2－1　欠乏感とその影響

2－1－1　欠乏感とは

欠乏感に関する体系的な研究は、行動経済学において、近年始まった。そこでは、欠乏とは、自分の持っている量が必要と感じる量より少ないことと定義されている（Mullainathan & Shafir, 2013）[12]。例えば、ある研究者が研究のために実験機器を購入したり、参加者をリクルートしたり、実験者を雇ったりしたいと思ったものの、研究費の少なさが原因でそれができないとき、その研究者は金銭的な欠乏を感じると考えられる。また、上記の定義に従えば、欠乏はお金以外の様々な資源についても生じることになる。例えば、書かなければならない論文があるものの、授業の準備・学会発表の準備・家庭の用事など、他にもしなければならないことが多くあり、必要な時間を確保できないとき、その人は時間的な欠乏を感じると考えられる。また、人には他者と繋がっていたいという基本的な欲求があるため（e.g., Baumeister & Leary, 1995; Deci & Ryan, 2000）、他者から除け者にされ続けたり、他者との交流を何週間あるいは何ヶ月も絶たれたりした場合、その人は他者との繋がりの欠乏を感じると考えられる。このように、定義的には、欠乏感は生活において必要な様々な資源について生じうる。

主観的社会経済的地位の低さと金銭的欠乏感は、ともに貧しさに伴う感覚である。貧しい人は収入や学歴や職業的地位が低いために、自身の社会経済的地位は低いと感じるだろう。

[12] 近年の（主に心理学）研究には、欠乏（Scarcity）という表現を用いて、「資源獲得の不確実性（e.g., 不況）」を扱ったものも見られる（e.g., Griskevicius et al., 2013; Rodeheffer, Hill, & Lord, 2012）。「資源獲得の不確実性」は、本章における欠乏の定義である「必要量に対する保有量の不足」とは異なるため、本章におけるレビューからは除外する。

また、貧しい人は収入や資産が少ないために、生活に必要なお金が不足していると感じることも多いだろう。

このように、貧しい人は社会経済的地位の低さと金銭的欠乏の両方を感じることが多いと考えられるが、両者は同じものではない。先述のとおり、社会経済的地位の低さは、他者との比較をとおして感じるものであり、その本質は「順位の低さ」である（Kraus, Piff, et al., 2011; Kraus et al., 2012, 2013）。他方、金銭的欠乏は、自身の持っているお金の量と必要と感じるお金の量の比較をとおして感じるものであり、その本質は「資源の不足」である（Mullainathan & Shafir, 2013）。このように、主観的社会経済的地位と金銭的欠乏感には、個人間あるいは個人内の比較をとおして生じるものか、その本質は「順位の低さ」か「資源の不足」か、という違いがあり、2つは異なる概念であると考えられる。

2－1－2　欠乏感の影響：トンネリング

欠乏感に関する近年の研究では、欠乏を感じると、当該欠乏が関わることへは集中するようになる一方で、無関連なことを処理する能力は低下することが示されている（for a review, Mullainathan & Shafir, 2013）。こうした欠乏感の影響は、比喩的に「トンネリング」と呼ばれている。トンネルの中に入ると、中のことはよく見えるようになる一方、トンネルの外のことは見えなくなってしまうためである（Mullainathan & Shafir, 2013）。

欠乏感により集中が高まる例としては、締め切り前の集中が挙げられる。例えば、ある論文を書き上げなければならないことがわかっていても、締め切りまでまだ余裕があるときは、なかなか集中してそれに取り組まないことがある。打ち合わせ・講義の準備・学会発表の準備・メールの返信など、やらなければならないことは他にもたくさんあるためである。しかし、締め切りが迫ってくると（i.e., 時間的欠乏を感じると）、そうも言っていられなくなる。必要のない打ち合わせはキャンセルし、講義・学会発表の準備やメールの返信は後回しにする。そして、目前に迫った論文の執筆にできる限りの精力を注ぐ。このように我々は、欠乏を感じることによって、集中して取り組むことがある。

欠乏感により集中が高まることを示す実証研究として、例えば、Ariely & Wertenbroch（2002）が挙げられる。彼らは学部生に、3本の小論文の校正を3週間以内に行うよう依頼した。その際、提出の仕方について2つの条件を設定した。具体的には、片方の条件では、毎週1本の校正済み論文を提出しなければならなかった。もう片方の条件では、3週間後に3本まとめて提

出することになっていた。すなわち、前者の方が締め切りがきつくなっており、時間的欠乏が感じられるようになっていた。実験の結果、締め切りがきつい条件の方が、締め切りに遅れることが少なく、誤字をたくさん見つけていた。同様の結果は、Tversky & Shafir（1992）においても示されている。他にも、残された時間がないと感じる大学4年生ほど毎日を最大限に活用すること（Kurtz, 2008）、期限のないクーポンより期限のあるクーポンの方が使われやすいこと（Inman & McAlister, 1994; Krishna & Zhang, 1999）、販売員は販売サイクルの最後の週（または数日）に最も熱心に働くこと（Oyer, 1998）が示されている。これらは、欠乏を感じると、それが関わることに集中するようになることを示している。

Shah, Mullainathan, & Shafir（2012）は、この欠乏感による集中の高まりが、時間以外の資源においても見られることを示している。例えばある実験では、参加者に、ブルーベリーを元手に球を的に当ててポイントを稼ぐゲームを行ってもらった。資源潤沢条件ではブルーベリーをたくさん与えられた一方、資源欠乏条件ではブルーベリーは少ししか与えられなかった。その結果、最終的に獲得したポイント数については、当然のことながら、資源潤沢条件の方が多かった。しかし、資源欠乏条件の方が1回の射撃にかける時間が長く、結果として、的中率は資源欠乏条件の方が高かった。こうした傾向は、最初の射撃のときから見られていた。そのため、資源欠乏条件の方が的中率が高かったのは、資源潤沢条件は撃てる回数が多く、後半で飽きてしまったためではなく、資源欠乏条件における欠乏感が集中を高めたためであると考えられる。

他者との繋がりの欠乏に関しても、欠乏感による集中の上昇がみられる。例えば、孤独を感じている人（i.e., 他者との繋がりの欠乏を感じている人）の方が、短い時間（i.e., 1秒間）で写真から感情を読み取る課題の成績が高いことが示されている（Gardner, Pickett, Jefferis, Knowles, & Smith, 2005）。また、他者が書いた日記を記憶させたとき、孤独感が高い人の方が、他者との交流などの社会的内容をより思い出すことも示されている（Gardner, Pickett, & Brewer, 2000）。このように、時間以外の資源に関しても、欠乏感は集中を高めることが示されている。

ここまで見てきたように、欠乏感は当該欠乏に関することに対する集中を高める。しかし、欠乏感が及ぼす影響には、こうしたメリットだけでなく、デメリットも存在する。それは、当該欠乏と無関連なことを処理する能力は低下させてしまうことである。先述した論文の締め切りの例でいえば、締め切り直前は、常に論文のことで頭がいっぱいで、関係のないことに対して深い処理を行えず、メールの内容を思い込みで誤解したまま返信してしまった

りすることがあるだろう。また、消防士の死亡原因も時間的欠乏と関係している可能性があると言われている（Mullainathan & Shafir, 2013）。アメリカにおけるある調査は、消防士の死因として心臓発作の次に多いのは交通事故であると報告している（LeBlanc & Fahy, 2005）。こうした交通事故による死亡者の多くは、シートベルトを着用していなかった。これは、通報を受けた消防士が時間的欠乏を感じていたためであると考えられる。彼らは迅速に現場に到着しなければならないだけでなく、現場に到着するまでに、燃えている建物の構造と配置を調べたり、進入と脱出の作戦を決めたり、必要なホースの数を計算したりするなど、様々な準備を整えなければならない。そのため、道中の安全に対処する能力が低下し、シートベルトを締め忘れることが多いのだと考えられる。このように、欠乏感は当該欠乏と無関連なことを処理する能力を低下させることがある。

欠乏感により処理能力が低下することは、実証研究においても示されている。例えば、Mani, Mullainathan, Shafir, & Zhao（2013）のある実験では、ショッピングモールで通行人に、論理的推論能力や衝動の抑制能力を測定する課題を行ってもらった。その際、課題の前に、所有する自動車が壊れてしまったという仮想的シナリオについて考えてもらった。片方の条件では修理費は300ドルであると伝えられ、もう片方の条件では修理費は3,000ドルであると伝えられた。300ドルという修理費は少額であるため、ショッピングモールに来ている人々にとって問題とならない金額である。しかし3,000ドルという修理費は、収入が高い人々にとっては依然として問題とならない一方、収入が低い人々にとっては生活に支障をきたす大きな問題となる。そのため、修理費が3,000ドルと伝えられた条件では、収入が低い人々は金銭的欠乏を感じ、金銭的欠乏とは無関連であるその後の課題を遂行する能力が低下することが考えられる。実験の結果、予測どおり、修理費が300ドルであると伝えられた条件では、その後に行った課題において、収入による成績の差は見られなかった一方、3,000ドルであると伝えられた条件では、収入が低い人々の方が高い人々より成績が低かった。このように、欠乏を感じると当該欠乏と無関連なことを処理する能力が低下するという現象は、資源の種類に関わらず生じるようである。

以上のように、欠乏感に関する近年の理論的および実証的な研究は、ある資源について欠乏感を感じると、当該欠乏が関わることへの集中は高まる一方で、無関連なことを処理する能力は低下する（i.e., トンネリングが生じる）ことを示している。

2－1－3　欠乏は人の心を占拠する

それでは、トンネリングはなぜ生じるのであろうか。それは、欠乏が人の心を占拠するためであると考えられる（Mullainathan & Shafir, 2013）。ブルーベリーの量が少ないと、ブルーベリーの不足が心を占拠するため、なんとか少ないブルーベリーで多くのポイントを獲得しようと集中する。同様に、自動車の修理費が3,000ドルであると知ると、（収入が少ない場合は）お金の不足が心を占拠するため、関係のない課題のことには十分な注意を払えず、それを処理する能力が低下する。このように、欠乏を感じると、それが人の心を占拠するため、当該欠乏と関連することに対する集中は増す一方、無関連なことを処理する能力は低下すると考えられる。

欠乏感の影響に関心があったわけではないが、古典的な研究も、欠乏が人の心を占拠することを示している。Keys, Brozek, Henschel, Mickelson, & Taylor（1950）は、餓死寸前の状態にある人に食べ物を与える際、どのように与えればよいかを検討した。そのために、健康な男性ボランティアを管理された環境下に置き、恒久的な害を及ぼさないぎりぎりのカロリーに抑えた食事を数ヶ月与え続けた。その結果、参加者の心は食べ物のことで占拠されるようになった（Russell, 2006）。彼らは料理本や地元のレストランのメニューに熱中するようになり、レストランを始めることを妄想したり、映画を見たとき食べ物のシーンに最も興味を示すようになった。より近年の研究では、空腹を感じさせた参加者は食べ物に関連する単語（e.g., CAKE）のみを素早く判断できることや（Radel & Clément-guillotin, 2012）、喉の渇きを感じさせた参加者は飲み物に関連する単語（e.g., WATER）のみを素早く判断できること（Aarts, Dijksterhuis, & Vries, 2001）が示されている。これらの知見は、食べ物や飲み物の欠乏が、人の心を占拠することを示している。

食べ物や飲み物ほど生きるために根源的に必要な資源ではないが、金銭的欠乏も、人の心を占拠することが示唆されている。Saugstad & Schioldborg（1966）は子どもたちに、記憶を頼りに硬貨の大きさを推測し、それに合わせて物理的装置を調整するよう指示した。その結果、貧しい子どもが推測した硬貨の大きさは、実際よりかなり大きかった。また、その錯誤の度合いは、価値の高い硬貨（i.e., 25セントと50セント）において、より大きかった。注意が払われている刺激は現実より強いものとして知覚されやすい（Carrasco, Ling, & Read, 2004）ことを考慮すると、この結果は、貧しい子どもは金銭的欠乏を感じており、お金に関することが心を占拠している割合が大きいことを示唆している。

以上のように、欠乏は人の心を占拠する。トンネリングが生じる背景には、このような欠乏による心の占拠が存在すると考えられる（Mullainathan & Shafir, 2013）。

2－2　金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響

2－2－1　欠乏感研究の知見から

前節で見てきたように、欠乏は人の心を占拠し、欠乏している資源のことをよく考えるようにさせたり、それに注意を払うようにさせたりする（Aarts et al., 2001; Radel & Clément-guillotin, 2012; Russell, 2006; Saugstad & Schioldborg, 1966）。このことを考慮すると、欠乏感は寄付に関連する認知にも影響を及ぼす可能性が考えられる。具体的には、金銭的欠乏感が高まると、他者の苦境の原因も金銭の少なさにあると認知しやすくなることが考えられる。なぜならば、金銭的欠乏感が高まると、お金が足りない状況のことをよく考えたり、そうした状況により注意を払ったりするようになると考えられるためである。

また、欠乏は当該欠乏と無関連のことを処理する能力を低下させる（Mani et al., 2013）。このことを考慮すると、金銭的欠乏感を感じている人は、苦境にいる他者について理解しようとするとき、処理能力が低下した状態にあると考えられる。苦境にいる他者は、基本的には、知覚者の欠乏とは無関連のことであるためである。そして、このように処理能力が低下した状態で理解しようとするため、金銭的欠乏感を感じている人は、より自分自身の内的な状態を基に理解してしまいやすくなる（i.e., 他者が困っている原因もお金不足のせいであると理解しやすくなる）ことが考えられる。

2－2－2　社会的推論研究の知見から

社会心理学における社会的推論に関する研究からも、金銭的欠乏を感じている人は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいことが示唆される。

他者推論に関する研究は、人は他者の好みや行動について推論する際に、自己の好みや行動を投影することを示している。例えば、Ross, Greene, & House（1977）のある実験では、「REPENT（悔いる）」と書かれた大きなサンドウィッチボードを身に着けてキャンパス内を歩くことを了承した参加者は、了承しなかった参加者と比べて、他の参加者も了承するだろうと予測していた。また、Kelley & Stahelski（1970）では、競争的に行動する人は協力的

に行動する人より、他者の競争的な行動を高く見積もることが示されている。同様に、アメリカのお菓子よりヨーロッパのお菓子を好む人は、反対の人より、アメリカのお菓子よりヨーロッパのお菓子を好む人が多いと予測していた（Gilovich, 1990）。このように、社会心理学においては古くから、人は自己の好みや行動を基に他者について推論することが示されている。

好みや行動といった比較的安定した傾向だけでなく、一時的な状態も、他者推論に影響を及ぼすことが示されている。例えば、Van Boven & Loewenstein（2003）のある実験では、大学のエクササイズ施設を利用する人に、山で遭難した3人組についてのシナリオを読ませ、彼らにとって空腹と喉の渇きのどちらがより辛いと思うかを回答してもらった。その際、半分の人にはエクササイズを行う前に回答してもらい、もう半分の人にはエクササイズを行った後に回答してもらった。後者では、参加者は汗をかいており、喉が渇いた状態になっている。そのため、もし人が自身の内的状態を基に他者推論を行うならば、後者の条件の方が、「山で遭難した3人組は喉の渇きの方をより辛いと感じるだろう」と推論する割合が高くなることが予測される。分析の結果、予測どおり、エクササイズ後に回答した参加者の方が、エクササイズ前に回答した参加者より、山で遭難した人は喉の渇きにより苦しむと回答した割合が多かった（88% vs. 57%）。この結果は、喉の渇きといった一時的な状態も、他者推論に影響を及ぼすことを示している[13]。

より近年の研究では、こうした投影は自動的に生じる部分が大きいと議論されている（Krueger, 2007）。例えばKawada, Oettingen, Gollwitzer, & Bargh（2004）では、非意識的に「競争」をプライミングした場合においても、参加者は他者が競争的な目標を持っていると推論していた。またKrueger & Stanke（2001）では、投影は高い認知的負荷がかかった場合においても生じることが示されている。さらにEpley, Keysar, Van Boven, & Gilovich（2004）では、投影は時間的プレッシャーがある状況下で強まることが示されている。これらの結果は、投影は本人の意識外において、自動的に生じうることを示唆している。

他者ではなく、社会的な出来事を推論する際にも、推論者の内的状態が影響を及ぼすことが示されている。例えば、Risen & Critcher（2011）のある実験では、暑さを感じさせた条件

[13] ただし、Ahn, Oettingen, & Gollwitzer（2017）は、こうした投影は、推論対象である他者と自己の類似性が高い場合のみに生じることを指摘している。しかし、石井・竹澤（2017）においては、推論対象である他者との類似性に関わらず、人は他者について推論する際に自己投影を行いやすいことが示されている。また、他者の目標推論における自己投影を扱った Dunlop, McCoy, Harake, & Gray（in press）も、類似性による調整効果は見られなかったと報告している。つまり、自己と他者の類似性が投影を調整するかどうかについて、明確な結論は得られていない。この点については、第 4 章においてより詳細に議論する。

では、感じさせなかった条件より、地球温暖化がより進行していると推論することが示された。また別の実験では、喉の渇きを感じさせた条件では、感じさせなかった条件より、砂漠化や干ばつが人類に及ぼす影響の程度を高く推論していた。これらは、社会的な出来事についても、人は自分の内的状態を推論の手がかりとすることを示唆している。なお、Risen & Critcher（2011）における追加の実験では、こうした現象が生じるのは、自己の内的状態と一致した状況のシミュレーションが流暢にできるためであることが示唆されている。すなわち、暑さ（喉の渇き）を感じると、暑い状況（渇きに苦しむ状況）を想像することが容易になるため、地球温暖化の進行（砂漠化や干ばつが人類に及ぼす影響）を高く推論することが示唆されている。

このように、社会心理学の多くの研究において、自身の内的状態が社会的推論に影響を及ぼすことが示されている。このことを考慮すると、金銭的欠乏感も同様に、社会的推論に影響を及ぼすことが考えられる。すなわち、金銭的欠乏を感じた人は、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいことが考えられる。

2－3　金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響

2－3－1　対立する予測

他者の苦境の原因が金銭の少なさにあるとより強く認知した場合、その他者を助けようとする際には、金銭的な援助をより行おうとするであろう。そのため、金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を高め、結果として、寄付意図を高めることが考えられる。

しかし、金銭的欠乏感は、当然のことながら、お金を自分自身のために保持しておきたいという欲求（以下、金銭保持欲求）も高めると考えられる。寄付という行為はお金を自身から手放す行為であるため、金銭保持欲求は寄付意図を低めると考えられる。このように考えると、金銭的欠乏感は寄付意図を低めるとも考えられる。

以上のように、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響については、対立する2つの予測が成り立つ。すなわち、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めることを考慮すると、金銭的欠乏感は寄付意図を高めると予測される一方、金銭的欠乏感が金銭保持欲求を高めることを考慮すると、金銭的欠乏感は寄付意図を低めると予測される（図2-1）。そのため、金銭的欠乏感が常に寄付意図を高めることは考えにくい。それでは、どういった条件の下で、金銭的欠乏感は寄付意図を高めるのであろうか。

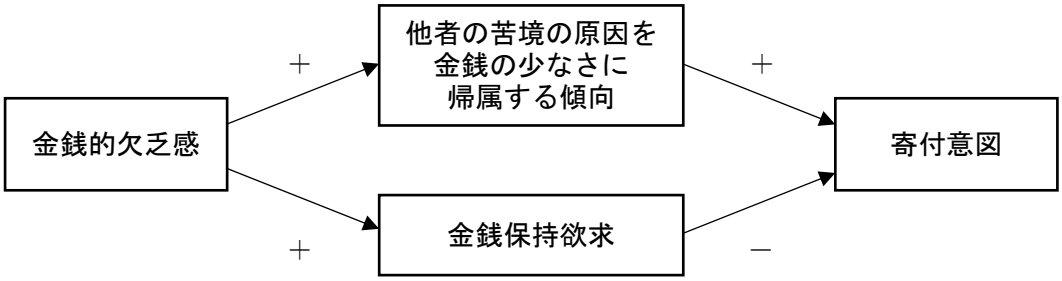


図2-1　金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響についての対立する予測

2－3－2　利他的動機づけの調整効果

この疑問について、利他的動機づけに関する研究が示唆を与えてくれる。利他的動機づけとは、他者の福利を増すという最終目標を伴う動機づけであり、共感的配慮などによって喚起する（Batson, 2010）。これまで多くの研究で、利他的動機づけが高まると、コストを払ってでも他者を助けることが示されている（for a review, Batson, 2010）。

例えばBatson, Duncan, Ackerman, Buckley, & Birch（1981）では、「不快な状況が効率に及ぼす影響を調べる」という名目で、参加者を課題遂行者あるいは観察者に割り当てた。課題遂行者は課題の実行中に電気ショックを与えられることになっていたが、実際には実験協力者（サクラ）がこの課題遂行者となった。真の参加者は必ず観察者に割り当てられるようになっており、参加者は別室で課題遂行者（サクラ）の様子を観察することになっていた。観察が始まる前に参加者は、課題遂行者の印象を形成する際の補助として、価値観や好みに関する質問に対する課題遂行者の回答を見た。この質問は参加者も事前に回答していたもので、共感的配慮高条件では課題遂行者の回答は参加者の回答と類似したものになっていた一方、共感的配慮低条件では類似していなかった。共感的配慮をこのように操作したのは、これまでの研究において、類似性が高い他者に対して共感的配慮が喚起しやすいことが示されていたためである（e.g., Krebs, 1975）。観察が始まると、課題遂行者は電気ショックを受ける度に強く苦しみ、その原因となる過去の話を始めた。それを聞いた実験者は、課題遂行者に課題を続けるべきではないと伝えたが、課題遂行者は「重要な実験であることは知っているので最後まで続けたい」と言った。そこで実験者は観察室に移動し、参加者に役割を交代してもらえるか、つまり、課題遂行者の代わりに電気ショックを受けながら課題を遂行してもらえるかどうかを尋ねた。なお、交代しない場合は、課題遂行者は課題を続けるが、参加者の観察はそこで終了となることが告げられた。その結果、共感的配慮低条件においては、18%の参加者しか代わりに電気ショックを受けるという選択をしなかったのに対し、共感的配慮高条件においては、91%もの参加者が代わりに電気ショックを受けるという選択をしていた。この結果は、共感的配慮が強く喚起し、利他的動機づけが高まると、コストを払ってでも他者を助けやすくなることを示している。

より極端な例でいえば、人が本当に誰かを助けたいと願った際には、自身の命を顧みずにそれを遂行しようとすることがある。例えば、東日本大震災が発生したとき、複数の警察官が、自らの命を犠牲に市民の命を守ろうとした。

「ここからが俺の本当の仕事だ」。地震発生直後の3月11日午後3時過ぎ、交番前で状況をみていた所長の高橋俊一警視（60）は、そう言って建物に戻った。生き残った部下の橋本大輔巡査（21）が見た最後の姿だった。…（中略）…高橋さんの「本当の仕事」とは何だったか。父の亨さん（87）は警察からこんな説明を受けた。津波に襲われる直前、部下に「逃げろ」と叫びつつ、自身は無線のマイクを握った。交番を出ていたパトカーに、住民を避難させる指示を飛ばしていたとみられる（緒方・渡辺, 2011）。

警視庁によると、東日本大震災で殉職した警察官は23人である。そのほとんどが、高橋さんのように住民避難誘導中に津波に巻き込まれたという（緒方・渡辺, 2011）。このように、利他的動機づけが高まった場合には、人はコストを払ってでも、究極的には自身の命を投げ打ってでも、他者を助けようとするのである。

利他的動機づけが高まると、コストを払ってでも他者を助けようとすることを考慮すると、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響は、利他的動機づけによって調整されると予測される（図2-2）。利他的動機づけが高い場合には、他者の福利を増すという最終目標が活性化しているため（Batson, 2010）、金銭保持欲求が寄付意図を低める効果は弱いと考えられる。そのため、金銭的欠乏感は、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を介して、寄付意図を高めることが予測される（図2-2上）。他方、利他的動機づけが低い場合には、苦境にいる他者よりも自己のことを優先するため、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向が寄付意図に及ぼす影響は弱く、金銭保持欲求が寄付意図を低めることが予測される（図2-2下）。

2－3－3　貧しさと寄付のパラドクスの再考

社会調査ではしばしば、貧しい人の方が豊かな人より寄付をすることが示されてきた（e.g., Greeve, 2009; Johnston, 2005）。これまでの研究は、この現象に、宗教性・年齢・寄付額の相場が関連していることを示唆していた（e.g., Iannaccone, 1988; James III & Sharpe, 2007; Wiepking, 2007）。しかし、貧しい人の方が寄付をする傾向は、宗教関連でない寄付においても認められ（e.g., James III & Sharpe, 2007）、年齢の効果を統制しても確認された（e.g., Wiepking, 2007）。また、寄付額に相場があるとしても、お金がなく生活が苦しければ、相場

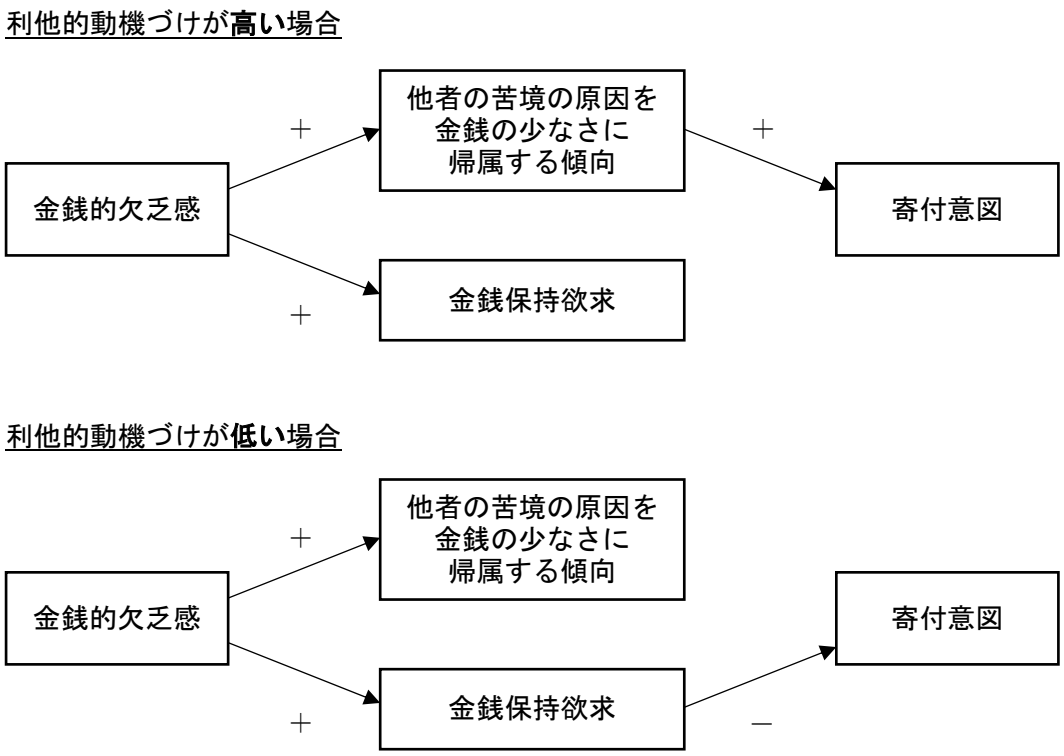


図2-2　金銭的欠乏感が寄付意図に影響を及ぼすメカニズムについての仮説モデル

より少ない金額を寄付するのが自然である。そのため、宗教性・年齢・寄付額の相場という観点では、この逆説的現象を十分に説明できなかった。

近年の心理学研究は、この現象に、貧しい人の利他性の高さが関連していることを示唆している。具体的には、貧しい人は主観的社会経済的地位が低く、慢性的に外的な力を知覚しているため、他者に注意を払いやすく、その結果、苦境にいる他者に対する利他的動機づけが高まりやすいことが示されている（for reviews, Kraus, Piff, et al., 2011; Kraus et al., 2012, 2013）。それゆえ、貧しい人の方が他者を援助することは十分に予測できる。この際、合理的な観点から考えれば、金銭的援助でなく、その他の援助（e.g., 時間的援助としてのボランティア）を行うべきであろう。しかし、彼らは寄付以外の援助をあまり行わない（e.g., Independent Sector, 2002）。そのため、主観的地位の低さに伴う利他的動機づけの高さでは、この逆説的現象を十分に説明できない。

ではなぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すの

であろうか。この問いに答えるため、本章では、貧しさに伴う「金銭的欠乏感」が寄付意図に及ぼす影響について検討してきた。欠乏感・社会的推論・利他的動機づけに関する研究知見を考え合わせると、利他的動機づけが高い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を高めることが予測される（図2-2上側）。これと、貧しさに伴う別の感覚である「主観的社会経済的地位の低さ」が利他的動機づけを高めること（for reviews, Kraus, Piff, et al., 2011; Kraus et al., 2012, 2013）を考え合わせると、貧しい人が他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのは、彼らが他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいためであると解釈することができる。

第 3 章　実験の概要
－金銭的欠乏感の因果的影響を実験により明らかにする－

3－1　実験の目的

本論文の目的は、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属と寄付意図に及ぼす影響を、実験を通じて検討することである。これまで述べてきたように、貧しさと寄付のパラドクスについて多くの研究が積み重ねられてきたものの、「なぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という、人の非合理性に関わる、より本質的な謎は解明されていなかった。この謎は、貧しさと寄付のパラドクスに関する研究においてこれまで着目されていなかった「欠乏感」が及ぼす影響に着目すると、解明される。具体的には、欠乏感に関する研究が明らかにしてきた「欠乏が人の心を占拠する」ということと（e.g., Aarts et al., 2001; Russell, 2006; Saugstad & Schioldborg, 1966）、社会的推論に関する研究が明らかにしてきた「人は推論を行うときに自身の内的な状態を手がかりにする」こと（e.g., Risen & Critcher, 2011; Van Boven & Loewenstein, 2003）から、金銭的欠乏を感じると、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすくなることが予測される。加えて、利他的動機づけが高まるとコストを払ってでも他者を助けること（for a review, Batson, 2010）を考慮すると、金銭的欠乏を感じて金銭保持欲求が高まったとしても、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感は寄付意図を高めると予測される。もしこれらの予測が正しいのであれば、これと、貧しさに伴う別の感覚である「主観的社会経済的地位の低さ」が利他的動機づけを高めやすいこと（for reviews, Kraus, Piff, et al., 2011; Kraus et al., 2012, 2013）を考え合わせると、貧しい人が他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのは、彼らが金銭的欠乏を感じており、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいためであると解釈することができる。そこで本論文では、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属と寄付意図に及ぼす影響を実証的に検証する。

以上に加えて、上記の予測が金銭以外の資源についても当てはまるかどうかも検証する。本論文において想定される仮説モデル（図2-2）は、「人は推論を行うときに自身の内的な状態を手がかりにする」という観点から導出されたものである。そのため、本モデルが適用されうる対象となる欠乏感が、金銭的欠乏感に限定されることはないと考えられる。すなわち、欠乏は、時間や人との繋がりといった生活において必要な様々な資源について生じうる（Mullainathan & Shafir, 2013）が、本モデルはそうした金銭以外の欠乏感についても適用可能であることが考えられる。そこで本論文では、「時間」という資源と、時間を用いた援助行動である「ボランティア行動」を取り上げ、本論文のモデルが金銭以外の資源についても適用可能であるかどうかも検証する。これにより、寄付行動と対として考えられることが多いボランティア行動に関する新たな視点も、提供できるかもしれない。

3－2　実験の流れと仮説

本論文では、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に影響を及ぼし、結果として、利他的動機づけが高い場合には寄付意図が高まるという仮説の検証と、本論文のモデル（図2-2）が時間という資源についても当てはまるかどうかを検証するために、6つの実験を行う。

まず、実験1, 2では、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感が寄付意図を高めるだろうという仮説の前提を検討する。すなわち、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に影響を及ぼすかどうかを検証する。ここでは、まず初めに金銭的欠乏感を実験的に操作し、その後、苦境にいる他者をシナリオで提示し、その原因を推論してもらう。なお、実験1, 2における仮説は、次のとおりである。

(1) 金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、他者の苦境を金銭の少なさに帰属しやすいだろう

次に、実験3～5では、本研究の主たる関心である、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響を検討する。ここでは、まず初めに金銭的欠乏感を実験的に操作し、その後、苦境にいる他者をシナリオで提示し、その他者に対する寄付意図や利他的動機づけを測定する。なお、実験3～5における仮説は、次のとおりである。

(1) 利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が高いだろう
(2) 利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が低いだろう

最後に、実験6では、本論文のモデル（図2-2）が時間という資源についても当てはまるかどうかを検討する。ここでは、まず初めに時間的欠乏感を実験的に操作し、その後、苦境にいる他者をシナリオで提示し、苦境に対する原因帰属、ボランティア意図、利他的動機づけを測定する。なお、実験6における仮説は、次のとおりである。

(1) 時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、他者の苦境を時間の少なさに帰属しやすいだろう

(2) 利他的動機づけが高い場合には、時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、ボランティア意図が高いだろう

(3) 利他的動機づけが低い場合には、時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、ボランティア意図が低いだろう

3－3　方法の概要

3－3－1　独立変数の操作

本研究において独立変数となるのは、金銭的欠乏感（実験1～5）および時間的欠乏感（実験6）である。金銭的欠乏感の操作方法としては、以下の2つを用いる。

まず1つ目は、3日間の食費計画を考えてもらう方法である。これは、豊沢・竹橋（2015, 2016）およびToyosawa & Takehashi（2016）で用いられていた方法である。具体的には、まず、鈴木さんというアルバイトで生計を立てている一人暮らしの大学生についての文章を読んでもらう。金銭的欠乏感高条件では、鈴木さんはお金に余裕がなく、3日間で1,000円しか食費に使えないと記述する。金銭的欠乏感低条件では、鈴木さんはお金に余裕があり、3日間で食費に10,000円使えると記述する。その後、もし自分が鈴木さんの状況に置かれたら、このお金をどのように使うかを尋ね、3日間の食費計画を記入してもらう。

2つ目は、旅行計画を考えてもらう方法である。具体的には、まず、友人と2人で1泊2日の旅行に行く約束をしている鈴木さんという大学生についての文章を読んでもらう。金銭的欠乏感高条件では、鈴木さんはお金に余裕がなく、宿と食事に8,000円しか使えないと記述する。金銭的欠乏感低条件では、鈴木さんは旅行券が当たったため、宿と食事に40,000円使えると記述する。その後、もし自分が鈴木さんの状況に置かれたら、このお金をどのように使うかを尋ね、料金と内容が書かれた選択肢から、宿と食事を選んでもらう。なお、選択肢は、8,000円では満足のいく計画が立てられない一方、40,000円では余裕をもって満足のいく計画が立てられるように設定する。

1,000円で3日間の食費計画を考える、あるいは、8,000円で1泊2日の旅行計画を考えるというように、不十分な予算で計画を立てる際には、「お金が足りない」という感覚が喚起するであろう。そのため、このような指定をされる金銭的欠乏感高条件では、金銭的欠乏感が喚起すると考えられる。他方、10,000円で3日間の食費計画を考える、40,000円で1泊2日の旅行計画を考えるというように、十分な予算で計画を立てる際には、「お金が足りない」という感覚はあまり喚起しないであろう。そのため、このような指定をされる金銭的欠乏感低条件では、金銭的欠乏感がほとんど喚起しないと考えられる。

時間的欠乏感の操作方法としては、金銭的欠乏感の2つ目の操作方法を改変したものを用いる。具体的には、まず、友人と2人で1泊2日の旅行に行く大学生についての文章を読んでもらう。時間的欠乏感高条件では、1日目の夕方と2日目のお昼に地元での用事が入ってしまい、1日目も2日目も現地では1時間しか使えないと記述する。時間的欠乏感低条件では、急な用事が入ることはなく、1日目は6時間、2日目は5時間を現地で使うことができると記述する。その後、もし自分がこの状況に置かれたら、どのような計画を立てるかを尋ね、所要時間と内容が書かれた選択肢から、宿と食事と観光先を選んでもらう。なお、選択肢は、時間的欠乏感高条件では満足のいく計画が立てられない一方、時間的欠乏感低条件では余裕をもって満足のいく計画が立てられるように設定する。

不十分な時間で計画を立てる際には、「時間が足りない」という感覚が喚起するであろう。そのため、このような指定をされる時間的欠乏感高条件では、時間的欠乏感が喚起すると考えられる。他方、十分な時間で計画を立てる際には、「時間が足りない」という感覚はあまり喚起しないであろう。そのため、このような指定をされる時間的欠乏感低条件では、時間的欠乏感がほとんど喚起しないと考えられる。

3－3－2　従属変数の測定

本研究において従属変数となるのは、他者の苦境に対する原因帰属（実験1,2,6）、寄付意図（実験3～5）、およびボランティア意図（実験6）である。他者の苦境に対する原因帰属については、以下の2つの方法で測定する。

まず1つ目は、大学生が旅行をキャンセルするというシナリオを用いる方法である。具体的には、まず、友人と旅行に行くことを約束していたが、それが難しくなったため、約束をなしにしてもらおうとしている大学生についての記述を読んでもらう。続いて、その大学生が旅行に行くことが難しい理由として、「忙しい」と「お金がない」のどちらがより重大であると思うかを尋ねる。また、各理由がどの程度重大であるかを、それぞれ10件法（1:まったく重大でない～10:とても重大）で尋ねる。

2つ目は、児童養護施設の運営が厳しくなっているというシナリオを用いる方法である。具体的には、まず、運営が厳しくなってきている、とある児童養護施設についての記述を読んでもらう。続いて、その児童養護施設の運営が厳しい理由として、「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると思うかを尋ねる。また、各理由がどの程度重大であるか

を、それぞれ10件法（1:まったく重大でない～10:とても重大）で尋ねる。

これらの質問に対し、より重大な理由として「お金がない」や「資金不足」を選択していたり、「お金がない」や「資金不足」という理由が重大な程度を高く評定していたりする場合、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向が高いと言えるであろう。反対に、より重大な理由として「忙しい」や「人手不足」を選択していたり、「忙しい」や「人手不足」という理由が重大な程度を高く評定していたりする場合、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向が高いといえるであろう。

寄付意図およびボランティア意図については、上述した児童養護施設のシナリオを用いて測定する。すなわち、運営が厳しくなってきている、ある児童養護施設についての記述を読んでもらった後、その児童養護施設を運営しているNPOに対する寄付意図およびボランティア意図を尋ねる。より具体的には、まず、寄付やボランティアをするかどうかを尋ね、続いて、寄付をすると回答した人には寄付する金額を、ボランティアをすると回答した人にはボランティアする時間を尋ねる。

これらの質問に対し、寄付をすると回答していたり、寄付金額についてより高い金額を回答していた場合、寄付意図が高いと言えるであろう。また、ボランティアをすると回答していたり、ボランティア時間についてより長い時間を回答していた場合、ボランティア意図が高いといえるであろう。

3－3－3　調整変数の測定

本研究では、利他的動機づけが高い場合には金銭（時間）的欠乏感が寄付（ボランティア）意図を高め、利他的動機づけが低い場合には金銭（時間）的欠乏感が寄付（ボランティア）意図を低めると予測する。すなわち、利他的動機づけが、金銭（時間）的欠乏感が寄付（ボランティア）意図に及ぼす影響を調整する変数となる。この利他的動機づけは、「児童養護施設の子どものために、何かしてあげたいと思った」という、利他的動機づけを直接的に測定する項目に加え、「児童養護施設の子どもがかわいそうだと思った」といった、感情的反応を測定する項目、「この児童養護施設の子どもは、自分とは関係がないと思った（逆転項目）」といった、対象との関係性認知を測定する項目を用いて測定する。

感情的反応を測定する項目を加えるのは、共感的配慮という感情的反応が利他的動機づけと関連していることが示唆されているためである（Batson, 2010）。欧米では共感的配慮の

喚起を表す言葉として、「moved」「softhearted」「sorrowed」「warm」などが用いられることが多いが（e.g., Coke, Batson, & McDavis, 1978）、これらはうまく日本語に訳しにくいため、「かわいそう」といった日本人が理解しやすい言葉を用いた。対象との関係性認知を測定する項目を加えるのは、対象との関係が深いと認知しているほど、利他的動機づけやそれと関連する共感的配慮が喚起しやすいことが指摘されているためである（Batson, 2010）。項目は、児童養護施設に関する記述に当てはまるよう作成した。

こうした項目について、どの程度当てはまるかを、6件法（1:まったく当てはまらない～6:とてもよく当てはまる）で回答してもらう。なお、具体的な項目は実験により若干異なるため、詳細は各実験の方法に関する部分において記述する。

第Ⅱ部： 実証的検討

第 4 章　金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響

4－1　実験1－大学生の旅行キャンセルに対する原因帰属－

4－1－1　問題

本章では、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響について、実験を行い検討する。貧しさと寄付のパラドクスについて多くの研究が積み重ねられてきたものの、「なぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という、人の非合理性に関わる、より本質的な謎は解明されていなかった。欠乏が人の心を占拠すること（e.g., Aarts et al., 2001; Russell, 2006; Saugstad & Schioldborg, 1966）と、人は推論を行うときに自身の内的な状態を手がかりにすること（e.g., Risen & Critcher, 2011; Van Boven & Loewenstein, 2003）を考え合わせると、これは、貧しい人は金銭的欠乏感が高く、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいためであることが考えられる。そこで本章では、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるかどうかを検討する。

実験1では、まず、1,000円あるいは10,000円で3日間の食費計画を立ててもらうことで、金銭的欠乏感が強く喚起する条件と、それほど喚起しない条件を作り出す。その後、苦境を経験している他者を提示し、その原因について推論してもらう。

仮説

金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいだろう。

4－1－2　方法

実験参加者　144名（女性90名、男性54名）の大学生が実験に参加した。平均年齢は19.65歳（$SD = 0.93$）であった。

実験計画　1要因2水準（金銭的欠乏感：高／低）の参加者間計画であった。参加者は金銭的欠乏感高条件あるいは金銭的欠乏感低条件にランダムに割り当てられた。

手続き　大学の講義時間内に1冊の質問紙を各参加者に配布することで実験を実施した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。そしてまず、「大学生の食生活に関する調査」と称した部分で、金銭的欠乏感の操作を行った。次に、「想像に関する調査」と称した部分で、他者の苦境に対する原因帰属を測定した。最後に、2つの調査全体に関わる質問と称した部分で、金銭的欠乏感の操作チェックのための質問や、調査に関する感想を尋ねる質問等を行った。全員の回答が終わった後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

金銭的欠乏感の操作　豊沢・竹橋（2015, 2016）およびToyosawa & Takehashi（2016）で用いられていた方法で操作した。参加者はまず、鈴木さんというアルバイトで生計を立てている一人暮らしの大学生についての文章を読んだ。金銭的欠乏感高条件では、鈴木さんはお金に余裕がなく、3日間で1,000円しか食費に使えないと記述されていた。金銭的欠乏感低条件では、鈴木さんはお金に余裕があり、3日間で食費に10,000円使えると記述されていた。実際に用いた文章は以下の通りである（ゴシック体太字の箇所の［ ］外が金銭的欠乏感高条件で用いたもの、［ ］内が金銭的欠乏感低条件で用いたものである）。

> 鈴木さんは、大学1年生です。この春、実家から遠く離れた大学に進学し、一人暮らしを始めました。学費と家賃以外の仕送りはなく、アルバイトをして生計を立てています。さて、次の給料日まであと3日となりました。**今月は余裕がなく、3日間で食費に1,000円しか使うことができません［今月は余裕があり、3日間で食費に10,000円も使うことができます］**。

この文章を読んだ後、参加者は、もし自分が鈴木さんの状況に置かれたら、このお金をどのように使うかを尋ねられ、3日間の食費計画を表に記入した。実際に用いた表を以下の表4-1に示す。なお、記入の時間としてまず4分間設け、4分間経過後、終わった人には次の「想像に関する調査」（他者の苦境に対する原因帰属を測定する部分）へ進むよう指示した。終わっていない人には、引き続き食費計画の記入を続け、終わり次第、次へ進むよう指示した。

表4-1　実験1において金銭的欠乏感の操作で用いられた表

		食事の内容 *例）パン，学食*	予算
1 日目 （月）	朝		円
	昼		円
	夜		円
2 日目 （火）	朝		円
	昼		円
	夜		円
3 日目 （水）	朝		円
	昼		円
	夜		円
		合計（**<u>1,000 円</u>**以内）	円

注）金銭的欠乏感低条件では、太字下線の箇所が10,000円となっていた。

他者の苦境に対する原因帰属の測定　参加者はまず、友人と旅行に行くことを約束していたが、それが難しくなったため、約束をなしにしてもらおうとしている大学生についての記述を読んだ。実際に用いた文章は以下の通りである。

Aさんは、都内の大学生です。ある日、別の大学に通う高校時代の友人と、2人で旅行に行く約束をしました。行き先や、具体的にどんなことをするかを決めていたわけではありませんが、なんとなく、「この月に2人で温泉旅行に行こうか」と話していました。しかし、旅行の時期が近づくにつれ、Aさんは、旅行に行くことが難しいことに気が付き始めました。Aさんは、旅行に行く約束を、いったんなしにしてもらい、余裕ができたらまた声をかけることにしようと考えています。

続いて、Aさんが旅行に行くことが難しい理由として、「忙しい」と「お金がない」のどちらがより重大であると思うかを尋ねられた。また、各理由がどの程度重大であるかを、それぞれ10件法（1:まったく重大でない～10:とても重大）で尋ねられた。

操作チェック項目　金銭的欠乏感の操作の有効性をチェックするために、「大学生の食生活に関する調査」（金銭的欠乏感を操作する部分）において描かれた状況に対して、どのくらい金銭的欠乏感（お金が足りないという気持ち）を感じたかを、4件法（1:まったく感じなかった～4:とても感じた）で尋ねた。

4－1－3　結果

操作チェック　金銭的欠乏感について、条件を独立変数としたt検定を行った。その結果、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 3.57, SE = 0.08$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 1.86, SE = 0.09$）、金銭的欠乏を強く感じていた（$t(141) = 14.70, p < .001, d = 2.45$）。よって、操作は有効であったと考えられる。

仮説の検証　まず、Aさんが旅行に行くことが難しい理由として「忙しい」と「お金がない」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性を検討するために、χ^2検定を行った。その結果、「お金がない」を選択する割合は金銭的欠乏感低条件（52.11%）より金銭的欠乏感高条件（68.49%）において高かった（$\chi^2(1) = 4.04, p = .04$, 表4-2）。この結果は仮説を支持するものであった。

表4-2　条件および選択肢ごとの参加者の人数

	忙しい	お金がない	合計
金銭的欠乏感高条件	23	50	73
金銭的欠乏感低条件	34	37	71
合計	57	87	144

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件（金銭的欠乏感高／金銭的欠乏感低）×理由の種類（忙しい／お金がない）の2要因混合計画の分散分析を行った（図4-1）。その結果、条件と理由の種類の主効果は有意でなかったが（Fs(1, 141) < 2.41, ps > .12, η_p^2s < .02）、交互作用が有意傾向であった（$F(1, 141) = 3.73, p = .06, \eta_p^2 = .03$）。単純主効果分析の結果、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 7.86, SE = 0.26$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 7.16, SE = 0.26$）、「お金がない」という理由をより重大であると評定していた（$F(1, 282) = 3.74, p = .05, \eta_p^2 = .03$）。この結果は仮説を支持するものであった。「忙しい」については、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 6.95, SE = 0.26$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 7.26, SE = 0.26$）重大でないと評定する傾向が見られたが、その差は有意ではなかった（$F(1, 282) = 0.73, p = .39, \eta_p^2 = .01$）。

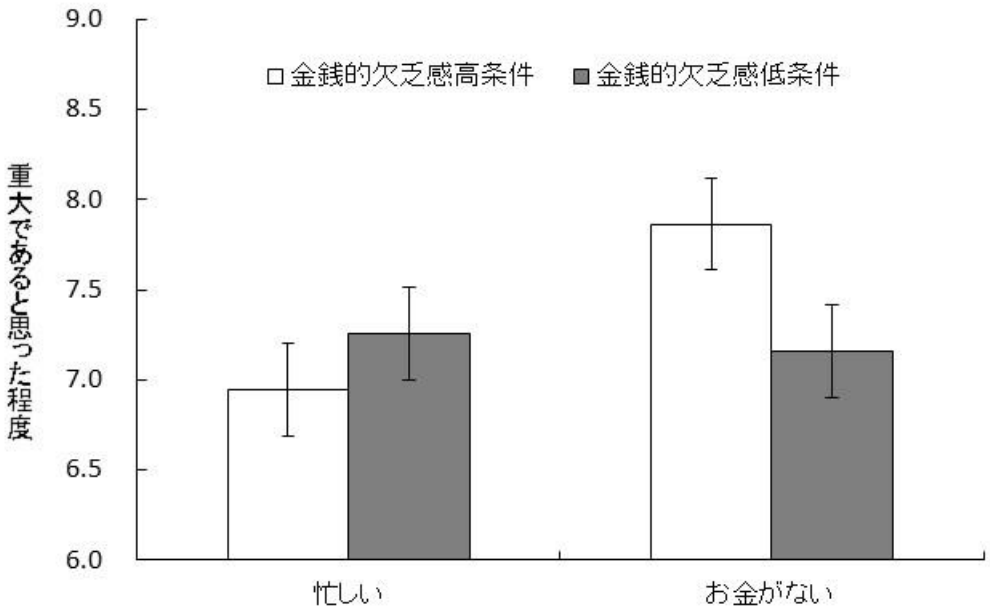


図4-1　条件および理由の種類ごとの、原因として重大であると評定した程度

注）得点範囲は1～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

4－1－4　考察

本実験の結果、金銭的欠乏感が高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、架空の大学生が旅行に行くことが難しい主要な理由として、「忙しい」より「お金がない」を選択する割合が有意に高いことが示された。また、金銭的欠乏感が高められた条件の参加者の方が、「お金がない」ことが原因として重大である程度を、有意に高く評定することが示された。これらの結果は、本研究の仮説を支持するものであり、金銭的欠乏感が高い場合には、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいことを示すものであった。

ただし、このような結果が得られたのは、推論対象である他者が参加者と同じ大学生であったためである可能性が考えられる。Ahn et al.（2017）は、社会的推論における投影は、推論対象である他者と自己の類似性が高い場合のみに生じることを指摘している。そのため、大学生以外が推論対象の場合は、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強めない可能性がある。もし、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるのは、その他者が自身と類似している場合に限られるならば、金銭的欠乏感に着目することで「なぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という謎を解決するのは難しいと考えられる。なぜならば、貧しい人が助けようとする他者は、必ずしも自身と類似しているとは限らないためである（e.g., Reed, 1998）。

しかし、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるのは、必ずしもその他者が自身と類似している場合に限られるわけではないと考えられる。例えば石井・竹澤（2017）では、推論対象である他者との類似性に関わらず、人は他者について推論する際に投影を行いやすいことが示されている。また、他者の目標推論を扱ったDunlop et al.（in press）においても、他者との類似性が投影を調整する効果は見られなかったと報告している。これらから、推論対象である他者との類似性が高い場合でなくても、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強める可能性が考えられる。さらに、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるのは、投影によるものではなく、Risen & Critcher（2011）が示すように「状況をシミュレーションする際の流暢性」によるものである可能性がある。その場合、推論対象である他者と自己との類似性は、金銭的欠乏感の効果の程度と関係がないと考えられる。そこで実験2では、推論対象が大学

生以外の場合においても、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるかどうかを検討する。

4－2　実験2－児童養護施設の運営難に対する原因帰属－

4－2－1　問題

実験1では、金銭的欠乏感を高められた場合の方が、高められなかった場合より、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向が強かった。しかしながら、このような結果が得られたのは、推論対象である他者が参加者と同じ大学生であったためである可能性が考えられた。そのため、大学生以外が推論対象の場合でも、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるかどうかは明らかでない。

そこで実験2では、推論対象として、大学生以外を用いることとする。具体的には、児童養護施設の運営が困難な原因を推論してもらう。

仮説

金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいだろう。

4－2－2　方法

実験参加者　157名（女性80名、男性77名）の大学生が実験に参加した。平均年齢は19.40歳（$SD = 1.61$）であった。

実験計画　1要因2水準（金銭的欠乏感：高／低）の参加者間計画であった。参加者は金銭的欠乏感高条件あるいは金銭的欠乏感低条件にランダムに割り当てられた。

手続き　大学の講義時間内に1冊の質問紙を各参加者に配布することで実験を実施した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。そしてまず、実験1と同様に、「大学生の食生活に関する調査」と称した部分で、金銭的欠乏感の操作を行った。次に、「児童養護施設問題に関する調査」と称した部分で、他者の苦境

に対する原因帰属を測定した（詳細は後述）。最後に、実験1と同様に、2つの調査全体に関わる質問と称した部分で、金銭的欠乏感の操作チェックのための質問や、調査に関する感想を尋ねる質問等を行った。全員の回答が終わった後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

他者の苦境に対する原因帰属の測定　参加者はまず、運営が厳しくなってきている、とある児童養護施設についての記述を読んだ。実際に用いた文章は以下の通りである。

> この児童養護施設は、親から虐待されたり親が亡くなったりして、他の親戚もいない子どもたちが暮らす施設です。子どもたちはこの施設以外に帰る場所はなく、毎日の生活をこの施設で送っています。この施設はNPOの活動の一環で運営されています。施設の管理や子どもの生活のサポートを行うボランティア、人々からの寄付によって、この施設の運営はまわっています。しかし最近、人手が足りなくなったり、活動資金が不足したりして、施設の運営が厳しくなってきています。もし児童養護施設が閉鎖されれば、子どもたちの行き場はなくなってしまいます。

続いて、この児童養護施設の運営が厳しい理由として、「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると思うかを尋ねられた。また、各理由がどの程度重大であるかを、それぞれ10件法（1:まったく重大でない～10:とても重大）で尋ねられた。

4－2－3　結果

操作チェック　金銭的欠乏感について、条件を独立変数としたt検定を行った。その結果、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 3.53, SE = 0.09$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 2.00, SE = 0.11$）、金銭的欠乏を強く感じていた（$t(155) = 10.98, p < .001, d = 1.74$）。よって、操作は有効であったと考えられる。

仮説の検証　まず、児童養護施設の運営が厳しい理由として「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性を検討するために、χ^2検定を行った。

その結果、有意な関連は見られなかった（$\chi^2(1) = 0.94, p = .33$, 表4-3）。しかし、「資金不足」を選択する割合は、金銭的欠乏感低条件（65.43%）より金銭的欠乏感高条件（57.89%）において高かった。つまり、有意差はなかったものの、仮説と一致するパターンの結果が得られた。

表4-3　条件および選択肢ごとの参加者の人数

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	28	53	81
金銭的欠乏感低条件	32	44	76
合計	60	97	157

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件（金銭的欠乏感高／金銭的欠乏感低）×理由の種類（人手不足／資金不足）の2要因混合計画の分散分析を行った（図4-2）。その結果、条件の主効果が非有意（$F(1, 155) = 2.06, p = .15, \eta_p^2 = .01$）、理由の種類の主効果が有意であり、資金不足の方が（$M = 8.63, SE = 0.11$）人手不足より（$M = 7.86, SE = 0.13$）重大であると評定されていた（$F(1, 155) = 17.75, p < .001, \eta_p^2 = .10$）。より重要なことに、交互作用が有意傾向であった（$F(1, 155) = 3.87, p = .05, \eta_p^2 = .02$）。単純主効果分析の結果、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 8.93, SE = 0.17$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 8.33, SE = 0.18$）、「資金不足」という理由をより重大であると評定していた（$F(1, 310) = 5.86, p = .02, \eta_p^2 = .04$）。この結果は仮説を支持するものであった。「人手不足」については、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 7.80, SE = 0.17$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 7.92, SE = 0.18$）重大でないと評定する傾向が見られたが、その差は有意ではなかった（$F(1, 310) = 0.23, p = .63, \eta_p^2 = .001$）。

4－2－4　考察

本実験の結果、金銭的欠乏感が高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、「資金不足」が児童養護施設の運営が厳しい原因として重大である程度を、有意に高く評定することが示された。主要な理由として「資金不足」を選択する割合については、条件間で有意な差は見られなかったが、パターンとしては、金銭的欠乏感を高められた

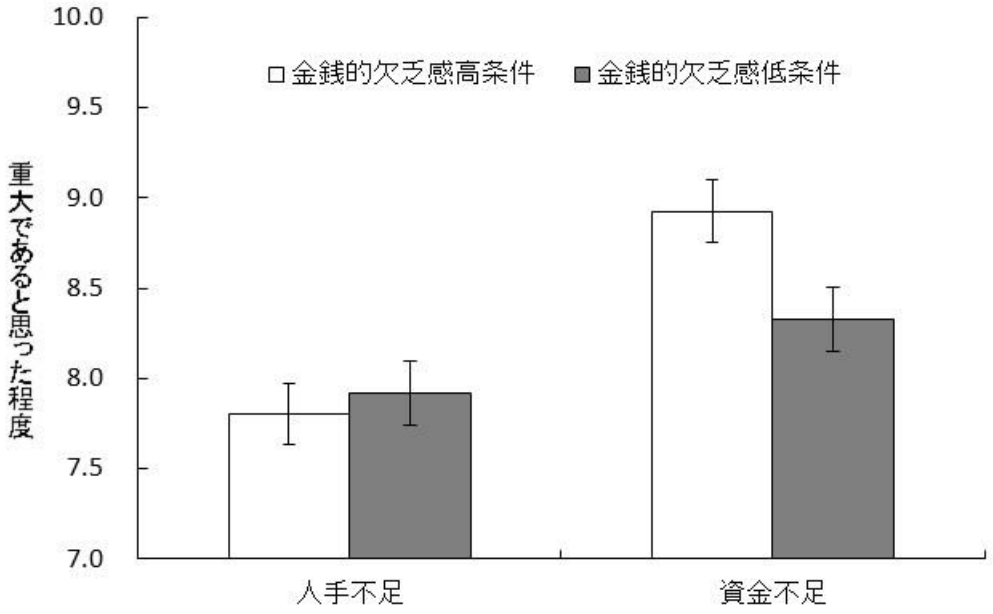


図4-2　条件および理由の種類ごとの、原因として重大であると評定した程度

注）得点範囲は1～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

条件の参加者の方が高い割合で「資金不足」を選択していた。有意差が見られなかった原因は、金銭的欠乏感低条件においても、「資金不足」を選択する割合が高かったためであると考えられる。これらの結果は、概ね本研究の仮説を支持するものであり、金銭的欠乏感が高い場合には、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいことを示すものであった。

また、実験2においては、大学生以外が推論対象の場合でも、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるかどうかを検討することも目的の1つであった。推論対象である他者と自己の類似性に関わらず、人は一般的に自身の内的状態を基に推論を行いやすいことを示唆する研究知見も存在するものの（e.g., Dunlop et al., in press; 石井・竹澤, 2017; Risen & Critcher, 2011）、推論における投影は推論対象である他者と自己の類似性が高い場合にのみ生じることを指摘する研究知見も存在するため（Ahn et al., 2017）、推論対象である他者と自己の類似性が必ずしも高くない場合においても、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるかどうかは明らかでなかった。そこで実験2では、児童養護施設の運営が困難な原因を推論してもらった。参加者と同じ大学生以外を推論対象とした本実験においても、金銭的欠乏感は他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を

強めていた。この結果は、自己と必ずしも類似していない他者について推論する場合においても、金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めることを示すものである。

4－3　全体考察

本章では、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響について、実験を実施し、検討した。実験1では、金銭的欠乏感が高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、架空の大学生が旅行に行くことが難しい原因をお金がないことに帰属しやすいことが示された。実験2では、金銭的欠乏感が高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、児童養護施設の運営が厳しい原因を資金不足に帰属しやすいことが示された。これらの結果は、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるという仮説を支持するものであると考えられる。

本章で示された結果は、貧しさと寄付のパラドクスについて残る「なぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という謎の解決に寄与すると考えられる。本章で示された結果を基にすると、貧しい人が他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのは、彼らが他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいためである可能性が考えられる。ただし、金銭的欠乏感が実際に寄付意図に影響を及ぼすかどうかについては明らかでない。この点については、次章で検討する。

また、本章で示された結果は、欠乏感に関する研究の知見を拡大する。欠乏感に関する従来の研究の多くは、欠乏感が個人の課題遂行に及ぼす影響を検討してきた。それに対し、本章で示された結果は、欠乏感が対人・社会的認知にも影響を及ぼすことを示唆している。そのような意味で、欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響を検討した本章の実験には、一定の意義があると思われる。

ただし、本章で扱った実験には、いくつかの限界もある。第1に、具体的にどのようなプロセスで、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に影響を及ぼしていたのかは明らかでない。社会的推論に関する研究からは、自己の内的状態を他者に投影していたこと（e.g., Van Boven & Loewenstein, 2003）、状況をシミュレーションする際の流暢性を手がかりにしていたこと（e.g., Risen & Critcher, 2011）などが考えられるが、実際にどちらが用いられていたのかについては、本章の実験からは明らかでない。この点について、例えば、シミュレーションの流暢性を測定することで検討できるかもしれない。Risen & Critcher（2011）は、流暢にシミュレートできる状況に関する映像はより鮮明に見えるだろうと考えた。そして、ま

ず透明度を50%にした画像を複数提示し、それらについて簡単な質問を行った。その後、前の課題で提示されていた画像がどのように見えていたかを、参加者自身に透明度を調整してもらった。その結果、暑い部屋でこの作業を行った参加者の方が、涼しい部屋で作業を行った参加者より、暑いことを示す画像（e.g., 砂漠や太陽がある画像）についてのみ、透明度を低く設定していた。また別の実験では、暑いことを示す画像の透明度が低い場合（i.e., より鮮明に見える場合）の方が、地球温暖化が進行していると推論しやすいことが示された。こうした方法と同様の方法を用いることにより、本章の実験で示された現象の背後にあるプロセスを検討することが可能であろう。

第2に、本章では金銭的欠乏感の操作として単一の方法を用いてきた。単一の操作方法に頼った実験では、予期していなかった影響が生じ、それが偶然に仮説と一致した方向の結果を生み出す可能性がある。例えば、本章で示された結果は、金銭的欠乏感高条件において金銭的欠乏感が高まったためではなく、金銭的欠乏感低条件において「人」についてより考えていたためであることが考えられる。金銭的欠乏感高条件では、3日間で1,000円しか使えないため、自宅で1人で食事することを考えた参加者が多かったかもしれない。それに対し金銭的欠乏感低条件では、3日間で10,000円も使えるため、他者と一緒に食事することを考えた参加者が多かったかもしれない。このように、金銭的欠乏感低条件では「人」について考える機会が多かったために、後の課題で原因を人手不足に帰属しやすかったことが考えられる。こうした可能性を排除するためにも、複数の操作方法を用いて同様の結果が得られるかどうかを確認し、知見の妥当性を高めることが望ましい。この点については、次章で検討する。

第 5 章　金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響

5－1　実験3－食費計画による欠乏感操作－

5－1－1　問題

第4章では、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響を検討した。そして、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めることが示された。

第5章では、第4章の知見を前提として、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響を検討する。他者の苦境の原因が金銭の少なさにあるとより強く認知した場合、その他者を助けようとする際には、金銭的な援助をより行おうとするであろう。そのため、金銭的欠乏感は寄付意図を高めることが予測される。ただし、この傾向は利他的動機づけが高い場合に限られると考えられる。利他的動機づけが低い場合には、苦境にいる他者よりも自己のことを優先するため、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向が寄付意図を高める効果は弱いと考えられるからである。むしろ、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感は金銭保持欲求の高まりを介して寄付意図を低めることが予測される（図2-2）。

実験3では、実験2と同様の手続きを用いる。ただし、児童養護施設に対する寄付意図、ボランティア意図、および利他的動機づけについても尋ねる。

仮説

(1) 利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が高いだろう

(2) 利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が低いだろう

5－1－2　方法

実験参加者　96名（女性61名、男性35名）の大学生が実験に参加した。平均年齢は18.37歳（$SD = 0.65$）であった。

実験計画　2要因の実験計画であった。第1要因は金銭的欠乏感であり、実験的に操作した。すなわち、参加者を金銭的欠乏感高条件あるいは金銭的欠乏感低条件にランダムに割り当てた。第2要因は利他的動機づけであった。こちらについては個人差を測定することとした。

手続き　大学の講義時間内に1冊の質問紙を各参加者に配布することで実験を実施した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。そしてまず、実験1,2と同様に、「大学生の食生活に関する調査」と称した部分で、金銭的欠乏感の操作を行った。次に、実験2と同様に、「児童養護施設問題に関する調査」と称した部分で、他者の苦境に対する原因帰属を測定した。ただし、実験3では続いて、寄付意図、ボランティア意図、および利他的動機づけを測定した（詳細は後述）。最後に、実験1,2と同様に、2つの調査全体に関わる質問と称した部分で、金銭的欠乏感の操作チェックのための質問や、調査に関する感想を尋ねる質問等を行った。ただし実験3では、寄付およびボランティア経験の個人差についても尋ねた（詳細は後述）。全員の回答が終わった後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

寄付意図およびボランティア意図の測定　児童養護施設の運営が厳しい原因について尋ねた後、寄付意図およびボランティア意図を測定した。具体的には、まず、「このNPOにボランティア（専門家でないとできない作業ではなく、あなたにもできる作業）や寄付をお願いされた場合、あなたはどうしますか？」と尋ねた。回答の選択肢は、①ボランティアだけする、②寄付だけする、③ボランティアも寄付もする、④どちらもしない、の4つであった。分析の際には、①あるいは③を選ぶかどうかを「ボランティアする確率」、②あるいは③を選ぶかどうかを「寄付する確率」として用いた。

次に、①あるいは③を選んだ人（i.e., ボランティアすると回答した人）にのみ、合計何時間くらいボランティアするかを尋ねた。回答の選択肢は、約30分、約1時間、約2時間、約3時間、約4時間、約5時間、約7時間、約10時間、約15時間、それ以上、の10個であった。分

析の際には、前者から1、2、…、10と数値を振り、また、①あるいは③を選ばなかった人については0とし、この指標を「ボランティア時間」として用いた。

同様に、②あるいは③を選んだ人（i.e., 寄付すると回答した人）にのみ、何円くらい寄付するかを尋ねた。回答の選択肢は、約100円、約200円、約300円、約400円、約500円、約700円、約1,000円、約1,500円、約3,000円、それ以上、の10個であった。分析の際には、前者から1、2、…、10と数値を振り、また、②あるいは③を選ばなかった人については0とし、この指標を「寄付金額」として用いた。

利他的動機づけの測定　寄付意図およびボランティア意図を測定した後、利他的動機づけを5項目で測定した。具体的には、「児童養護施設の子どもがかわいそうだと思った」「児童養護施設の子どものために、何かしてあげたいと思った」「この児童養護施設の子どもは、自分とは関係がないと思った（逆転項目）」「児童養護施設の子どもを思い、胸が苦しくなった」「児童養護施設の子どもと自分との間に、心理的な距離を感じた（逆転項目）」という5つの文章について、どの程度当てはまるかを、6件法（1:まったく当てはまらない～6:とてもよく当てはまる）で回答してもらった。

寄付およびボランティア経験の個人差の測定　調査全体に関わる質問と称した部分で、寄付およびボランティア経験について尋ねた。寄付経験については、まず、これまでにどれくらい自発的に寄付をしたことがあるかを5件法（1:したことがない、2:一度だけ、3:数回した、4:しばしばする、5:よくする）で回答してもらった。分析の際には、これを「寄付経験の個人差（回数）」として用いた。

続いて、自発的な寄付経験がある人には、平均的な1回の寄付額を尋ねた。回答の選択肢は、数十円、約100円、約200円、約300円、約400円、約500円、約700円、約1,000円、約1,500円、約3,000円、それ以上、の11個であった。分析の際には、前者から1、2、…、11と数値を振り、また、自発的な寄付経験がない人については0とし、この指標を「寄付経験の個人差（金額）」として用いた。

ボランティア経験についても同様に、まず、これまでにどれくらい自発的にボランティアに参加したことがあるかを5件法で回答してもらった。分析の際には、これを「ボランティア経験の個人差（回数）」として用いた。

続いて、自発的なボランティア経験がある人には、平均的な1回のボランティア時間を尋

ねた。回答の選択肢は、数十分、約1時間、約2時間、約3時間、約4時間、約5時間、約7時間、約10時間、約15時間、約30時間、それ以上、の11個であった。分析の際には、前者から1、2、…、11と数値を振り、また、自発的な寄付経験がない人については0とし、この指標を「ボランティア経験の個人差（時間）」として用いた。

5－1－3　結果

操作チェック　金銭的欠乏感について、条件を独立変数としたt検定を行った。その結果、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 3.77, SE = 0.08$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 1.86, SE = 0.11$）、金銭的欠乏を強く感じていた（$t(94) = 14.26, p < .001, d = 2.89$）。よって、操作は成功していたと考えられる。

仮説の検証　利他的動機づけを測定する5項目に、ある程度の内的一貫性が見られたため（$\alpha = .69$）、これらを合算平均した（$M = 3.93, SD = 0.79$）[14]。

そしてまず、寄付する確率（しない40名、する56名）について、条件[15]と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般化線形モデルによる分析（ロジスティック回帰分析）を行った[16]。しかし、利他的動機づけの主効果のみ有意で（$b = 0.67, SE = 0.33, Z = 2.01, p = .04$）、条件の主効果および交互作用項は有意ではなかった（Zs $< 0.61, p$s $> .54$）。

次に、寄付金額（$M = 3.08, SD = 3.31$）について、条件と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般線形モデルによる分析を行った。しかし、こちらについても、利他的動機づけの主効果のみ有意で（$b = 1.00, SE = 0.44, t(89) = 2.26, p = .03$）、条件の主効果および交互作用項は有意ではなかった（ts$(89) < 0.83, p$s $> .41$）。

これらの結果は、寄付経験の個人差の効果を統制しても大きく変わらなかった。よって、仮説は支持されなかった。

前提の確認　本実験の仮説は、前章で示された「金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強める」という知見に基づいていた。そこで次に、この前提が本実験において成り立っていたかどうかを検証した。

---

[14] 条件は利他的動機づけに影響を及ぼしていなかった（$t(94) = 0.29, p = .77, d = .06$）。
[15] 以降で行うすべての分析では、金銭的欠乏感高条件を－0.5、金銭的欠乏感低条件を＋0.5 としている。
[16] 以降で行う、交互作用項を含む分析では、説明変数はすべて中心化している。また、一般化線形モデルを用いる場合は、不均一分散を補正する頑健標準誤差を用いている。

まず、児童養護施設の運営が厳しい理由として「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性を検討するために、χ^2検定を行った。その結果、有意な関連は見られなかった（$\chi^2(1) = 0.41, p = .52$）。

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件（金銭的欠乏感高／金銭的欠乏感低）×理由の種類（人手不足／資金不足）の2要因混合計画の分散分析を行った。その結果、理由の種類の主効果が有意であり、資金不足の方が（$M = 8.56, SE = 0.16$）人手不足より（$M = 8.09, SE = 0.17$）重大であると評定されていた（$F(1, 94) = 4.51, p = .04, \eta_p^2 = .05$）。しかし、条件の主効果および交互作用は非有意であった（Fs$(1, 94) < 0.36, p$s$ > .55, \eta_p^2s < .004$）。

このように、条件は他者の苦境に対する原因帰属に影響を及ぼしていなかったことから、本実験においては、仮説の前提が成り立っていなかったことが考えられる。

探索的分析　2つの調査全体に関わる質問と称した部分で尋ねた、調査に関する感想において、2名の女性参加者から、実家に暮らしていたり、お金に困った経験がなかったりするため、食費計画を考える課題において困ったという記述が見られた。記述はしていなかったものの、他の女性参加者においても同様の事態が生じており、女性においては条件操作が有効でなかった可能性がある[17]。そこで、探索的に、性別を考慮に入れた分析を行った。

まず、寄付する確率について、条件と利他的動機づけと性別、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般化線形モデルによる分析（ロジスティック回帰分析）を行った。その結果、2次の交互作用が有意であった（$b = 3.21, SE = 1.61, Z = 1.99, p = .05$）。下位検定を行った結果、男性においては条件×利他的動機づけの交互作用が有意傾向であったのに対し（$b = -2.13, SE = 1.25, Z = 1.70, p = .09$）、女性においては非有意であった（$b = 1.08, SE = 1.01, Z = 1.07, p = .29$）。男性において条件×利他的動機づけの交互作用が有意傾向であったため、男性における条件の効果を、利他的動機づけの平均±1SDにおいて検討した。その結果、有意ではなかったものの、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が低い一方（$b = 1.92, SE = 1.25, Z = 1.55, p = .12$）、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が高い（$b = -1.43, SE = 1.26, Z = 1.14, p = .25$）というパターンが見られた。有意ではなかったものの、このパター

[17] ただし、操作チェックの指標について、条件×性別の分散分析を行ったところ、交互作用は有意とならなかった（$F(1, 92) = 0.64, p = .43, \eta_p^2 = .01$）。そのため、条件操作の有効性に性差があったという直接的な証拠を得ることはできなかった。

ンは、仮説と一致するものであった。なお、この結果は、寄付経験の個人差（回数）の効果を統制しても大きく変わらなかった。

次に、寄付金額について、条件と利他的動機づけと性別、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般線形モデルによる分析を行った（図5-1）。その結果、こちらについても、2次の交互作用が有意であった（$b = 3.82, SE = 1.89, t(85) = 2.02, p = .05$）。下位検定を行った結果、男性においては条件×利他的動機づけの交互作用が有意傾向であったのに対し（$b = -2.71, SE = 1.53, t(85) = 1.77, p = .08$）、女性においては非有意であった（$b = 1.10, SE = 1.10, t(85) = 1.00, p = .32$）。男性において条件×利他的動機づけの交互作用が有意傾向であったため、男性における条件の効果を、利他的動機づけの平均±1SDにおいて検討した。その結果、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付金額が有意に高かった（$b = -3.77, SE = 1.73, t(85) = 2.18, p = .03$）。他方、有意ではなかったものの、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付金額が低いというパターンが見られた（$b = 0.51, SE = 1.56, t(85) = 0.33, p = .75$）。男性におけるこの結果は、仮説(1)を支持するものであり、仮説(2)に沿うパターンであった。なお、この結果は、寄付経験の個人差（金額）の効果を統制しても大きく変わらなかった。

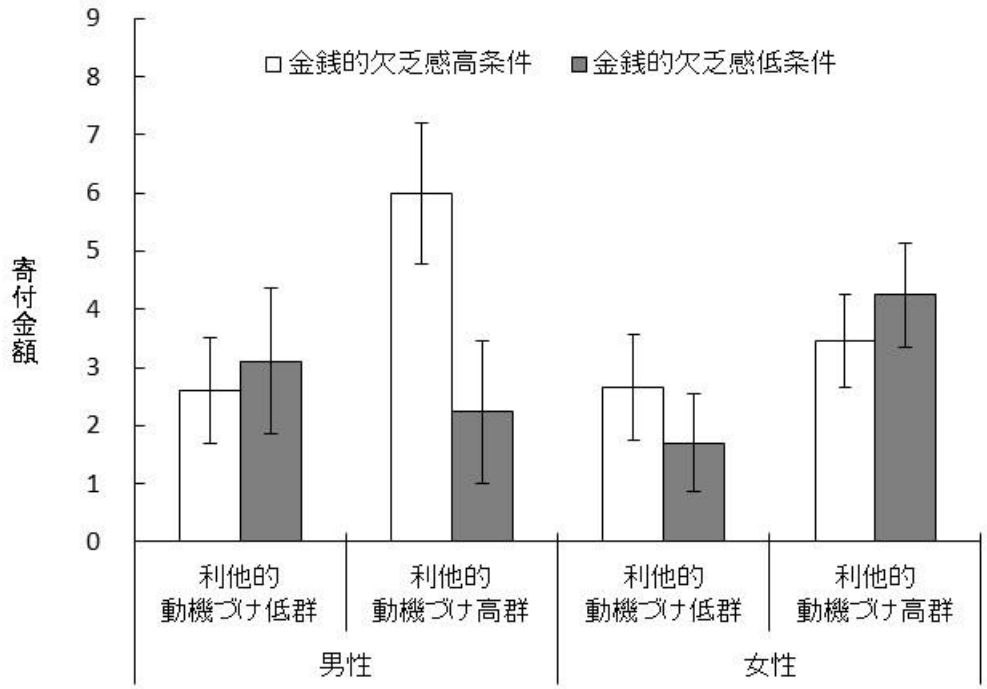


図5-1　性別・条件・利他的動機づけ（*M*±1*SD*）ごとの、寄付金額の予測値

注）得点範囲は0～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

ボランティアする確率（しない60名、する36名）およびボランティア時間（$M = 2.21$, $SD = 3.09$）については、2次の交互作用が有意となることはなく（$b = -0.36$, $SE = 1.41$, $Z = 0.25$, $p = .80$; $b = -0.47$, $SE = 1.79$, $t(88) = 0.27$, $p = .79$）、寄付意図についての分析で示された傾向は確認されなかった。よって、条件は援助行動全般に影響を及ぼしていたわけではなく、寄付意図にのみ影響を及ぼしていたことが示唆される。性別・条件・利他的動機づけの高低ごとのボランティア時間の予測値を図5-2に示す。なお、これらの結果は、ボランティア経験の個人差の効果を統制しても、大きく変わらなかった。

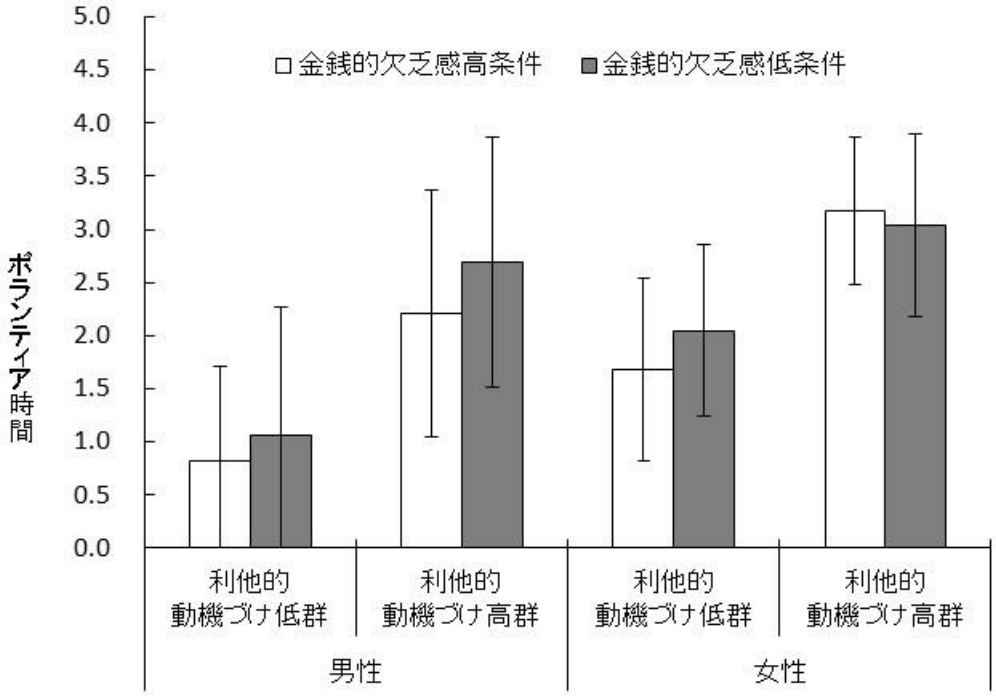


図5-2　性別・条件・利他的動機づけ（$M \pm 1SD$）ごとの、ボランティア時間の予測値

注）得点範囲は0～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

原因帰属についても、探索的に、性別を考慮に入れた分析を行ってみた。まず、児童養護施設の運営が厳しい理由として「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性について、性別に分析を行った。その結果、男性においては、金銭的欠乏感低条件（38.89%）より金銭的欠乏感高条件（76.47%）の方が「資金不足」を選択する割合が有意に高かった（$\chi^2(1) = 5.04$, $p = .02$, 表5-1）。他方、女性においては有意差は見られなかった（$\chi^2(1) = 0.79$, $p = .37$, 表5-2）。この結果は、男性においてのみ、仮説の前提が成り立っていたことを示唆するものであった。

表5-1　男性における、条件・選択肢ごとの参加者の人数

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	4	13	17
金銭的欠乏感低条件	11	7	18
合計	15	20	35

表5-2　女性における、条件・選択肢ごとの参加者の人数

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	15	15	30
金銭的欠乏感低条件	12	19	31
合計	27	34	61

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件（金銭的欠乏感高／金銭的欠乏感低）×理由の種類（人手不足／資金不足）×性別の3要因混合計画の分散分析を行った。しかし、2次の交互作用は非有意であり（$F(1, 92) = 0.97, p = .33, \eta_p^2 = .01$）、こちらの指標については、男性においても女性においても、仮説の前提が成り立っていたことを示唆する結果は得られなかった。

5－1－4　考察

本実験の結果、男性においては、仮説(1)を概ね支持する結果が得られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が高いというパターンが見られ、寄付金額が有意に高かった。この結果は、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感が寄付意図を上昇させることを示すものであった。

仮説(2)を支持する結果は得られなかった。ただし、これと一致するパターンは確認された。すなわち、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が低く、寄付金額が低いというパターンが見られた。有意とならなかった理由は明らかではないが、1つの可能性として、床

効果が生じていたことが考えられる。すなわち、寄付意図がどれほど低い場合でも、0円未満を選択することはできないために、条件間の差が現れにくかった可能性が考えられる。あるいは、金銭的欠乏感によって高まると想定していた金銭保持欲求が、実際には高まっていなかったためかもしれない。この点については、今後の検討が必要である。

なお、寄付意図についての分析で示された傾向は、ボランティアする確率やボランティア時間といったボランティア意図の指標においては確認されず、寄付意図に特有の傾向であった。また、仮説の前提となっていた、「金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強める」という現象も、一部の指標においてではあるものの、確認された。

他方、女性においては、仮説を支持する結果は全く得られず、仮説の前提が成り立っていたことを示唆する結果も得られなかった。直接的な証拠はないものの、この理由として、本実験では条件操作が女性において有効でなかった可能性が考えられる。ここまで、3日間の食費計画を1,000円あるいは10,000円で考えてもらうことで、金銭的欠乏感を操作してきた。しかし、本実験の感想にあったように、おおよその食事や食材の費用がわからない場合や、食費に困った経験がない場合は、本実験の操作の有効性が低下する可能性がある。また、自炊経験が豊富で節約術を心得ている人においても、有効性が低下する可能性がある。さらに、もし女性は男性より必要な食事量が少ないとすると、金銭的欠乏感高条件において女性が感じる欠乏は、男性が感じるそれよりも弱くなる可能性もある。本実験においてこれらの可能性が生じていたかどうかは明らかではないが、ここまで用いてきた操作方法には、こうしたリスクが存在しうる。

加えて、ここまですべての実験において、金銭的欠乏感の操作として食費計画を考えてもらうという方法を用いてきたが、単一の操作方法に頼った実験では、予期していなかった影響が生じ、それが偶然に仮説と一致した方向の結果を生み出す可能性がある。例えば、金銭的欠乏感高条件では、3日間で1,000円しか使えないため、自宅で1人で食事することを考えた参加者が多かったかもしれない。それに対し、金銭的欠乏感低条件では、3日間で10,000円も使えるため、他者と一緒に食事することを考えた参加者が多かったかもしれない。このように、金銭的欠乏感高条件では「人」について考える機会がなかった一方、低条件ではあったために、後の課題で原因を人手不足に帰属しやすかったことが考えられる[18]。こうした可能性を排除するためにも、複数の操作方法を用いて同様の結果が得られるかどうかを確

[18] ただし、条件はボランティア意図には影響していなかったため、「人」について考える程度の差異が寄付意図に影響を及ぼしていたとは考えにくい。

認し、知見の妥当性を高めることが望ましい。

そこで実験4では、これまでとは異なる方法で金銭的欠乏感を操作する。具体的には、8,000円あるいは40,000円で、友人と2人での1泊2日の旅行計画を立ててもらう。また、回答の際には選択肢を設けることとする。旅行計画という題材を用いることで、金銭的欠乏感高条件においても、ある程度「人」について考えるようになると考えられる。また、選択肢を設けることで、知識の程度が操作の有効性に影響する可能性を低減できると考えられる。このように、新しい操作方法を用いることで、すべてではないが、上述した問題のいくつかを解消できると考えられる。

5－2　実験4－旅行計画による欠乏感操作－

5－2－1　問題

実験3では、男性において、図2-2のモデルの上側から導かれる予測を支持する結果が得られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が高いことが示された。図2-2のモデルの下側から導かれる予測を支持する結果は得られなかったものの、これと一致するパターンは確認された。すなわち、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が低いというパターンが見られた。しかしながら、女性においてはこうした傾向は見られなかった。この理由として、食費計画を考えるという操作方法の有効性が、女性においては低くなりやすい可能性が考えられた。また、これまで用いてきた操作方法では、結果の一部について代替説明が成り立つという問題点もあった。

そこで実験4では、金銭的欠乏感の操作として、新しい方法を用いることとする。具体的には、8,000円あるいは40,000円で、友人と2人での1泊2日の旅行計画を立ててもらう。また、回答の際には選択肢を設ける。

仮説

(1) 利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が高いだろう

(2) 利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が低いだろう

5－2－2　方法

実験参加者　大学生131名（女性101名、男性30名）が参加した。なお、分析には留学生を除いた130名（女性100名、男性30名）を用いた。平均年齢は19.52歳（$SD = 1.49$）であった。

実験計画　2要因の実験計画であった。第1要因は金銭的欠乏感であり、実験的に操作した。すなわち、参加者を金銭的欠乏感高条件あるいは金銭的欠乏感低条件にランダムに割り当てた。第2要因は利他的動機づけであった。こちらについては個人差を測定することとした。

手続き　大学の講義時間内に1冊の質問紙を各参加者に配布することで実験を実施した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。そしてまず、「旅行計画の立て方に関する調査」と称した部分で、金銭的欠乏感の操作を行った（詳細は後述）。次に、実験3と同様に、「児童養護施設問題に関する調査」と称した部分で、他者の苦境に対する原因帰属、寄付意図、ボランティア意図、および利他的動機づけを測定した。ただし、利他的動機づけを測定する項目のうち、「児童養護施設の子どもと自分との間に、心理的な距離を感じた（逆転項目）」という項目は表現がわかりにくい可能性があるため、「児童養護施設の子どもと自分は、似ていると思った」に変更した。最後に、実験3と同様に、2つの調査全体に関わる質問と称した部分で、金銭的欠乏感の操作チェックのための質問や、寄付およびボランティア経験の個人差に関する質問等を行った。全員の回答が終わった後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

金銭的欠乏感の操作　参加者はまず、友人と2人で1泊2日の旅行に行く約束をしている鈴木さんという大学生についての文章を読んだ。金銭的欠乏感高条件では、鈴木さんはお金に余裕がなく、宿と食事に8,000円しか使えないと記述されていた。金銭的欠乏感低条件では、鈴木さんは旅行券が当たったため、宿と食事に40,000円使えると記述されていた。実際に用いた文章は以下の通りである（ゴシック体太字の箇所の［ ］外が金銭的欠乏感高条件で用いたもの、［ ］内が金銭的欠乏感低条件で用いたものである）。

> 鈴木さんは大学生です。今度の連休に友人と2人で、1泊2日で温泉街に旅行に行く約束を、夏休み前からしていました。**ところが、計画を立てる段階で、鈴木さんはその頃お金に余裕がなく、どれだけ頑張っても宿と食費に8,000円しか使えないことに気がつきました［ラッキーなことに、友人と応募した8万円の旅行券が当たったため、2人は宿と食費に1人4万円使えることになりました］**。友人は、鈴木さんに合わせてくれると言っています。

この文章を読んだ後、参加者は、もし自分が鈴木さんの状況に置かれたら、このお金をどのように使うかを、表5-3の選択肢から選び、表5-4のような表に記入するよう指示された。なお、記入の時間としてまず4分間設け、4分間経過後、終わった人には次の「児童養護施設に関する調査」へ進むよう指示した。終わっていない人には、引き続き旅行計画の記入を続け、終わり次第、次へ進むよう指示した。

表5-3　実験4において金銭的欠乏感の操作で提示された選択肢

宿の選択肢	
2人で15畳の和室	1人12,000円、エアコンあり、露店風呂付客室（温泉）、大浴場なし
2人で12畳の和室	1人10,000円、エアコンあり、大浴場3種類あり（温泉）
2人で8畳の和室	1人7,800円、エアコンあり、大浴場あり（温泉）
2人で4畳の和室	1人4,800円、築40年、エアコンなし、部屋風呂のみ（温泉ではない） 不衛生（ホコリっぽく，カビらしきものも見える）
ネットカフェ	1人2,000円、シャワーなし、ベッドなし（椅子とテーブルのみ）

食事の選択肢		
現地の高級な和食屋のコース料理(9,000円)	現地の高級な洋食屋のコース料理(9,000円)	
現地の人気店のコース料理（6,000円）	現地の人気店の定食（3,500円）	
現地の平凡なお店の定食（1,500円）	全国チェーン店の定食（1000円）	
コンビニのお弁当（600円）	コンビニのおにぎり（1つ150円）	なし（0円）

表5-4　実験4において金銭的欠乏感の操作で用いられた表

		内容 *例）2人で8畳の和室*	予算 *7,800円*
1日目	昼食		円
	夕食		円
	宿		円
2日目	朝昼兼用の食事		円
		合計（**8,000円**以内）	円

注）金銭的欠乏感低条件では、太字下線の箇所が40,000円となっていた。

5－2－3　結果

操作チェック　金銭的欠乏感について、条件を独立変数とした*t*検定を行った。その結果、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 3.41, SE = 0.11$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 1.45, SE = 0.08$）、金銭的欠乏を強く感じていた（$t(128) = 14.69, p < .001, d = 2.57$）。よって、操作は成功していたと考えられる。

仮説の検証　利他的動機づけを測定する5項目の内的一貫性を確認したところ、$\alpha = .53$と低かった。そこで、他の4項目すべてと相関のなかった1項目（「児童養護施設の子どもと自分は、似ていると思った」）を除いて、最小二乗法・斜交回転による探索的因子分析を行ったところ、2つの因子に分かれた。第1因子は「児童養護施設の子どもを、かわいそうだと思った」「児童養護施設の子どもを思い、胸が苦しくなった」の2項目で構成されていたため、これを合算平均し、感情的反応因子と命名した（$r = .62, p < .001, M = 3.86, SD = 1.25$）。第2因子は「児童養護施設の子どものために、何かしてあげたいと思った」「児童養護施設の子どもは、自分とは関係がないと思った」の2項目で構成されていたため、これを合算平均し、利他的動機づけ因子と命名した（$r = .27, p < 01, M = 3.83, SD = 1.13$）[19]。感情的反応因子には、利他的動機づけだけでなく、援助しなければならないプレッシャーが弱い場面では援助を低下させる「個人的苦痛」が含まれている可能性を考慮し（Batson, 2010）、以降の分析では、利他的動機づけ因子を利他的動機づけの指標として用いた[20]。

まず、寄付する確率（しない60名、する70名）について、条件と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般化線形モデルによる分析（ロジスティック回帰分析）を行った。しかし、利他的動機づけの主効果のみ有意で（$b = 0.38, SE = 0.16, Z = 2.34, p = .02$）、条件の主効果および交互作用項は有意ではなかった（$Z\text{s} < 0.60, p\text{s} > .55$）。

次に、寄付金額（$M = 3.19, SD = 3.58$）について、条件と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般線形モデルによる分析を行った。しかし、こちらについても、利他的動機づけの主効果のみ有意で（$b = 0.86, SE = 0.27, t(126) = 3.14, p < .01$）、条件の主効果および交互作用項は有意ではなかった（$t\text{s}(126) < 0.27, p\text{s} > .80$）。

---

[19] 条件は、感情的反応因子にも、利他的動機づけ因子にも、影響を及ぼしていなかった（$t(127) = 0.45, p = .65, d = .08; t(128) = 0.45, p = .65, d = .08$）。

[20] 感情的反応因子を用いて同様の分析を行っても、以降で示すような条件の効果は見られなかった。

これらの結果は、寄付経験の個人差の効果を統制しても大きく変わらなかった。よって、仮説は支持されなかった。

前提の確認　本実験の仮説は、前章で示された「金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強める」という知見に基づいていた。そこで次に、この前提が本実験において成り立っていたかどうかを検証した。

まず、児童養護施設の運営が厳しい理由として「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性を検討するために、χ^2検定を行った。その結果、「資金不足」を選択する割合は金銭的欠乏感低条件（46.38%）より金銭的欠乏感高条件（70.49%）において有意に高かった（$\chi^2(1) = 7.71, p < .01$, 表5-5）。この結果は、本実験の仮説の前提が成り立っていたことを示唆するものであった。

表5-5　条件および選択肢ごとの参加者の人数

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	18	43	61
金銭的欠乏感低条件	37	32	69
合計	55	75	130

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件（金銭的欠乏感高／金銭的欠乏感低）×理由の種類（人手不足／資金不足）の2要因混合計画の分散分析を行った（図5-3）。その結果、条件の主効果は非有意（$F(1, 128) = 0.68, p = .41, \eta_p^2 = .01$）、理由の種類の主効果は有意であり、資金不足の方が（$M = 8.80, SE = 0.11$）人手不足より（$M = 8.24, SE = 0.12$）重大であると評定されていた（$F(1, 128) = 12.23, p < .001, \eta_p^2 = .09$）。より重要なことに、交互作用が有意であった（$F(1, 128) = 6.75, p = .01, \eta_p^2 = .05$）。単純主効果分析の結果、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 9.08, SE = 0.17$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 8.52, SE = 0.16$）、「資金不足」という理由をより重大であると評定していた（$F(1, 256) = 5.66, p = .02, \eta_p^2 = .04$）。この結果は、本実験の仮説の前提が成り立っていたことを示唆するものであった。「人手不足」については、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 8.10, SE = 0.17$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 8.38, SE = 0.16$）重大でないと評定する傾向が見られたが、その差は有意ではなかった（$F(1, 256) = 1.40, p = .24, \eta_p^2 = .01$）。

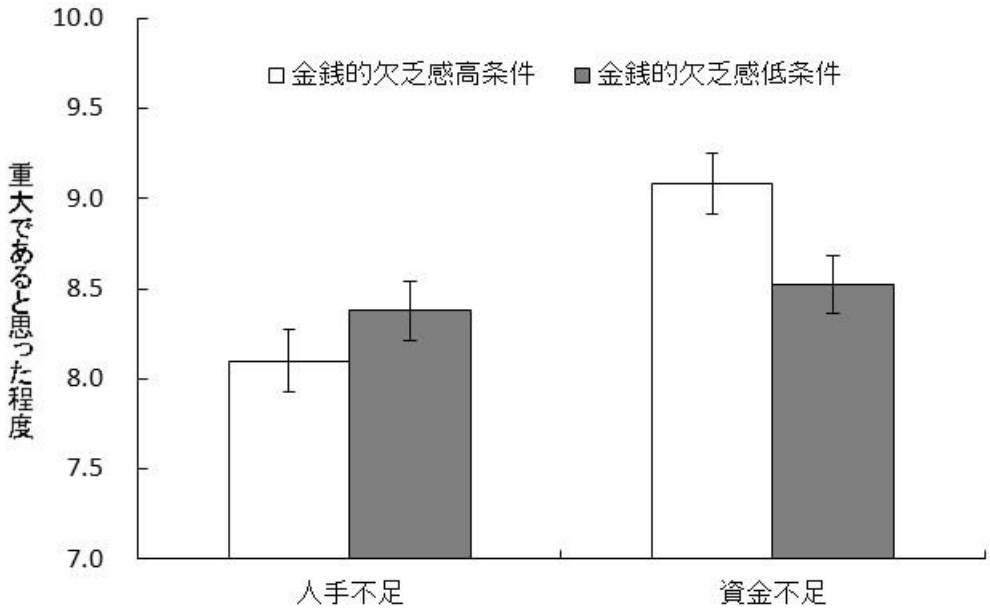


図5-3　条件および理由の種類ごとの、原因として重大であると評定した程度

注）得点範囲は1～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

これらから、金銭的欠乏感は他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強めており、本実験の仮説の前提が成り立っていたことが示唆される。

探索的分析　本実験においては、仮説の前提が成り立っていたにも関わらず、仮説を支持する結果が得られなかった。そこで、探索的に、性別を考慮に入れた分析を行った。実験3では、男性においてのみ、仮説を支持する結果が得られたためである。

まず、寄付する確率について、条件と利他的動機づけと性別、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般化線形モデルによる分析（ロジスティック回帰分析）を行った。しかし、2次の交互作用は有意とならなかった（$b = 2.03, SE = 1.31, Z = 1.55, p = .12$）。ただし、寄付経験の個人差（回数）の効果（$b = 0.61, SE = 0.21, Z = 2.88, p < .01$）を統制して同様の分析を行ったところ、2次の交互作用が有意傾向となった（$b = 3.10, SE = 1.82, Z = 1.70, p = .09$）。下位検定を行った結果、男性においては条件×利他的動機づけの交互作用が有意傾向であったのに対し（$b = -3.02, SE = 1.79, Z = 1.69, p = .09$）、女性においては非有意であった（$b = 0.08, SE = 0.36, Z = 0.23, p = .82$）。男性において条件×利他的動機づけの交互作用が有意傾向であったため、男性における条件の効果を、利他的動機づけの平均±1SDにおいて検討し

た。その結果、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が高い傾向が見られた（$b = -4.56, SE = 2.47, Z = 1.85, p = .06$）。また、有意ではなかったものの、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が低かった（$b = 2.24, SE = 2.04, Z = 1.10, p = .27$）。これらの結果は、仮説(1)を支持するものであり、仮説(2)と一致するパターンであった。

次に、寄付金額について、条件と利他的動機づけと性別、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般線形モデルによる分析を行った（図5-4）。しかし、2次の交互作用は有意とならなかった（$b = 0.93, SE = 1.47, t(122) = 0.63, p = .53$）。また、こちらについては、寄付経験の個人差（金額）の効果（$b = 0.34, SE = 0.13, t(119) = 2.61, p = .01$）を統制しても、2次の交互作用が有意となることはなかった（$b = 0.93, SE = 1.46, t(119) = 0.64, p = .53$）。ただし、男性におけるパターンは、仮説と一致するものであった（図5-4）。すなわち、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が寄付金額が低く、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が寄付金額が高いというパターンが見られた。

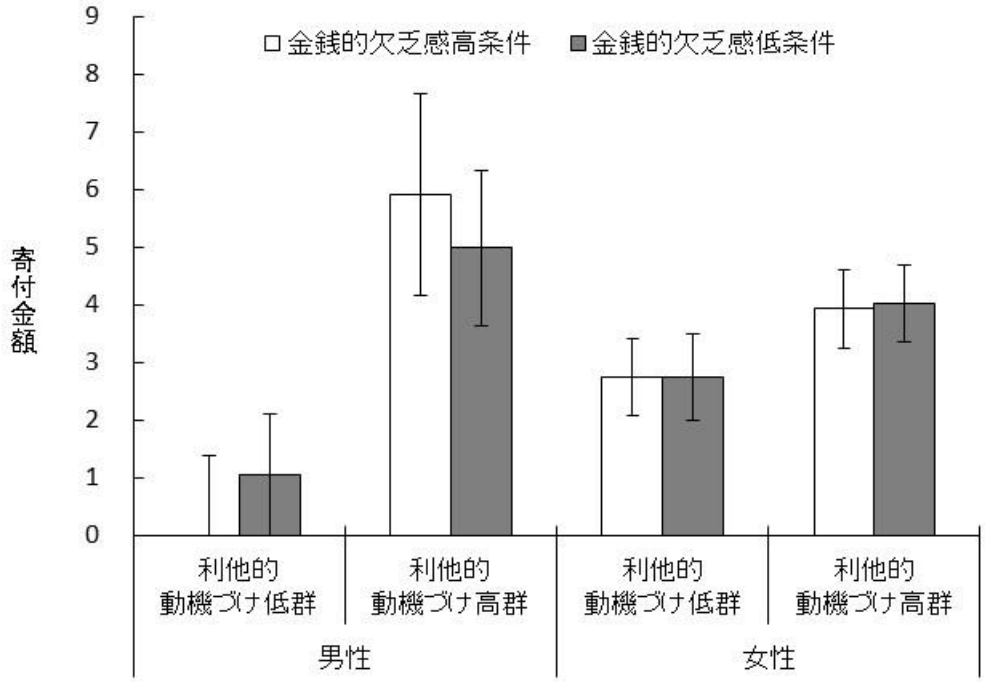


図5-4　性別・条件・利他的動機づけ（$M \pm 1SD$）ごとの、寄付金額の予測値

注）得点範囲は0～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

ボランティアする確率（しない64名、する66名）およびボランティア時間（$M = 3.13$, $SD = 3.40$）については、2次の交互作用が有意となることはなく（$b = -1.14$, $SE = 0.93$, $Z = 1.23$, $p = .22$; $b = -1.36$, $SE = 1.30$, $t(122) = 1.05$, $p = .30$）、寄付意図についての分析で示された傾向は確認されなかった。よって、条件は援助行動全般に影響を及ぼしていたわけではなく、寄付意図にのみ影響を及ぼしていたことが示唆される。性別・条件・利他的動機づけの高低ごとのボランティア時間の予測値を図5-5に示す。なお、これらの結果は、ボランティア経験の個人差の効果を統制しても、大きく変わらなかった。

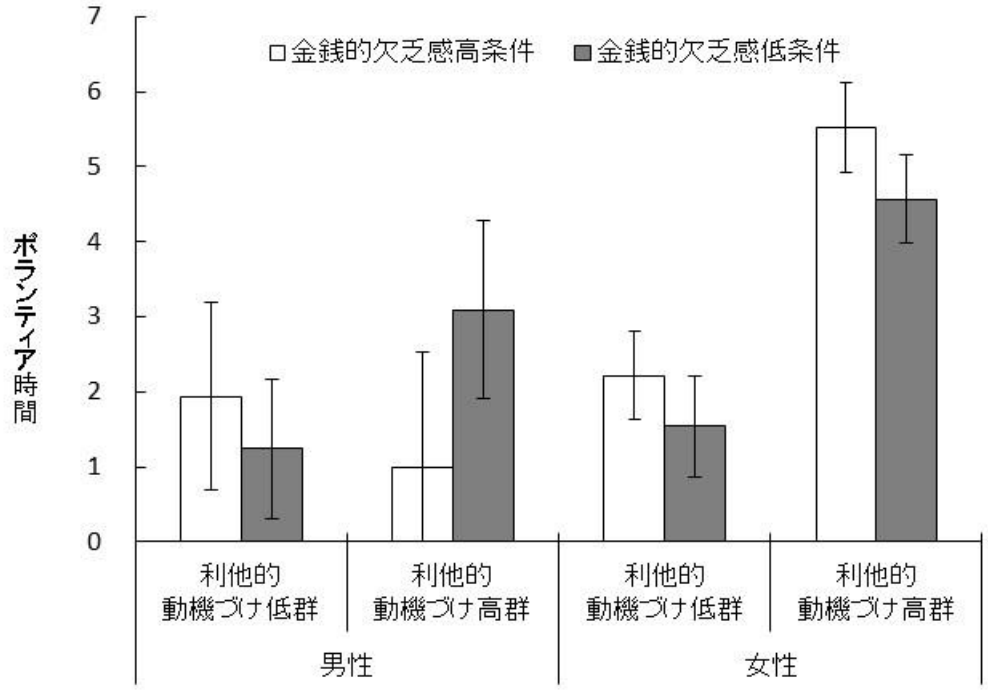


図5-5　性別・条件・利他的動機づけ（$M \pm 1SD$）ごとの、ボランティア時間の予測値

注）得点範囲は0～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

原因帰属についても、探索的に、性別を考慮に入れた分析を行ってみた。まず、児童養護施設の運営が厳しい理由として「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性について、性別に分析を行った。その結果、男性においては、有意ではなかったものの、金銭的欠乏感低条件（41.18%）より金銭的欠乏感高条件（53.85%）の方が「資金不足」を選択する割合が高かった（$\chi^2(1) = 0.48$, $p = .49$, 表5-6）。女性においても、金銭的欠乏感低条件（48.08%）より金銭的欠乏感高条件（75.00%）の方が「資金不足」を選択する割合が高かった（$\chi^2(1) = 7.61$, $p < .01$, 表5-7）。

表5-6　男性における、条件・選択肢ごとの参加者の人数

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	6	7	13
金銭的欠乏感低条件	10	7	17
合計	16	24	30

表5-7　女性における、条件・選択肢ごとの参加者の人数

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	12	36	48
金銭的欠乏感低条件	27	25	52
合計	39	61	100

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件（金銭的欠乏感高／金銭的欠乏感低）×理由の種類（人手不足／資金不足）×性別の3要因混合計画の分散分析を行った。しかし、2次の交互作用は非有意であった（$F(1, 126) = 0.18, p = .67, \eta_p^2 = .001$）。

これらから、本実験の仮説の前提となる「金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強める」という現象は、性別に関わらず生じていたことが示唆される。

5－2－4　考察

本実験の結果、男性においては、仮説(1)を概ね支持する結果が得られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が高い傾向が見られ、寄付金額が高いというパターンが見られた。この結果は、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感が寄付意図を上昇させることを示すものであった。

仮説(2)を支持する結果は得られなかった。ただし、これと一致するパターンは確認された。すなわち、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が低く、寄付金額が低いというパターンが見られた。有意とならなかった理由は明らかではないが、1つの可能性として、床効果が生じていたことが考えられる。すなわち、寄付意図がどれほど低い場合でも、0円未

満を選択することはできないために、条件間の差が現れにくかった可能性が考えられる。あるいは、金銭的欠乏感によって高まると想定していた金銭保持欲求が、実際には高まっていなかったためかもしれない。この点については、今後の検討が必要である。

なお、寄付意図についての分析で示された傾向は、ボランティアする確率やボランティア時間といったボランティア意図の指標においては確認されず、寄付意図に特有の傾向であった。

他方、女性においては、仮説を支持する結果は全く得られなかった。仮説の前提となる「金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強める」という現象は、性別に関わらず生じていたことから、女性においては、他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向が寄付意図に影響を及ぼしにくかった可能性が考えられる。この原因について、直接的な証拠はないものの、寄付意図の測定方法に問題があったことが考えられる。これまで寄付意図やボランティア意図を測定する際には、児童養護施設を運営するNPOにボランティアや寄付をお願いされた場合にどうするか、と尋ねていた。しかし、説得に関する研究では、女性は男性より説得の影響を受けやすいことが示されている（Eagly & Carli, 1981; McGuire, 1968; 上野, 1994）。そのため、児童養護施設を運営するNPOにボランティアや寄付を「お願いされた場合に」どうするかというように、ボランティアや寄付を行うことを説得されているような文脈において尋ねると、女性においては金銭的欠乏感の操作の影響が生じにくいことが考えられる。そこで実験5では、寄付意図やボランティア意図を尋ねる際に、「NPOに依頼された場合」という文脈を除いて尋ねることとする。

また、実験4においては、これまでとは異なる金銭的欠乏感の操作を用いた場合でも、これまでの結果が再現されるかどうかを検討することも目的の1つであった。実験3までで用いてきた操作方法では、金銭的欠乏感だけでなく、「人」について考える機会も条件間で変わっている可能性があり、そのために、金銭的欠乏感低条件において、後の課題で原因を人手不足に帰属しやすかったことが考えられた。また、回答方法が自由記述形式であったため、題材に関する事前知識が操作の有効性に影響してしまう可能性があった。そこで実験4では、旅行計画という題材を用いることで、金銭的欠乏感高条件においても、ある程度「人」について考えるようにした。また、選択肢を設けることで、題材に関する事前知識が操作の有効性に影響を及ぼさないようにした。このように操作方法を変更した本実験においても、条件は他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強めていた。この結果は、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるという知見の妥当性を示すものである。

5－3　実験5－寄付意図の測定方法を変更して－

5－3－1　問題

実験4では、男性において、図2-2のモデルの上側から導かれる予測を支持する結果が見られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が高いことが示された。図2-2のモデルの下側から導かれるを支持する結果は得られなかったものの、これと一致するパターンは確認された。すなわち、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が低いというパターンが見られた。しかしながら、女性においてはこうした傾向は見られなかった。この理由として、寄付意図の測定方法に問題があった可能性が考えられた。すなわち、ボランティアや寄付を「お願いされた場合に」どうするかというように、ボランティアや寄付を行うことを説得されているような文脈において尋ねると、女性においては金銭的欠乏感の操作の影響が生じにくいことが考えられた。

そこで実験5では、寄付意図やボランティア意図を尋ねる際に、「NPOに依頼された場合」という文脈を除いて尋ねることとする。具体的には、「NPOがボランティアや寄付を募っているところを見かけた場合」、どのようにするかを尋ねることとする。

仮説

(1) 利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が高いだろう

(2) 利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が低いだろう

5－3－2　方法

実験参加者　大学生83名（女性23名、男性60名）が実験に参加した。なお、分析には留学生を除いた82名（女性23名、男性59名）を用いた。平均年齢は20.91歳（$SD = 3.08$）であった。

実験計画　2要因の実験計画であった。第1要因は金銭的欠乏感であり、実験的に操作した。すなわち、参加者を金銭的欠乏感高条件あるいは金銭的欠乏感低条件にランダムに割り当てた。第2要因は利他的動機づけであった。こちらについては個人差を測定することとした。

手続き　大学の講義時間内に1冊の質問紙を各参加者に配布することで実験を実施した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。まず実験4と同様に、「旅行計画の立て方に関する調査」と称した部分で、金銭的欠乏感を操作した。次に実験4と同様に、「児童養護施設問題に関する調査」と称した部分で、寄付意図、ボランティア意図、および利他的動機づけを測定した。ただし、本実験では、寄付意図・ボランティア意図を尋ねる際に、「NPOにお願いされた場合」ではなく、「NPOがボランティアや寄付を募っているところを見かけた場合」どうするかを尋ねた。また、実験4において条件操作が原因帰属に影響を及ぼすことが確認されたため、本実験では原因帰属については尋ねなかった。加えて、利他的動機づけを測定する項目のうち、「児童養護施設の子どもと自分は、似ていると思った」という項目は、実験4において他の全項目と相関がなかったことを考慮し、本実験では除いた。最後に、実験3,4と同様に、2つの調査全体に関わる質問と称した部分で、金銭的欠乏感の操作チェックのための質問や、寄付およびボランティア経験の個人差に関する質問等を行った。全員の回答終了後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

5－3－3　結果

操作チェック　金銭的欠乏感について、条件を独立変数としたt検定を行った。その結果、金銭的欠乏感高条件の方が（$M = 3.57$, $SE = 0.11$）金銭的欠乏感低条件より（$M = 1.50$, $SE = 0.10$）、金銭的欠乏を強く感じていた（$t(79) = 13.72$, $p < .001$, $d = 3.03$）。よって、操作は成功していたと考えられる。

仮説の検証　利他的動機づけを測定する4項目に、ある程度の内的一貫性が見られたため（$\alpha = .69$）、これらを合算平均した（$M = 4.11$, $SD = 1.02$）[21]。

[21] 念のため、最小二乗法・斜交回転による探索的因子分析を行ったが、1 つの因子にまとまった。また、条件は利他的動機づけに影響を及ぼしていなかった（$t(78) = 0.80$, $p = .43$, $d = .18$）。

そしてまず、寄付する確率（しない32名、する49名）について、条件と利他的動機づけ[22]、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般化線形モデルによる分析（ロジスティック回帰分析）を行った。その結果、条件の主効果が非有意（$b = -0.50, SE = 0.52, Z = 0.97, p = .33$）、利他的動機づけの主効果が有意傾向（$b = 0.98, SE = 0.52, Z = 1.88, p = .06$）、交互作用項が有意傾向となった（$b = -1.82, SE = 1.04, Z = 1.74, p = .08$）。交互作用が有意傾向となったため、下位検定を行ったところ、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が有意に高かった（$b = -1.41, SE = 0.62, Z = 2.28, p = .02$）。また、有意ではなかったものの、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が低かった（$b = 0.41, SE = 0.84, Z = 0.48, p = .63$）。これらの結果は、仮説(1)を支持するものであり、仮説(2)と一致するパターンであった。

次に、寄付金額（$M = 3.40, SD = 3.33$）について、条件と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般線形モデルによる分析を行った（図5-6）。その結果、条件の主効果が非有意（$b = -1.12, SE = 0.78, t(76) = 1.43, p = .16$）、利他的動機づけの主効果

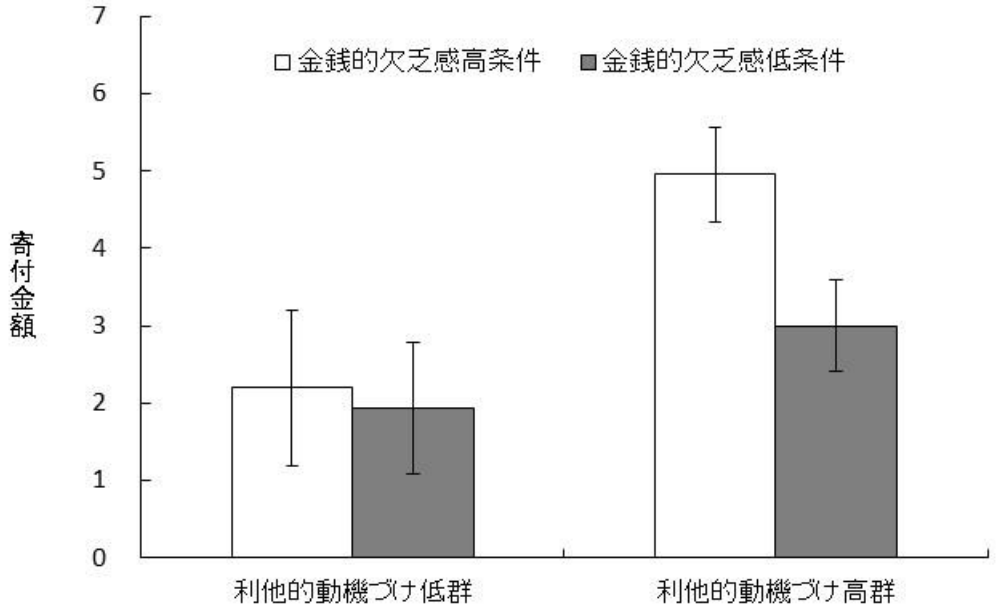


図5-6　条件および利他的動機づけごとの、寄付金額

注）得点範囲は0～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

[22] 本実験では、利他的動機づけの平均が 4.11 であり、理論的中央値の 3.5 より 0.6 以上大きいことから、利他的動機づけを連続変量ではなく、3.5 以下の参加者を低群、3.5 より大きい参加者を高群とした、2 値変数として用いた。

が有意（$b = 1.92, SE = 0.78, t(76) = 2.45, p = .02$）、交互作用が非有意であった（$b = -1.69, SE = 1.57, t(76) = 1.08, p = .28$）。交互作用は非有意であったものの、パターンとしては、利他的動機づけが高い場合の金銭的欠乏感高条件の寄付金額が突出しており、利他的動機づけ高群における条件の効果は有意であった（$b = -1.96, SE = 0.85, t(76) = 2.31, p = .02$）。これは、仮説(1)を支持する結果であった。利他的動機づけ低群における条件の効果は非有意であった（$b = -0.27, SE = 1.32, t(76) = 0.21, p = .84$）。よって、仮説(2)は支持されなかった。

なお、これらの結果は、寄付経験の個人差の効果を統制しても大きく変わらなかった。よって、寄付する確率と寄付金額の結果を考え合わせると、仮説(1)は概ね支持され、仮説(2)は支持されなかったといえる。

ボランティアする確率（しない56名、する25名）およびボランティア時間（$M = 1.62, SD = 2.70$）については、交互作用が有意となることはなく（$b = 0.99, SE = 1.58, Z = 0.63, p = .53$; $b = 0.48, SE = 1.30, t(76) = 0.37, p = .71$）、寄付意図についての分析で示された傾向は確認されなかった。よって、条件は援助行動全般に影響を及ぼしていたわけではなく、寄付意図にのみ影響を及ぼしていたことが示唆される。条件および利他的動機づけの高低ごとのボランティア時間を図5-7に示す。なお、これらの結果は、ボランティア経験の個人差の効果を統制しても、大きく変わらなかった。

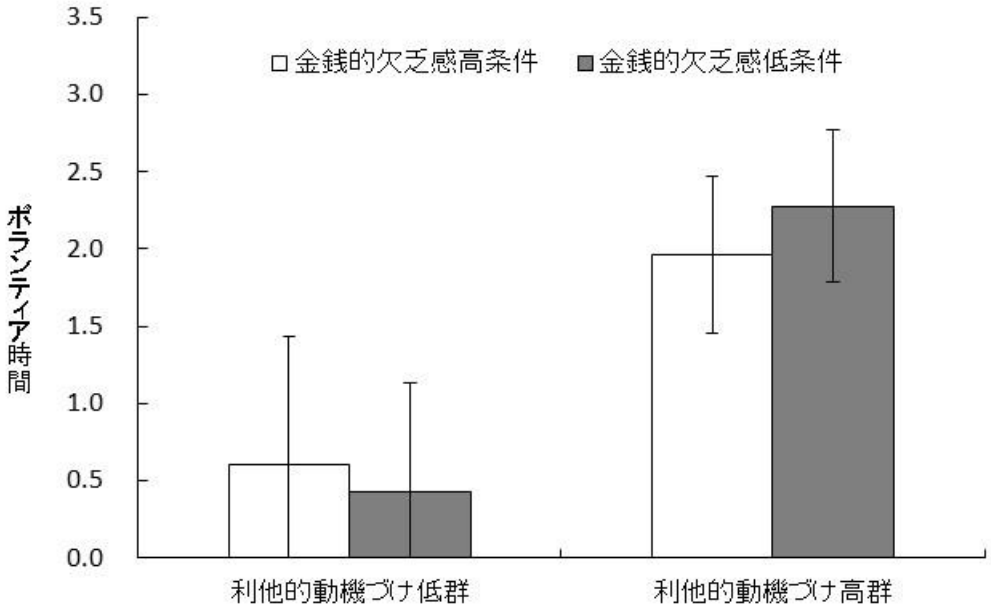


図5-7　条件および利他的動機づけごとの、ボランティア時間

注）得点範囲は0～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

5－3－4　考察

本実験の結果、仮説(1)を支持する結果が得られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が有意に高く、寄付金額も有意に高かった。この結果は、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感が寄付意図を上昇させることを示すものであった。

他方、仮説(2)を支持する結果は得られなかった。寄付する確率については、仮説(2)とパターンは一致していたものの、寄付金額についてはパターンも一致していなかった。すなわち、利他的動機づけが低い場合、寄付する確率については、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が高められなかった条件の参加者より低いというパターンが見られたものの、寄付金額についてはこれと反対のパターンが見られた。仮説(2)が支持されなかった理由は明らかではないが、1つの可能性として、床効果が生じていたことが考えられる。すなわち、寄付意図がどれほど低い場合でも、0円未満を選択することはできないために、条件間の差が現れにくかった可能性が考えられる。あるいは、金銭的欠乏感によって高まると想定していた金銭保持欲求が、実際には高まっていなかったためかもしれない。この点については、今後の検討が必要である。

なお、寄付意図についての分析で示された傾向は、ボランティアする確率やボランティア時間といったボランティア意図の指標においては確認されず、寄付意図に特有の傾向であった。

5－4　全体考察

本章では、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響について、実験を実施し、検討した。実験3では、男性においてのみ、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が高められなかった条件の参加者より寄付意図が高いことが示された。金銭的欠乏感の操作方法を変更した実験4においても、男性においてのみ、同様の傾向が示された。寄付意図の測定方法を修正した実験5では、男性と女性を合わせた全参加者において、この傾向が示された。これらの結果は、利他的動機づけが高い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を上昇させる、という仮説を支持するものであると考えられる。

本章で示された結果は、貧しさと寄付のパラドクスについて残る「なぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という謎の解決に寄与すると考えられる。前章および本章の一部の実験において、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強めることが示された。加えて、本章では、利他的動機づけが高い場合（i.e., 他者を助けようという意図が高い場合）には、金銭的欠乏感が寄付意図を高めることが示された。これらの知見を考え合わせると、貧しい人が他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのは、彼らが他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいためであることが考えられる。

また、本章で示された結果は、欠乏感に関する研究の知見を拡大する。欠乏感に関する従来の研究の多くは、欠乏感が個人の課題遂行に及ぼす影響を検討してきた。それに対し、本章で示された結果は、欠乏感が、別の要因により喚起した動機づけと相まって、対人・社会的行動にも影響を及ぼすことを示唆している。欠乏はお金だけでなく「時間」や「人との繋がり」など多様な資源について生じうることを考慮すると（Mullainathan & Shafir, 2013）、この知見は、人の様々な行動を説明・予測する視点を提供しうるであろう。そのような意味で、欠乏感が寄付意図に及ぼす影響を検討した本章の実験には、一定の意義があると思われる。

ただし、本章で扱った実験には、いくつかの限界点がある。第1に、図2-2のモデルの下側を支持する結果は得られなかった。すなわち、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感は寄付意図を低めるという仮説は支持されなかった。ただし、パターンとしては仮説と一致する場合が多かった。仮説が支持されなかった理由は明らかではないが、1つの可能性と

して、床効果が生じていたことが考えられる。すなわち、寄付意図がどれほど低い場合でも、0円未満を選択することはできないために、条件間の差が現れにくかった可能性が考えられる。あるいは、金銭的欠乏感によって高まり、寄付意図を低めると想定していた金銭保持欲求が、実際には高まっていなかったためかもしれない。今後は、金銭保持欲求をきちんと測定、あるいは操作し、図2-2の下側のプロセスが本当に働くのかどうかを検討していく必要がある。

第2に、本章の実験で扱っていたのはあくまで「寄付意図」であり、「寄付行動」そのものではない。本章で測定していた寄付意図は、どの実験においても寄付経験の個人差と関連していたため（寄付する確率と寄付経験の個人差（回数）: rs > .26, ps < .05, 寄付金額と寄付経験の個人差（金額）: rs > .31, ps < .001）、実際の寄付行動とまったく無関連であるわけではないものの、実際の寄付行動を測定した場合にも、本章の実験の結果が再現されるかどうかは明らかでない。そのため、実際の寄付行動を用いた実験を行って知見の妥当性を高めることも、今後は必要であろう。

第3に、本章の知見は欠乏感研究に寄与するものの、本章で示された知見が他の欠乏感に対しても適用可能かどうかは明らかではない。これまでの実験では、金銭的欠乏感しか用いられていないためである。そこで次章では、金銭的欠乏感以外の欠乏感、具体的には時間的欠乏感を用いて、これまでと同様の知見が再現されるかどうかを検討する。

第 6 章　時間的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属とボランティア意図に及ぼす影響

6－1　実験6－旅行計画による欠乏感操作－

6－1－1　問題

第4章では、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響を検討した。そして、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めることが示唆された。第5章では、第4章の知見を前提として、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響を検討した。そして、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感が寄付意図を高めることが示された。

第6章では、本論文の研究課題とは直接関係はないが、第4章および第5章の実験と同様のパラダイムを用いて、本論文において想定される仮説モデル（図2-2）が他の欠乏感に対しても適用可能かどうかを検討する。具体的には、「時間」という資源と、時間を用いた援助行動である「ボランティア行動」を取り上げ、本論文の仮説モデルが時間という資源についても適用可能であるかどうかも検証する。これにより、寄付行動と対として考えられることが多い、ボランティア行動に関する新たな視点も提供できるかもしれない。

もし本論文において想定される仮説モデル（図2-2）が、他の欠乏感に対しても適用可能であるならば、時間的欠乏感は他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を強めるであろう。また、利他的動機づけが高い場合には、時間的欠乏感はボランティア意図を高めるであろう。なお、利他的動機づけが低い場合（図2-2の下側）についての仮説は、金銭的欠乏感について検討した第5章の実験において一貫して支持されなかったが、ここでも仮説として立てて検討する。すなわち、利他的動機づけが低い場合には、時間的欠乏感はボランティア意図を低めるであろうと予測する。

実験6では、実験4,5で用いた金銭的欠乏感の操作を改変して、時間的欠乏感を操作する。原因帰属や援助意図の測定の際に用いる題材としては、実験3,4,5と同じく、児童養護施設のシナリオを用いる。これまでと同じ題材を用いるのは、題材の変更による影響をなくし、純粋に時間的欠乏感の効果のみを検討するためである。これまでと同じ題材を用いて予測が支持されれば、それは題材が変わったためではなく、時間的欠乏感の操作の効果によるものであると、より強く結論づけることができるであろう。

仮説

(1) 時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、他者の苦境を時間の少なさに帰属しやすいだろう

(2) 利他的動機づけが高い場合には、時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、ボランティア意図が高いだろう

(3) 利他的動機づけが低い場合には、時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、ボランティア意図が低いだろう

6－1－2　方法

実験参加者　201名（女性149名、男性52名）の大学生が実験に参加した。なお、分析には留学生を除いた194名（女性144名、男性50名）を用いた。平均年齢は19.33歳（$SD = 1.22$）であった。

実験計画　2要因の実験計画であった。第1要因は時間的欠乏感であり、実験的に操作した。すなわち、参加者を時間的欠乏感高条件あるいは時間的欠乏感低条件にランダムに割り当てた。第2要因は利他的動機づけであった。こちらについては個人差を測定することとした。

手続き　大学の講義時間内に1冊の質問紙を各参加者に配布することで実験を実施した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。まず、「旅行計画の立て方に関する調査」と称した部分で、時間的欠乏感を操作した（詳細は後述）。次に実験5と同様に、「児童養護施設問題に関する調査」と称した部分で、寄付意図、ボランティア意図、および利他的動機づけを測定した。ただし、本実験では、他者の苦

境に対する原因帰属の測定として、「ボランティア・スタッフの時間が足りない」と「資金が足りない」という理由が児童養護施設の運営が厳しい原因としてそれぞれどの程度重大であるかについても尋ねた。また、利他的動機づけを測定する項目としては、実験5で用いた4項目に「児童養護施設の子どもの話は、自分とは遠い話のように感じた（逆転）」「児童養護施設の子どものことを、身近に感じた」の2項目を加えた。これは、これまでの実験においてあまり高くなかった利他的動機づけを測定する項目の内的一貫性を高めるためであった。実験4において、「この児童養護施設の子どもは、自分とは関係がないと思った（逆転）」という関係性認知に関する項目が「児童養護施設の子どものために、何かしてあげたいと思った」という項目とともに利他的動機づけ因子を構成していたため、関係性認知に関する項目を増やした。最後に、実験3,4,5と同様に、2つの調査全体に関わる質問と称した部分で、時間的欠乏感の操作チェックのための質問等を行った。全員の回答終了後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

時間的欠乏感の操作　参加者はまず、友人と2人で1泊2日の旅行に行く大学生についての文章を読んだ。時間的欠乏感高条件では、1日目の夕方と2日目のお昼に地元での用事が入ってしまい、1日目も2日目も現地では1時間しか使えないと記述されていた。時間的欠乏感低条件では、急な用事が入ることはなく、1日目は6時間、2日目は5時間を現地で使うことができると記述されていた。実際に用いた文章は以下の通りである（1つ目が時間的欠乏感高条件、2つ目が時間的欠乏感低条件で用いたものである）。

> あなたは大学生です。友人と応募した、ある温泉街への1泊2日の旅行券があたったため、今度の連休に一緒に行くことにしました。ところが、旅行が近くなったある時、1日目の夕方と2日目のお昼に、地元でどうしてもやらなければいけないことが入ってしまいました。宿のチェックインは最も遅くて20時までですが、現地の駅に到着するのは19時になってしまいます。また、翌朝は現地の駅を9時半に出発しなければいけません。しかし、この機会を逃すと旅行券の有効期限が過ぎてしまうので、旅行はこの機会に行くことにしました。友人は、旅行計画はあなたに合わせてくれると言っています。

あなたは大学生です。友人と応募した、ある温泉街への1泊2日の旅行券があたったため、今度の連休に一緒に行くことにしました。連休中に急な用事が入ることはなかったため、予定通り、1日目はお昼過ぎに現地に着き（昼食は移動の列車内で食べます）、2日目は夕方に現地を出発することにしようと思っています。宿のチェックインは最も遅くて20時までですが、お昼過ぎには現地に到着するので、1日目は時間の余裕がたっぷりあります。また、翌日の現地を出発する時間は夕方なので、2日目も時間の余裕がたっぷりあります。友人は、旅行計画はあなたに合わせてくれると言っています。

この文章を読んだ後、参加者は、もし自分がこの状況に置かれたら、どのような計画を立てるかを、表6-1の選択肢から選び、表6-2の表に記入するよう指示された。なお、記入の時間としてまず4分間設け、4分間経過後、終わった人には次の「児童養護施設問題に関する調査」へ進むよう指示した。終わっていない人には、引き続き旅行計画の記入を続け、終わり次第、次へ進むよう指示した。

表6-1　実験6において時間的欠乏感の操作で提示された選択肢

宿の選択肢			
A	旅館：やや遠いがきれいで雰囲気が良く、温泉で露天風呂も充実。移動所要時間**1.2**時間		
B	ビジネスホテル：普通のビジネスホテル。温泉ではない。移動所要時間0.4時間		
C	ネットカフェ：駅のすぐ近くにある。シャワーもベッドもない。移動所要時間0.1時間		
食事の選択肢			
U	現地で人気のコース料理（洋食）：美味しいがやや遠い。所要時間**1.5**時間		
V	現地で人気の定食（和食）：美味しいがやや遠い。所要時間**1**時間		
W	現地の平凡な定食：所要時間0.7時間	X	全国チェーン店の定食：所要時間0.5時間
Y	駅の近くにある普通のコンビニ：所要時間0.1時間	Z	なし：所要時間0時間
観光の選択肢			
O	貴重な物がある有名博物館：所要時間1時間	P	平凡だが整った庭園：所要時間**0.6**時間
Q	特徴のない美術館：所要時間0.3時間	R	行かない：所要時間0時間

注）時間的欠乏感低条件では、太字下線部が順に、1、1、0.8、0.5となっていた。

表6-2　実験6において時間的欠乏感の操作で用いられた表

		内容（記号で可） *例）　B*	所要時間 *例）　0.4 時間*
1 日目	観光（O～R から選択）		時間
	観光（O～R から選択）		時間
	夕食（U～Z から選択）		時間
	宿へ移動（A～C から選択）		時間
	合計（**1 時間以内**）		時間
2 日目	宿から移動（A～C から選択）		時間
	朝昼兼用の食事（U～Z から選択）		時間
	観光（O～R から選択）		時間
	合計（**1 時間以内**）		時間

注）時間的欠乏感低条件では、太字下線の箇所が6時間と5時間となっていた。

6－1－3　結果

操作チェック　時間的欠乏感について、条件を独立変数とした*t*検定を行った。その結果、時間的欠乏感高条件の方が（$M = 3.88, SE = 0.04$）時間的欠乏感低条件より（$M = 1.93, SE = 0.09$）、時間的欠乏を強く感じていた（$t(192) = 19.81, p < .001, d = 2.84$）。よって、操作は成功していたと考えられる。

仮説(1)の検証　児童養護施設の運営が厳しい原因として、「ボランティア・スタッフの時間が足りない」と「資金が足りない」という理由がそれぞれどの程度重大であるかについて、条件（時間的欠乏感高／時間的欠乏感低）×理由の種類（時間不足／資金不足）の2要因混合計画の分散分析を行った（図6-1）。その結果、条件の主効果は非有意（$F(1, 192) = 0.55, p = .46, \eta_p^2 = .003$）、理由の種類の主効果は有意であり、資金不足の方が（$M = 8.37, SE = 0.12$）時間不足より（$M = 8.08, SE = 0.12$）重大であると評定されていた（$F(1, 192) = 4.89, p = .03, \eta_p^2 = .02$）。より重要なことに、交互作用が有意であった（$F(1, 192) = 4.53, p = .03, \eta_p^2 = .02$）。単純主効果分析の結果、時間的欠乏感高条件の方が（$M = 8.29, SE = 0.17$）時間的欠乏感低条件より（$M = 7.86, SE = 0.16$）、時間不足の重大性を高く評定していた（$F(1, 384) = 3.25, p = .07,$

$\eta_p^2 = .02$)。この結果は仮説(1)を支持するものであった。資金不足の重大性については、条件間の差は有意ではなかった（$F(1, 384) = 0.33, p = .57, \eta_p^2 = .002$）。

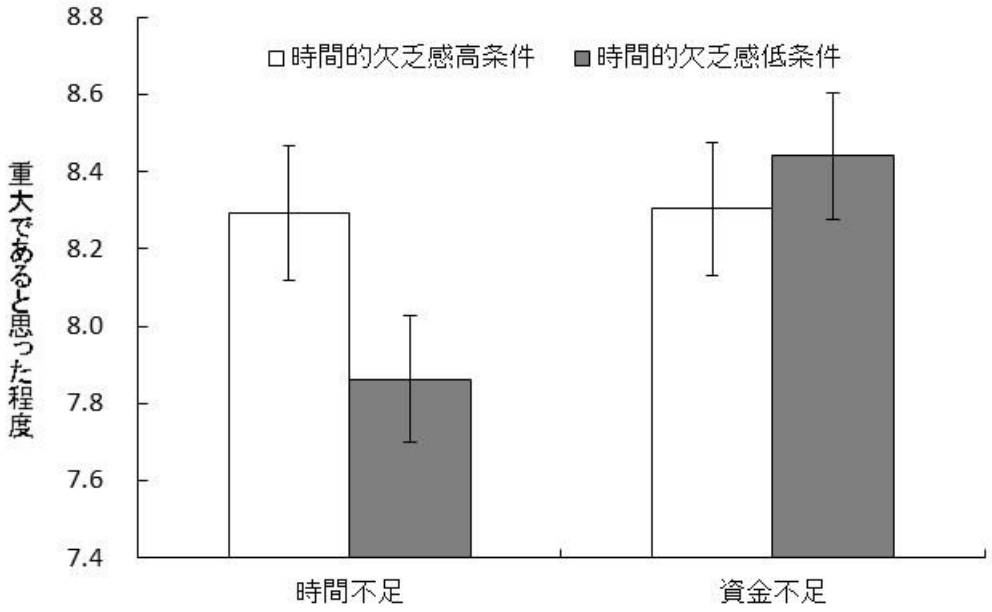


図6-1　条件および理由の種類ごとの、原因として重大であると評定した程度

注）得点範囲は1～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

仮説(2)(3)の検証　利他的動機づけを測定する6項目に、ある程度の内的一貫性が見られたため（$\alpha = .75$）、これらを合算平均した（$M = 3.44, SD = 1.00$）。ただし、本実験では想定外なことに、条件が利他的動機づけに影響を及ぼしており、時間的欠乏感高条件の方が（$M = 3.29, SE = 0.11$）低条件より（$M = 3.57, SE = 0.08$）利他的動機づけが低くなっていた（$t(192) = 2.04, p = .04, d = 0.29$）。以下ではひとまず予定していた分析の結果について報告するが、この問題については考察で詳しく議論する。

まず、ボランティアする確率（しない139名、する55名）について、条件と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般化線形モデルによる分析（ロジスティック回帰分析）を行った。その結果、条件の主効果が非有意（$b = -0.18, SE = 0.35, Z = 0.50, p = .62$）、利他的動機づけの主効果が有意（$b = 0.78, SE = 0.21, Z = 3.79, p < .001$）、交互作用項が有意となった（$b = -0.86, SE = 0.41, Z = 2.10, p = .04$）。交互作用が有意となったため、利他的動機づけの平均±1SDにおける条件の効果を検討した。その結果、利他的動機づ

けが高い場合には、時間的欠乏感高条件の方が低条件よりボランティアする確率が有意に高かった（$b = -1.00, SE = 0.46, Z = 2.17, p = .03$）。また、有意ではなかったものの、利他的動機づけが低い場合には、時間的欠乏感高条件の方が低条件よりボランティアする確率が低かった（$b = 0.64, SE = 0.59, Z = 1.10, p = .27$）。これらの結果は、仮説(2)を支持するものであり、仮説(3)と一致するパターンであった。

次に、ボランティア時間（$M = 2.04, SD = 3.47$）について、条件と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数とした、一般線形モデルによる分析を行った（図6-2）。その結果、こちらについても、条件の主効果が非有意（$b = -0.72, SE = 0.48, t(190) = 1.48, p = .14$）、利他的動機づけの主効果が有意（$b = 0.90, SE = 0.26, t(190) = 3.49, p < .001$）、交互作用が有意傾向となった（$b = -1.00, SE = 0.52, t(190) = 1.94, p = .05$）。交互作用が有意傾向となったため、利他的動機づけの平均±1SDにおける条件の効果を検討した。その結果、利他的動機づけが高い場合には、時間的欠乏感高条件の方が低条件よりボランティア時間が有意に高かった（$b = -1.67, SE = 0.68, t(190) = 2.44, p = .02$）。また、有意ではなかったものの、利他的動機づけが低い場合には、時間的欠乏感高条件の方が低条件よりボランティア時間が低かった（$b = 0.24, SE = 0.70, t(190) = 0.34, p = .73$）。これらの結果は、仮説(2)を支持するものであり、仮説(3)と一致するパターンであった。

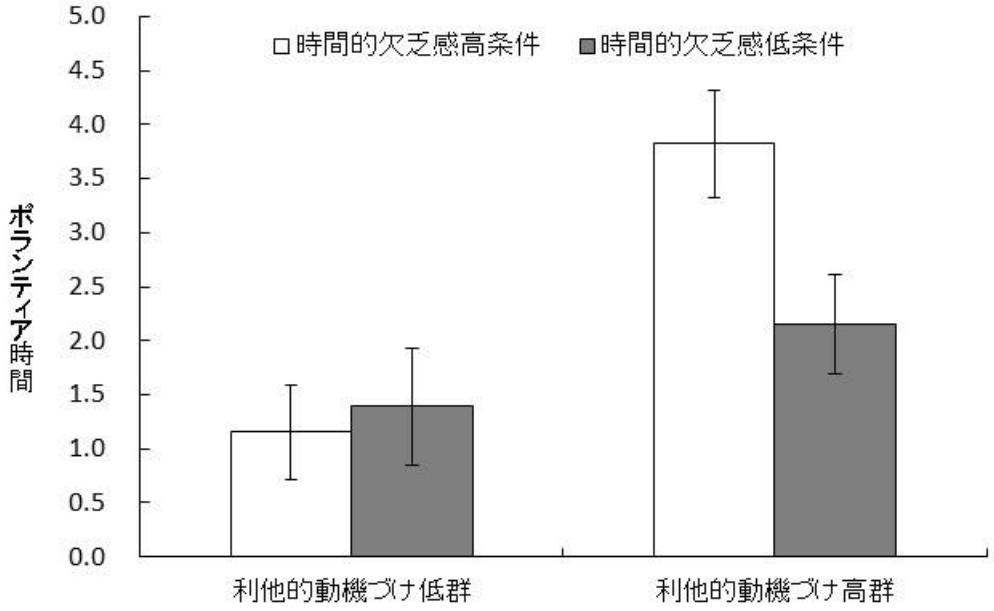


図6-2　条件および利他的動機づけ（$M \pm 1SD$）ごとの、ボランティア時間の予測値

注）得点範囲は0～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

なお、これらの結果は、ボランティア経験の個人差の効果を統制しても大きく変わらなかった。よって、ボランティアする確率とボランティア時間の結果を考え合わせると、仮説(1)は支持され、仮説(2)は支持されなかったといえる。

寄付する確率（しない102名、する92名）および寄付金額（$M = 2.16, SD = 2.92$）については、交互作用が有意となることはなく（$b = 0.01, SE = 0.36, Z = 0.03, p = .98; b = 0.18, SE = 0.44, t(189) = 0.41, p = .69$）、ボランティア意図についての分析で示された傾向は確認されなかった。よって、条件は援助行動全般に影響を及ぼしていたわけではなく、ボランティア意図にのみ影響を及ぼしていたことが示唆される。条件および利他的動機づけの高低ごとの寄付金額を図6-3に示す。なお、これらの結果は、寄付経験の個人差の効果を統制しても、大きく変わらなかった。

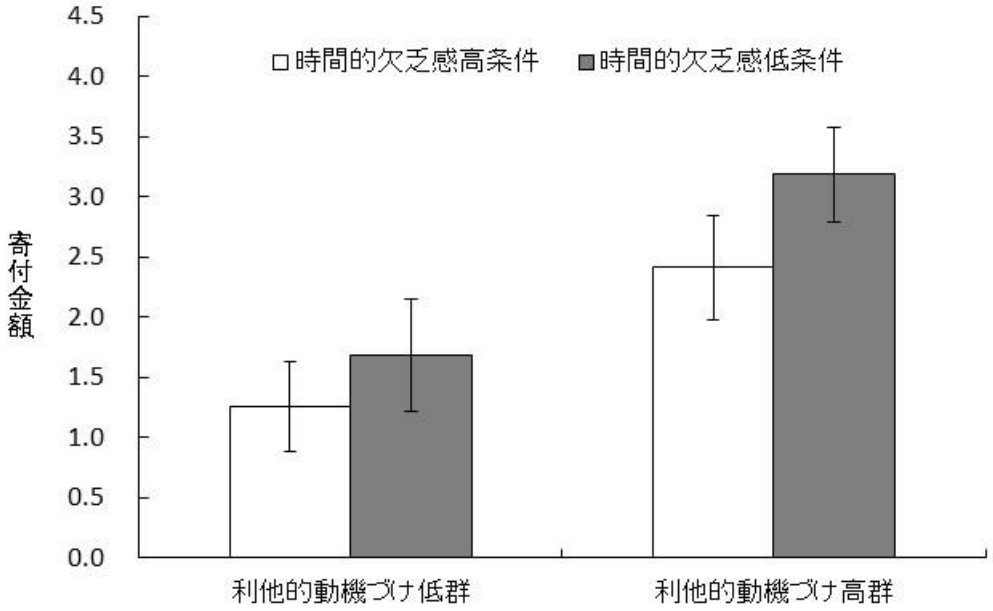


図6-3　条件および利他的動機づけ（$M \pm 1SD$）ごとの、寄付金額の予測値

注）得点範囲は0～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

探索的分析　本実験では、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向とボランティア意図をほぼ同時に測定していたため、厳密には、両者の因果関係にまでは言及できない。なぜならば、因果関係を満たす要件の1つである「原因は結果よりも時間的に先に生じてい

る」という前提が満たされておらず、想定と反対の因果的影響が働いている可能性が否定できないためである。このような限界を踏まえた上で、探索的に、プロセスについての分析を行った。具体的には、時間的欠乏感がボランティア時間に及ぼしていた影響は、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を介したものかどうかを検証するため、条件を独立変数、ボランティア時間を従属変数、時間不足の重大性評定を媒介変数、利他的動機づけを調整変数とする、調整媒介分析を行った（図6-4）[23]。その結果、間接効果の交互作用が有意であった（95% CI [－0.97, －0.01]）。交互作用が有意となったため、利他的動機づけの平均±1SDにおける間接効果を検討した。その結果、利他的動機づけ高い場合には間接効果が有意であり（95% CI [－1.29, －0.13]）、時間的欠乏感が、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を介して、ボランティア意図を高めていた。この結果は、本研究の仮説モデル（図2-2上側）を支持するものであった。他方、利他的動機づけが低い場合には、間接効果は有意でなかった（95% CI [－0.14, 0.26]）。ただし、間接効果を除いても、利他的動機づけが高い場合における、条件がボランティア時間に及ぼす影響は有意であった。すなわち、利他的動機づけが高い場合における、条件がボランティア時間に及ぼす影響は、時間不足の重大性評定のみによって説明されるわけではなかった。これについては考察で議論する。

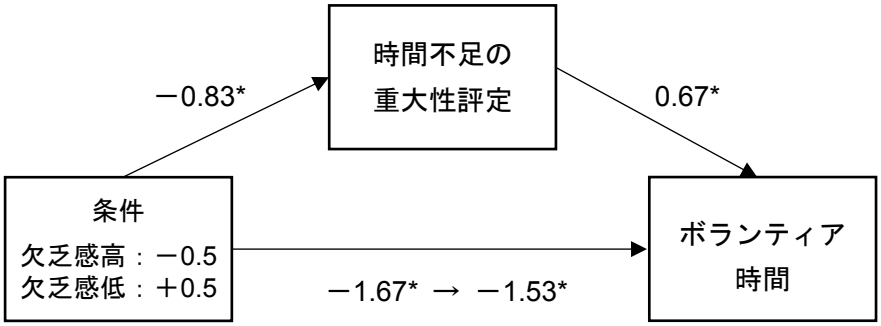
6－1－4　考察

本実験の結果、時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、「ボランティア・スタッフの時間不足」が児童養護施設の運営が厳しい原因となっている程度を、有意に高く評定することが示された。この結果は仮説(1)を支持するものであり、時間的欠乏感が高い場合には、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属しやすいことを示すものであった。

加えて、利他的動機づけが高い場合には、時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、ボランティアする確率が有意に高く、ボランティア時間も有意に高かった。これは仮説(2)を支持するものであり、利他的動機づけが高い場合には、時間的欠乏感がボランティア意図を高めることを示すものであった。

[23] ボランティアする確率については、媒介変数（i.e., 時間不足の重大性評定）と従属変数（i.e., ボランティアする確率）で仮定される残差の分布が異なり、SPSS などの統計ソフトでそうした場合に対応することは現状できないと思われるため、分析を行わなかった。

利他的動機づけが**高い**場合



利他的動機づけが**低い**場合

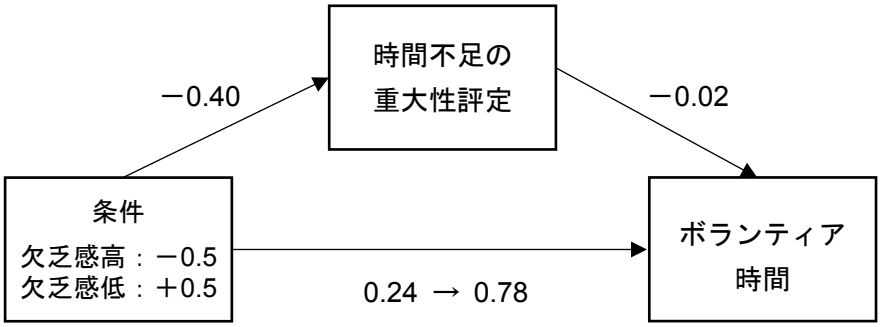


図6-4　利他的動機づけ（*M*±1*SD*）ごとの、媒介過程[24]

注）数値は非標準化係数。* $p < .05$; ** $p < .01$。

他方、仮説(3)を支持する結果は得られなかった。ボランティアする確率とボランティア時間の両方について、仮説(3)とパターンは一致していたものの、有意でなかった。すなわち、利他的動機づけが低い場合、時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、ボランティアする確率もボランティア時間も低いというパターンが見られたものの、それらは有意ではなかった。有意とならなかった理由は明らかではないが、1つの可能性として、床効果が生じていたことが考えられる。すなわち、ボランテ

[24] 利他的動機づけが高い場合には条件が時間不足の重大性評定に及ぼす影響が有意である一方、利他的動機づけが低い場合には有意でないが、条件と利他的動機づけの交互作用が時間不足の重大性評定に及ぼす影響は有意ではなかった（$b = -0.23$, $SE = 0.25$, $Z(190) = 0.92$, $p = .36$）。よって、利他的動機づけの高低によって、条件が時間不足の重大性評定に及ぼす影響が異なるわけではないと考えられる。

ィア意図がどれほど低い場合でも、0時間未満を選択することはできないために、条件間の差が現れにくかった可能性が考えられる。あるいは、時間的欠乏感によって高まると想定していた時間保持欲求が、実際には高まっていなかったためかもしれない。この点については、今後の検討が必要である。

なお、ボランティア意図についての分析で示された傾向は、寄付する確率や寄付金額といった寄付意図の指標においては確認されず、ボランティア意図に特有の傾向であった。

また、探索的分析において、利他的動機づけが高い場合に時間的欠乏感がボランティア時間を高める効果の一部は、時間不足の重大性評定を介したものであることが示された。この結果は、時間的欠乏感が他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を介して時間的意図に影響を及ぼすことを示唆するものであり、本研究の仮説モデル（図2-2上側）を支持するものであった。

本実験の結果は、前章までの知見が金銭以外の資源に対しても適用可能であることを示唆するものである。第4章および第5章では、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めること、利他的動機づけが高い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を高めることが示された。しかし、こうした知見が他の欠乏感に対しても適用可能かどうかは明らかではなかった。そこで本実験では、金銭的欠乏感以外の欠乏感、具体的には時間的欠乏感を用いて、第4章および第5章と同様の仮説を検証した。時間的欠乏感を用いた場合でも同様の仮説が支持されることを示した本実験は、本研究のモデル（図2-2）が欠乏感全般に適用できる可能性を示唆している。

ただし、本実験にもいくつかの限界点がある。第1に、予期せぬことに、本実験では条件が利他的動機づけに影響を及ぼしていた。具体的には、時間的欠乏感高条件の方が低条件よりも、利他的動機づけが低かった。もし、時間的欠乏感が実際に利他的動機づけを低下させるのならば、本研究のモデル（図2-2）がそのまますべての欠乏感に適用可能であると言うのは適切ではないかもしれない。なぜならば、時間的欠乏感が高い場合には「利他的動機づけが高い場合」という状況が存在しづらい可能性があるためである。ただし、時間的欠乏感そのものというより、本実験で用いた時間的欠乏感の「操作」が利他的動機づけを低下させた可能性や、偶然に条件間で差が生じた可能性もある。こうした可能性を検討するため、今後は、他の時間的欠乏感の操作方法を用いた追試や、直接的追試を行うことも必要であろう。

第2に、探索的な分析において、時間不足の重大性評定を介した間接効果を除いても、条件がボランティア時間に及ぼす影響が有意であった。すなわち、利他的動機づけが高い場合

に時間的欠乏感がボランティア意図を高める効果は、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向のみによって説明されるわけではないことが示唆された。なぜ、このような結果となったのであろうか。明確な証拠はないものの、1つの可能性として、時間的欠乏感が他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を介してボランティア意図に影響を及ぼすのではなく、時間的欠乏感が他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向に及ぼす影響もボランティア意図に及ぼす影響も、「時間の重要性に関する認知」を介したものであることが考えられる。すなわち、時間的欠乏感は「時間の重要性に関する認知」を高め、結果として、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を強め、また、ボランティア意図を高めたのかもしれない。自己の内的状態が他者推論に影響を及ぼす過程は非意識的なものであることを考慮すると（e.g., Epley et al., 2004; Krueger & Stanke, 2001）、この媒介変数となっている「時間の重要性に関する認知」は非意識的なものであるかもしれない。今後は、「時間の重要性に関する認知」を顕在あるいは潜在的に測定し、条件がボランティア意図に及ぼす影響のプロセスをより詳細に検討することが望まれる。

第3に、本実験で扱っていたのはあくまで「ボランティア意図」であり、「ボランティア行動」そのものではない。本実験で測定していた2つのボランティア意図は、どちらもボランティア経験の個人差と関連していたため（ボランティアする確率とボランティア経験の個人差（回数）: $r = .54$, $p < .001$, ボランティア時間とボランティア経験の個人差（時間）: $r = .40$, $p < .001$）、実際のボランティア行動とまったく無関連であるわけではないものの、実際のボランティア行動を測定した場合にも、本実験の結果が再現されるかどうかは明らかでない。そのため、実際のボランティア行動を用いた実験を行って知見の妥当性を高めることも、今後は必要であろう。

第Ⅲ部： 総合考察

第 7 章　総合考察

7－1　知見のまとめ

本論文では、6つの実験を通じて、(1) 金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響、(2) 金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響、(3) 時間的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属とボランティア意図に及ぼす影響、について検討した。以下では、得られた知見について、簡潔にまとめていくことにする。

7－1－1　金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響

第4章では、2つの実験を通じて、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属について検討した。貧しさと寄付のパラドクスについて多くの研究が積み重ねられてきたものの、「なぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という、人の非合理性に関わる、より本質的な謎は解明されていなかった。欠乏が人の心を占拠すること（e.g., Aarts et al., 2001; Russell, 2006; Saugstad & Schioldborg, 1966）と、人は推論を行うときに自身の内的な状態を手がかりにすること（e.g., Risen & Critcher, 2011; Van Boven & Loewenstein, 2003）を考え合わせると、これは、貧しい人は金銭的欠乏感が高く、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいためであることが考えられた。そこで第4章では、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるかどうかを検討した。

実験1では、まず、1,000円あるいは10,000円で3日間の食費計画を立ててもらうことで、金銭的欠乏感が強く喚起する条件と、それほど喚起しない条件を作り出した。その後、友人と旅行に行くことを約束していたが、それが難しくなったため、約束をなしにしてもらおうとしている大学生についての記述を読んでもらい、その原因について推論してもらった。その

結果、金銭的欠乏感が高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、旅行に行くことが難しい主要な理由として、「忙しい」より「お金がない」を選択する割合が有意に高いことが示された。また、金銭的欠乏感が高められた条件の参加者の方が、「お金がない」ことが原因として重大である程度を、有意に高く評定することが示された。これらの結果は、仮説を支持するものであり、金銭的欠乏感が高い場合には、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいことを示すものであった。

実験2は、推論対象が大学生以外の場合においても、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるかどうかを検討するために行われた。推論対象である他者と自己の類似性に関わらず投影が生じることを示す研究もあるものの（e.g., Dunlop et al., in press; 石井・竹澤, 2017）、類似性が高い場合のみに生じることを指摘する研究もあったためである（Ahn et al., 2017）。実験1と同様に、食費計画を立ててもらうことで金銭的欠乏感を操作した後、運営が厳しくなってきている、ある児童養護施設についての記述を読んでもらい、その原因について推論してもらった。その結果、金銭的欠乏感が高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、「資金不足」が児童養護施設の運営が厳しい原因として重大である程度を、有意に高く評定することが示された。有意ではなかったものの、主要な理由として「資金不足」を選択する割合についても、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が高かった。これらの結果は、概ね本研究の仮説を支持するものであり、推論対象が大学生以外の場合においても、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めることを示すものであった。

このように、実験1,2の結果は本研究の仮説を概ね支持するものであり、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めることを示すものであった。

7－1－2　金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響

第5章では、第4章の知見を前提として、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響について検討した。他者の苦境の原因が金銭の少なさにあるとより強く認知した場合、その他者を助けようとする際には、金銭的な援助をより行おうとすると考えられる。そのため、金銭的欠乏感は寄付意図を高めることが予測された。ただし、この傾向は利他的動機づけが高い場合に限られると考えられた。利他的動機づけが低い場合には、苦境にいる他者よりも自己のことを優先するため、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向が寄付意図を高める効

果は弱いと考えられるためである。むしろ、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感は金銭保持欲求の高まりを介して寄付意図を低めることが予測された（図2-2）。

実験3では、実験2の手続きに加え、児童養護施設に対する寄付意図、ボランティア意図、および利他的動機づけについても尋ねた。その結果、男性において、利他的動機づけが高い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を高めるという仮説を概ね支持する結果が得られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が高いというパターンが見られ、寄付金額が有意に高かった。利他的動機づけが低い場合においては予測を支持する結果は得られなかった。ただし、パターンは予測と一致しており、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が低く、寄付金額が低いというパターンが見られた。なお、こうした傾向は、ボランティアする確率やボランティア時間といったボランティア意図の指標においては確認されず、寄付意図に特有の傾向であった。また、仮説の前提となっていた「金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強める」という現象も、一部の指標においてではあるものの、確認された。他方、女性においては仮説を支持する結果は全く得られず、仮説の前提が成り立っていたことを示す結果も得られなかった。

実験4では、金銭的欠乏感の操作方法を変更して、同様の仮説を検証した。実験3で用いた食費計画を考えるという操作方法では、女性において操作の有効性が低くなりやすい可能性が考えられたためである。また、食費計画による操作では、結果の一部について代替説明が成り立つことが考えられた。具体的には、金銭的欠乏感高条件では、自宅で1人で食事することを考え、「人」について考えることが少なかったため、後の課題で原因を人手不足に帰属しにくかった一方、金銭的欠乏感低条件では、他者と一緒に食事することを考え、「人」について考えることが多かったため、後の課題で原因を人手不足に帰属しやすかった可能性が考えられた。そこで実験4では、8,000円あるいは40,000円で、友人と2人での1泊2日の旅行計画を立ててもらうことで、金銭的欠乏感を操作した。その結果、またしても男性においてのみ、利他的動機づけが高い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を高めるという仮説を概ね支持する結果が得られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が高い傾向が見られ、寄付金額が高いというパターンが見られた。利他的動機づけが低い場合においては予測を支持する結果は得られなかった。ただし、パターンは予測と一致しており、金銭

的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が低く、寄付金額が低いというパターンが見られた。なお、こうした傾向は、ボランティアする確率やボランティア時間といったボランティア意図の指標においては確認されず、寄付意図に特有の傾向であった。他方、女性においては仮説を支持する結果は全く得られなかった。しかし今回は、仮説の前提となる「金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属する傾向を強める」という現象は、性別に関わらず生じていた。

実験5では、寄付意図の測定方法を変更して、実験4と同様の実験を行った。実験3, 4では、寄付意図やボランティア意図を測定する際に、児童養護施設を運営するNPOにボランティアや寄付をお願いされた場合にどうするか、と尋ねていた。しかし、説得に関する研究では、女性は男性より説得の影響を受けやすいことが示されていた（Eagly & Carli, 1981; McGuire, 1968; 上野, 1994）。そのため、児童養護施設を運営するNPOにボランティアや寄付を「お願いされた場合に」どうするかというように、ボランティアや寄付を行うことを説得されているような文脈において尋ねると、女性においては金銭的欠乏感の操作の影響が生じにくいことが考えられた。そこで実験5では、「NPOがボランティアや寄付を募っているところを見かけた場合」、どのようにするかを尋ねた。その結果、今度は男女を合わせた全参加者において、利他的動機づけが高い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を高めるという仮説を支持する結果が得られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が有意に高く、寄付金額も有意に高かった。利他的動機づけが低い場合においては予測を支持する結果は得られなかった。具体的には、利他的動機づけが低い場合、寄付する確率については、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が高められなかった条件の参加者より低いというパターンが見られたものの、寄付金額についてはこれと反対のパターンが見られた。なお、こうした傾向は、ボランティアする確率やボランティア時間といったボランティア意図の指標においては確認されず、寄付意図に特有の傾向であった。

寄付意図の測定方法によっては「男性においてのみ」という限定条件がつく場合があったものの、利他的動機づけが高い場合についての結果は概ね仮説を支持するものであり、利他的動機づけが高い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を上昇させることを示すものであった。

7－1－3　時間的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属とボランティア意図に及ぼす影響

第6章では、第4章および第5章で示された知見が、時間的欠乏感についても適用可能かどうかを検討した。時間的欠乏感についても同様のメカニズムが働くならば、時間的欠乏感は他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を強めるだろうと予測された。また、利他的動機づけが高い場合には、時間的欠乏感はボランティア意図を高める一方、利他的動機づけが低い場合には、時間的欠乏感はボランティア意図を低めるだろうと予測された。

実験6では、実験4,5で用いた旅行計画による金銭的欠乏感の操作を改変して時間的欠乏感を操作し、実験3,4,5と同じ児童養護施設のシナリオを用いて、他者の苦境に対する原因帰属、寄付意図、ボランティア意図、利他的動機づけを測定した。

その結果、時間的欠乏感が高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、「ボランティア・スタッフの時間不足」が児童養護施設の運営が厳しい原因となっている程度を、有意に高く評定することが示された。この結果は仮説を支持するものであり、時間的欠乏感が高い場合には、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属しやすいことを示すものであった。

加えて、利他的動機づけが高い場合には、時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、ボランティアする確率が有意に高く、ボランティア時間も有意に高かった。これは仮説を支持するものであり、利他的動機づけが高い場合には、時間的欠乏感がボランティア意図を高めることを示すものであった。利他的動機づけが低い場合においては、予測を支持する結果は得られなかった。ただし、パターンは予測と一致しており、時間的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、ボランティアする確率もボランティア時間も低いというパターンが見られた。なお、こうした傾向は、寄付する確率や寄付金額といった寄付意図の指標においては確認されず、ボランティア意図に特有の傾向であった。

また、利他的動機づけが高い場合に時間的欠乏感がボランティア時間を高める効果の一部は、時間不足の重大性評定を介したものであることも示された。この結果は、時間的欠乏感が他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を介してボランティア意図に影響を及ぼすことを示すものであり、本研究の仮説モデル（図2-2上側）を支持するものであった。ただし、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向の間接効果では説明されない直接効果も残った。

予測が支持されなかった点も含めて、これらの結果は概ね、第4章および第5章で示された知見と同様であった。すなわち、これらの結果は、第4章および第5章で示された知見の土台となる本研究のモデル（図2-2上側）が、時間的欠乏感についても適用可能であることを示唆するものであった。

7－2　本研究の意義と限界

7－2－1　意義－貧しさと寄付のパラドクスについて残る謎の解明－

社会調査ではしばしば、貧しい人の方が豊かな人より寄付をすることが示されてきた（e.g., Greeve, 2009; Johnston, 2005）。この現象は直感に反するうえ、格差の再生産に寄与しうるものであるため、社会科学における1つの謎として、研究の対象となってきた。これまでの研究は、この現象に、宗教性・年齢・寄付額の相場が関連していることを示唆してきた（e.g., Iannaccone, 1988; James III & Sharpe, 2007; Wiepking, 2007）。しかし、貧しい人の方が寄付をする傾向は、宗教関連でない寄付においても認められ（e.g., James III & Sharpe, 2007）、年齢の効果を統制しても確認された（e.g., Wiepking, 2007）。また、寄付額に相場があるとしても、お金がなく生活が苦しい場合には、相場より少ない金額を寄付するのが自然であろう。そのため、宗教性・年齢・寄付額の相場という観点では、この逆説的現象を十分に説明することができなかった。

近年の心理学研究は、この現象に、貧しい人の利他的動機づけの高さが関連していることを示唆していた。具体的には、貧しい人は主観的社会経済的地位が低く、慢性的に外的な力を知覚しているため、他者に注意を払いやすく、その結果、苦境にいる他者に対する利他的動機づけが高まりやすいことが示されていた（for reviews, Kraus, Piff, et al., 2011; Kraus et al., 2012, 2013）。こうした知見から、貧しい人の方が他者を援助しやすいことは十分に予測できる。ただし、もしそうであるとしても、貧しい人は金銭的援助でなく、その他の援助（e.g., 時間的援助としてのボランティア）を行うべきであろう。なぜならば、彼らはお金を十分に持っていないからである。しかしこのような考えに反し、彼らは寄付以外の援助をあまり行わないことが示されている（e.g., Independent Sector, 2002）。そのため、主観的社会経済的地位の低さに伴う利他的動機づけの高さでは、この逆説的現象を十分に説明できなかった。

ではなぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのであろうか。この問いに答えるため、本論文では、貧しさに伴うもう1つの感覚である「金銭的欠乏感」が他者の苦境に対する原因帰属と寄付意図に及ぼす影響について、実験を通じて検討した。そして、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強

めること、また、利他的動機づけが高い場合には寄付意図を高めることを明らかにした。これと、貧しさに伴う別の感覚である「主観的社会経済的地位の低さ」が利他的動機づけを高めること（for reviews, Kraus, Piff, et al., 2011; Kraus et al., 2012, 2013）を考え合わせると、貧しい人が他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのは、彼らが他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいためであると結論づけることができる。このように、「なぜ貧しい人は他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という、人の非合理性を問う、より本質的な謎を解明する本研究は、合理性だけでは説明できない複雑な働きをする人の心に対する理解を進めるものである。

加えて、本研究の知見は社会的な示唆も持つであろう。近年、経済格差は世界的に拡大傾向を示しており、アメリカでは過去最高の水準に達していると言われている（e.g., Piketty & Saez, 2014）。厚生労働省の所得再分配調査の結果を見ると、日本においても、当初所得のジニ係数は年々上昇しており、再分配所得のジニ係数も長期的に（1960年代から）見ると緩やかに上昇している。また、ジニ係数のような相対的な指標では表現されにくい問題として、絶対的貧困の拡大も指摘されている（後藤, 2007）。絶対的貧困とは、常識的な社会生活を営めるか否かという絶対的な基準に満たないことをいう。経済格差の拡大は健康状態や死亡率の格差につながるという指摘や、貧しい人々だけでなく、社会全体の健康状態をも悪化させるという指摘もあり（カワチ, 2013）、問題の深刻さがうかがわれる。

こうした経済格差に関する現状と、寄付は資源の再分配の1つの形であることを考慮すると、貧しい人より豊かな人において寄付が積極的になされることが期待される。しかしこれまで見てきたように、実際には、貧しい人の方がより寄付をすることが多くの調査で示されている（e.g., Greeve, 2009; Johnston, 2005）。また、貧しい人が寄付する割合は自身の許容範囲を超えている一方で、豊かな人は現在寄付している割合の2～3倍は寄付に費やすことができるという指摘もなされている（Greeve, 2009）。このように、寄付に関する現状は、期待されているものとは乖離がある。

本研究の知見は、こうした問題の解決の糸口となる可能性を秘めている。人は常に自身の行動の理由を正確に把握しているわけではない（e.g., Wilson, 2002）。寄付行動やその程度についても、その理由を明確に把握しているわけではないであろう。そのため、自身の寄付行動に影響しているかもしれない心理的なバイアスを理解することで、適切な寄付行動が促される可能性がある。本研究の知見は、貧しい人と豊かな人の間の寄付行動の差異に、主観的社会経済的地位と金銭的欠乏感、および、それらの影響を受ける利他的動機づけや他者の

苦境に対する原因帰属が関連していることを示唆している。こうした寄付行動の背後にある心理が広く社会で理解されることで、社会にとってより適切な形の寄付がなされるようになることが期待される。

7－2－2　限界－モデルのより詳細な検討の必要性－

本研究では、金銭的欠乏感が寄付意図に影響を及ぼすメカニズムについて、図2-2の仮説モデルを立てていた。具体的には、利他的動機づけが高い場合と低い場合のどちらにおいても、金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向と金銭保持欲求の両方を高めるものの、利他的動機づけが高い場合には、金銭保持欲求が寄付意図を低める効果は弱く、結果として、金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を介して寄付意図を高める一方（図2-2上側）、利他的動機づけが低い場合には、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向が寄付意図を高める効果は弱く、結果として、金銭的欠乏感は金銭保持欲求を介して寄付意図を低めると考えていた（図2-2下側）。

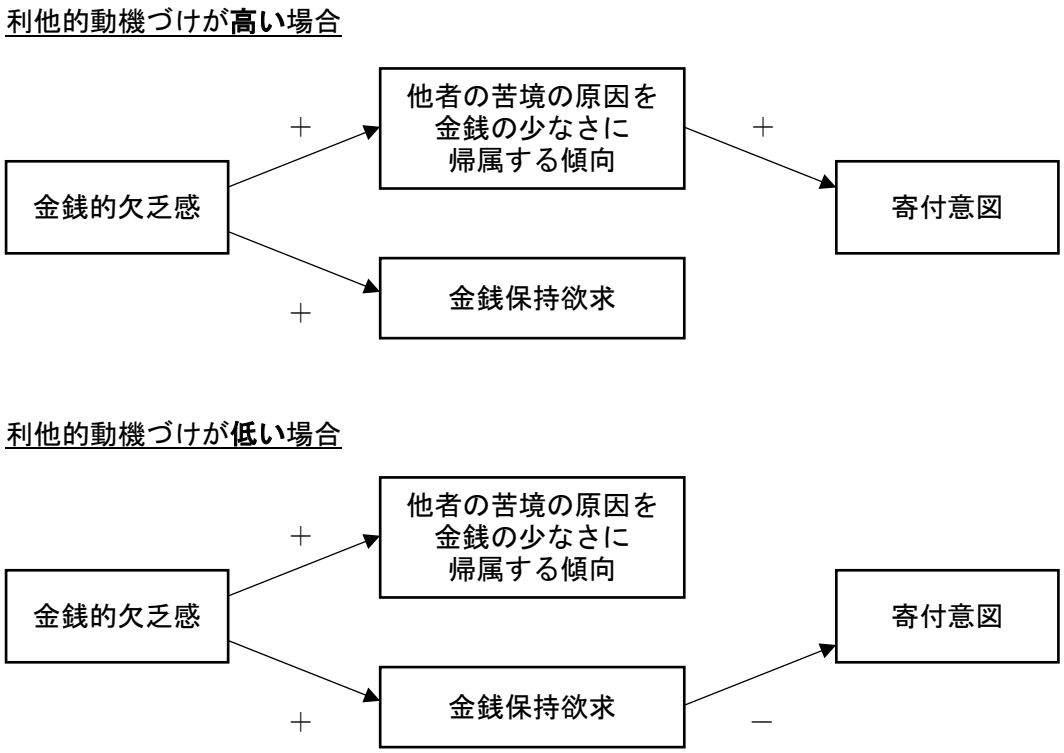


図2-2　金銭的欠乏感が寄付意図に影響を及ぼすメカニズムについての仮説モデル

実験1～4において示された、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めるという知見と、実験3～5において示された、利他的動機づけが高い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を高めるという知見は、この仮説モデルを支持するものである。また、実験6において示された、利他的動機づけが高い場合、時間的欠乏感が他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を介してボランティア意図を高めるという知見も、この仮説モデルを支持するものである。

しかし、利他的動機づけが低い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を低めるという仮説、および、利他的動機づけが低い場合には時間的欠乏感がボランティア意図を低めるという仮説は支持されなかった。ただし、多くの実験において、パターンは仮説と一致していた。仮説が支持されなかった理由は明らかではないが、1つの可能性として、床効果が生じていたことが考えられる。すなわち、寄付意図（ボランティア意図）がどれほど低い場合でも、0円（0時間）未満を選択することはできないために、金銭的欠乏感（時間的欠乏感）の効果が現れにくかった可能性が考えられる。あるいは、金銭的欠乏感（時間的欠乏感）によって高まり、寄付意図（ボランティア意図）を低めると想定していた「金銭保持欲求（時間保持欲求）」が、実際には高まっていなかったためかもしれない。今後は、金銭保持欲求（時間保持欲求）をきちんと測定、あるいは操作し、図2-2の下側のプロセスが本当に働くのかどうかを検討していく必要がある。

また、実験6では、利他的動機づけが高い場合、時間的欠乏感が他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を介してボランティア意図を高めることが示されたが、実験6のように媒介変数と従属変数を同時に測定した場合には、厳密には、媒介変数と従属変数の間の因果関係にまでは言及できない。なぜならば、因果関係を満たす要件の1つである「原因は結果よりも時間的に先に生じている」という前提が満たされておらず、媒介変数と従属変数の関係が反対である可能性が否定できないためである。この限界点を克服するため、今後の研究では、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を実験的に操作した検討を行う必要があるであろう。利他的動機づけが高い場合でも、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を実験的に弱めた場合には金銭的欠乏感が寄付意図を高めないことを示すことによって、本研究のモデルにおける媒介変数と従属変数の間の因果関係がより明らかになるであろう。

さらに、実験6では、利他的動機づけが高い場合、時間的欠乏感が他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を介してボランティア意図を高めることが示されたが、この間

接効果を除いても、時間的欠乏感の操作がボランティア時間に及ぼす影響が有意であった。すなわち、利他的動機づけが高い場合に時間的欠乏感がボランティア意図を高める効果は、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向のみによって説明されるわけではないことが示された。明確な証拠はないものの、このような結果となった可能性の1つとして、時間的欠乏感が他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を介してボランティア意図に影響を及ぼすのではなく、時間的欠乏感が他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向に及ぼす影響も、ボランティア意図に及ぼす影響も、どちらも「時間の重要性に関する認知」を介したものであることが考えられる。すなわち、時間的欠乏感は「時間の重要性に関する認知」を高め、結果として、他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を強め、また、ボランティア意図を高めたのかもしれない。自己の内的状態が他者推論に影響を及ぼす過程は非意識的なものであることを考慮すると（e.g., Epley et al., 2004; Krueger & Stanke, 2001）、この媒介変数となっている「時間の重要性に関する認知」は非意識的なものである可能性もある。今後は、「時間の重要性に関する認知」を顕在あるいは潜在的に測定し、時間的欠乏感の操作がボランティア意図に及ぼす影響のプロセスをより詳細に検討することが望まれる。

加えて、本論文では「貧しい人の方が豊かな人より寄付をする」という「寄付行動」を問題として扱っていたにも関わらず、実験研究においては「寄付意図」を測定するにとどまっていた。寄付意図と寄付行動の間に密接な関連があることは、容易に考えられる。加えて、実験3～5で測定していた寄付意図は、どの実験においても寄付経験の個人差と関連していたため（寄付する確率と寄付経験の個人差（回数）: rs > .26, ps < .05, 寄付金額と寄付経験の個人差（金額）: rs > .31, ps < .001）、実際の寄付行動とまったく無関連であるわけではないことが示唆される。しかし、実際の寄付行動を測定した場合にも、本研究の実験の結果が再現されるかどうかは明らかでない。そのため、実際の寄付行動を用いた実験を行って知見の妥当性を高めることも、今後は必要であろう。

7－3　今後の展望

欠乏感に関する従来の研究の多くは、欠乏感が個人の課題遂行に及ぼす影響を検討してきた。そして、欠乏を感じると、当該欠乏が関わることへは集中するようになる一方で、無関連なことを処理する能力は低下することを明らかにしてきた（for a review, Mullainathan & Shafir, 2013）。

他方で、欠乏感が対人・社会的認知にどのような影響を及ぼすかは、従来の欠乏感研究においては明らかにされていなかった。これについて本研究は、欠乏感が他者や出来事を理解する際の手がかりとして用いられることを示した。具体的には、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めること、時間的欠乏感が他者の苦境の原因を時間の少なさに帰属する傾向を強めることを示した。加えて本研究は、こうした欠乏感による認知的影響が、別の要因により喚起した動機づけと相まって、対人・社会的行動にまで影響を及ぼすことも示している。具体的には、金銭的欠乏感が利他的動機づけと相まって寄付意図に影響を及ぼすこと、時間的欠乏感が利他的動機づけと相まってボランティア意図に影響を及ぼすことを示した。

これらの知見は、従来の欠乏感研究においては明らかにされてこなかったことであり、欠乏感が人に及ぼす影響の広範性を示すものである。また、欠乏はお金や時間だけでなく「人との繋がり」といった資源についても生じうること（Mullainathan & Shafir, 2013）、動機づけには利他的動機づけ以外にも様々なものがあることを考慮すると、この知見は、人の社会的行動を説明・予測する際の新たな視点を提供しうるであろう。本研究の視点を基にすると、例えば、「人との繋がりの欠乏を感じている個人は、他者を苦しめようとする際に、その人を孤独にすることによって苦しめようとするだろう」という仮説が考えられる。今後の研究では、こうした本研究の視点から導かれる仮説を検証することで、多様な文脈における人の行動やその背後にある心理に対する理解が深まるであろう。

ただし、欠乏感が及ぼす影響は必ずしもどの種類の欠乏についても同じであるとは限らない。例えば、金銭的欠乏（e.g., Kahneman, Krueger, Schkade, Schwarz, & Stone, 2006）、時間的欠乏（e.g., Burke, Koyuncu, Fiksenbaum, & Demirer, 2009）、他者との繋がりの欠乏（e.g., Emst & Cacioppo, 1999）はすべて幸福感を低下させるものの、他者との繋がりは進化の過程にお

いては生死に直結しうるものであり、他者と繋がっていたいという欲求は人において特に基本的な欲求であると言われている（e.g., Baumeister & Leary, 1995; Deci & Ryan, 2000）。それに対して、金銭的欠乏や時間的欠乏はすぐに生死に直結するとは限らない。そのため、他者との繋がりの欠乏は、それ以外の資源の欠乏とは異なった形で影響を及ぼす可能性がある。欠乏感の影響に関する包括的な理解という点では、欠乏感全般に通じる理論を構築していくことに一定の意義があると思われるが、今後の研究では、欠乏の種類や性質による影響の違いにも着目していき、どういった場合には欠乏感の理論を適用でき、どういった場合にはできないのかを明らかにしていくことも必要であろう。

また、本研究では、欠乏感が対人・社会的な認知に及ぼす影響として、同化的なものを想定していた。すなわち、自身の金銭的欠乏感が高まると、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向が強まると想定していた。第3章で見てきたように、社会的推論研究が示してきた現象の多くはこうした同化的なものであるが、対比的な影響が生じる場合も考えられる。社会心理学では、先行刺激の知覚によって、関連する情報がアクセスされる可能性が高められた結果、後の判断にその情報が適用されることをプライミング効果と呼ぶ（e.g., Higgins, 1996）。このプライミング効果は、アクセス可能な情報に同化する方向に判断や行動が歪められる場合だけでなく、プライミングされた情報とは逆の方向に反応が歪められる場合もあることが報告されている（for a review, 及川・及川, 2010）。例えば、中程度にどう猛あるいは温和な動物（オオカミやカンガルーなど）のプライミングは、後の判断課題における曖昧な人物の印象を同化方向に歪めるが、極端にどう猛あるいは温和な動物（サメやウサギなど）のプライミングは、逆に対象の印象を対比方向に歪めることが示されている（Herr, Sherman, & Fazio, 1983）。同様に、金銭的欠乏感が及ぼす認知的影響が、対比的なものになる場合もあるかもしれない。すなわち、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を弱める場合もあるかもしれない。例えば、苦境にいる他者が極端に自己と異なる人物（e.g., 多くのお金を持っている人物）である場合、金銭的欠乏感を強く感じている人ほど、自己と対比的にその他者や状況を理解することで、その他者の苦境の原因を金銭の少なさ以外の事柄に帰属する傾向を強めるかもしれない。今後の研究では、こうした可能性も検討していくことで、本研究のモデルの適用範囲を検討していくことも必要であろう。

7－4　結論

「貧しい人ほど寄付をする」という現象について、多くの研究が積み重ねられてきたものの、「なぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という、人の非合理性に関わる、より本質的な謎は解明されていなかった。この問いに答えるため、本論文では、「金銭的欠乏感」が及ぼす認知的影響に着目した検討を行った。そして、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を強めること、また、利他的動機づけが高い場合には寄付意図を高めることを明らかにした。これと、貧しさに伴う別の感覚である「主観的社会経済的地位の低さ」が利他的動機づけを高めること（for reviews, Kraus, Piff, et al., 2011; Kraus et al., 2012, 2013）を考え合わせると、貧しい人が他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのは、彼らが他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属しやすいためであると結論づけることができる。ただし、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向と寄付意図の間の因果関係、「寄付意図」ではなく「寄付行動」を扱った場合でも同様の知見が得られるかどうか、といったことについて本論文は必ずしも十分な証拠を提供していないため、今後より詳細に検討していくことが望まれる。

また、本論文の知見は、欠乏感が個人の課題遂行だけでなく、対人・社会的な認知にも影響を及ぼすこと、さらに、こうした欠乏感による認知的影響が、別の要因により喚起した動機づけと相まって、対人・社会的行動にまで影響を及ぼすことを示している。欠乏はお金や時間だけでなく「人との繋がり」といった資源についても生じうること（Mullainathan & Shafir, 2013）、動機づけには利他的動機づけ以外にも様々なものがあることを考慮すると、この知見は、人の社会的行動を説明・予測する際の新たな視点を提供しうる。今後の研究では、こうした視点から導かれる仮説を検証することで、多様な文脈における人の行動に対する理解が深まることが期待される。加えて、本論文の知見とは反対に、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属する傾向を弱める可能性などについても考慮し、本論文の知見の適用範囲を明らかにしていくことも望まれる。

引用文献

Aarts, H., Dijksterhuis, A., & Vries, P. (2001). On the psychology of drinking: Being thirsty and perceptually ready. *British Journal of Psychology*, **92**(4), 631-642.

Adler, N. E., Epel, E. S., Castellazzo, G., & Ickovics, J. R. (2000). Relationship of subjective and objective social status with psychological and physiological functioning: Preliminary data in healthy, White women. *Health Psychology*, **19**(2), 586-592.

Ahn, J. N., Oettingen, G., & Gollwitzer, P. M. (2017). Projection of Visceral Needs. *Social Psychology*, **48**, 54-59.

Andreoni, J. (2004). Economics of philanthropy. In L.-A. Gerard-Varet, S.-C. Kolm, & J. M. Ythier (Eds.) *Handbook of giving, reciprocity and altruism*. North-Holland: Elsevier, pp11369-11376.

Ariely, D., & Wertenbroch, K. (2002). Procrastination, deadlines, and performance: Self-control by precommitment. *Psychological Science*, **13**(3), 219-224.

Auten, G. E., Clotfelter, C. T., & Schmalbeck, R. L. (2000). Taxes and philanthropy among the wealthy. In J. Slemrod (Ed.) *Does atlas shrug? The economic consequences of taxing the rich*. Cambridge, MA: Harvard University Press, pp.392-424.

Banks, J., & Tanner, S. (1999). Patterns in household giving: Evidence from UK data. *International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations*, **10**(2), 167-178.

Batson, C. D. (2010). *Altruism in humans*. Oxford University Press（バトソン C. D. 菊池章夫・二宮克美 (訳) (2012). 利他性の人間学－実験社会心理学からの回答 新曜社）

Batson, C. D., Duncan, B. D., Ackerman, P., Buckley, T., & Birch, K. (1981). Is empathic emotion a source of altruistic motivation?. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**(2), 290-302.

Baumeister, R. F. & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**(3), 497-529.

Bekkers, R. (2004). *Giving and Volunteering in the Netherlands: Sociological and Psychological Perspectives*, Ph.D. dissertation, Department of Sociology, Utrecht University, Utrecht, the Netherlands.

Bekkers, R., & Wiepking, P. (2007). Generosity and Philanthropy: A Literature Review. Report

commisioned by the John Templeton Foundation. Available at SSRN: https://ssrn.com/abstract=1015507.

Boulware, L. E., Ratner, L. E., Ness, P. M., Cooper, L. A., Campbell‐Lee, S., LaVeist, T. A., & Powe, N. R. (2002). The contribution of sociodemographic, medical, and attitudinal factors to blood donation among the general public. *Transfusion*, **42**(6), 669-678.

Burke, R. J., Koyuncu, M., Fiksenbaum, L., & Demirer, H. (2009). Time affluence, material affluence and well-being among Turkish managers. *Cross Cultural Management: An International Journal,* **16**(4), 386-397.

Breeze, B. (2004). *Widow"s mite or widow"s might? The relative giving of rich and poor in the UK*. The 33rd Annual Conference of the Association for Research on Nonprofit Associations and Voluntary Action, Los Angeles, USA.（Wiepking, P. (2007). The philanthropic poor: In search of explanations for the relative generosity of lower income households. *Voluntas*, **18**(4), 339-358. より引用）

Callan, M. J., Kim, H., Gheorghiu, A. I., & Matthews, W. J. (in press). The Interrelations Between social class , personal relative deprivation , and prosociality. *Social Psychological and Personality Science*.

Carrasco, M., Ling, S., & Read, S. (2004). Attention alters appearance. *Nature neuroscience*, **7**(3), 308-313.

Coke, J. S., Batson, C. D., & McDavis, K. (1978). Empathic mediation of helping: A two-stage model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**(7), 752-766.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The" what" and" why" of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological inquiry*, **11**(4), 227-268.

Dietze, P., & Knowles, E. D. (2016). Social class and the motivational relevance of other human beings: Evidence from visual attention. *Psychological Science*, **27**(11), 1517-1527.

Dubois, D., Rucker, D. D., & Galinsky, A. D. (2015). Social class, power, and selfishness: When and why upper and lower class individuals behave unethically. *Journal of Personality and Social Psychology*, **108**(3), 436-449.

Dunlop, W. L., Mccoy, T. P., Harake, N., & Gray, J. (in press). When I Think of You I Project Myself : Examining Idiographic Goals From the Perspective of Self and Other. *Social Psychological and Personality Science*.

Eagly, A. H., & Carli, L. L. (1981). Sex of researchers and sex-typed communications as determinants of sex differences in influenceability: A metaanalysis of social influence studies. *Psychological Bulletin*, **90**(1), 1-20.

Eisenberg, N., Fabes, R. A., Miller, P. A., Fultz, J., Shell, R., Mathy, R. M., & Reno, R. R. (1989). Relation of sympathy and personal distress to prosocial behavior: A multimethod study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**(1), 55-66.

Eisenberg, N., Fabes, R. A., Schaller, M., Miller, P., Carlo, G., Poulin, R., . . . Shell, R. (1991). Personality and socialization correlates of vicarious emotional responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**(3), 459-470.

Ernst, J. M., & Cacioppo, J. T. (1999). Lonely hearts: Psychological perspectives on loneliness. *Applied and Preventive Psychology*, **8**(1), 1-22.

Epley, N., Keysar, B., Van Boven, L., & Gilovich, T. (2004). Perspective taking as egocentric anchoring and adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**(3), 327-339.

Fan, Y., & Han, S. (2008). Temporal dynamic of neural mechanisms involved in empathy for pain: An event-related brain potential study. *Neuropsychologia*, **46**(1), 160-173.

Flynn, F. J., Reagans, R. E., Amanatullah, E. T., & Ames, D. R. (2006). Helping one's way to the top: Self-monitors achieve status by helping others and knowing who helps whom. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**(6), 1123-1137.

古川秀夫・山下京・八木隆一郎 (1994). ゆとりの構造. 社会心理学研究, **9**(3), 171-180.

Gardner, W. L., Pickett, C. L., & Brewer, M. B. (2000). Social exclusion and selective memory: How the need to belong influences memory for social events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**(4), 486-496.

Gardner, W. L., Pickett, C. L., Jefferis, V., & Knowles, M. (2005). On the outside looking in: Loneliness and social monitoring. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**(11), 1549-1560.

Gilovich, T. (1990). Differential construal and the false consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**(4), 623-634.

後藤道夫 (2007). 格差社会の実態と背景. 後藤道夫・吉崎祥司・竹内章郎・中西新太郎・渡辺憲正 (著). 格差社会とたたかうー＜努力・チャンス・自立＞論批判. 青木書店, pp.11-66.

Greve, F. (2009, May 23). America's poor are its most generous donors. *The Seattle Times*. (http://www.seattletimes.com/nation-world/americas-poor-are-its-most-generous-donors/)

Griskevicius, V., Ackerman, J. M., Cantú, S. M., Delton, A. W., Robertson, T. E., Simpson, J. A., ... & Tybur, J. M. (2013). When the economy falters, do people spend or save? Responses to resource scarcity depend on childhood environments. *Psychological Science*, **24**(2), 197-205.

Grossmann, I., & Varnum, M. E. (2011). Social class, culture, and cognition. *Social Psychological and Personality Science*, **2**(1), 81-89.

Guinote, A., Cotzia, I., Sandhu, S., & Siwa, P. (2015). Social status modulates prosocial behavior and egalitarianism in preschool children and adults. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, **112**(3), 731-736.

Hart, D., & Edelstein, W. (1992). The relationship of selfunderstanding in childhood to social class, community type, and teacher-rated intellectual and social competence. *Journal of Cross-cultural Psychology*, **23**(3), 353–365.

Havens, J.J., O'Herlihy, M.A., & Schervish, P.G. (2007). Charitable giving: How much, by whom, to what, and how? in W.W. Powell & R.S. Steinberg (Eds.) *The nonprofit sector: A research handbook.* New Haven, CT and London: Yale University Press, pp.542-567.

Herr, P. M., Sherman, S. J., & Fazio, R. H. (1983). On the consequences of priming: Assimilation and contrast effects. *Journal of Experimental Social Psychology*, **19**(4), 323-340.

Higgins, E. T. (1996). Knowledge activation: Accessibility, applicability, and salience. In E. T. Higgins & A. W. Kruglanski (Eds.), *Social psychology: Handbook of basic principles*. New York: Guilford Press, pp.133-168.

Hodgkinson, V. A., & Weitzman, M. S. (1996). *Giving and volunteering in the United States*. Washington, DC: Independent Sector.

Hoge, D. R., & Yang, F. (1994). Determinants of religious giving in American denominations: Data from two nationwide surveys. *Review of Religious Research*, **36**(2), 123-148.

Iannaccone, L. R. (1988). A formal model of church and sect. *American Journal of Sociology*, **94**, S241-S268.

Independent Sector (2002). *Giving and volunteering in the United States, 2001 survey*. Washington: Independent Sector.

Inman, J. J., & McAlister, L. (1994). Do coupon expiration dates affect consumer behavior?. *Journal*

of Marketing Research, **31**(3), 423-428.

石井辰典・竹澤正哲 (2017). 心的状態の推測方略：投影とステレオタイプ化. 社会心理学研究, **32**(3), 187-199.

James III, R. N., & Sharpe, D. L. (2007). The nature and causes of the U-shaped charitable giving profile. *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, **36**(2), 218-238.

Jencks, C. (1987). Who gives to what? In W. W. Powell (Ed.) *The non-profit sector: A research handbook*. New Haven: Yale University Press, pp321–339.

Johnston, D. C. (2005, December 19). Study shows the superrich are not the most generous. *The New York Times*. (http://www.nytimes.com/2005/12/19/us/study-shows-the-superrich-are-not-the-most-generous.html)

Kahneman, D., Krueger, A. B., Schkade, D., Schwarz, N., & Stone, A. A. (2006). Would you be happier if you were richer? A focusing illusion. *Science*, **312**(5782), 1908-1910.

カワチイチロー (2013). 命の格差は止められるかーハーバード日本人教授の、世界が注目する授業. 小学館.

Kawada, C. L., Oettingen, G., Gollwitzer, P. M., & Bargh, J. A. (2004). The projection of implicit and explicit goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **86**(4), 545-559.

Kelley, H. H., & Stahelski, A. J. (1970). Social interaction basis of cooperators' and competitors' beliefs about others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**(1), 66-91.

Keys, A., Brožek, J., Henschel, A., Mickelsen, O., & Taylor, H. L. (1950). *The biology of human starvation*. Oxford: University of Minnesota Press.

Kraus, M. W., & Callaghan, B. (2016). Social class and prosocial behavior: The moderating role of public versus private contexts. *Social Psychological and Personality Science*, **7**(8), 769-777.

Kraus, M. W., Côté, S., & Keltner, D. (2010). Social Class, Contextualism, and Empathic Accuracy. *Psychological Science*, **21**(11), 1716-1723.

Kraus, M. W., Horberg, E. J., Goetz, J. L., & Keltner, D. (2011). Social Class Rank, Threat Vigilance, and Hostile Reactivity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **37**(10), 1376-1388.

Kraus, M. W., & Keltner, D. (2009). Signs of socioeconomic status: A thin-slicing approach. *Psychological Science*, **20**(1), 99-106.

Kraus, M. W., & Mendes, W. B. (2014). Sartorial symbols of social class elicit class-consistent behavioral and physiological responses: A dyadic approach. *Journal of Experimental*

Psychology: General, **143**(6), 2330-2340.

Kraus, M. W., Piff, P. K., & Keltner, D. (2009). Social class, sense of control, and social explanation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **97**(6), 992-1004.

Kraus, M. W., Piff, P. K., & Keltner, D. (2011). Social class as culture: The convergence of resources and rank in the social realm. *Current Directions in Psychological Science*, **20**(4), 246-250.

Kraus, M. W., Piff, P. K., Mendoza-Denton, R., Rheinschmidt, M. L., & Keltner, D. (2012). Social class, solipsism, and contextualism: How the rich are different from the poor. *Psychological Review*, **119**(3), 546-572.

Kraus, M. W., Tan, J. J. X., & Tannenbaum, M. B. (2013). The social ladder: A rank-based perspective on social class. *Psychological Inquiry*, **24**(2), 81-96.

Krebs, D. (1975). Empathy and altruism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**(6), 1134-1146.

Krishna, A., & Zhang, Z. J. (1999). Short-or long-duration coupons: The effect of the expiration date on the profitability of coupon promotions. *Management Science*, **45**(8), 1041-1056.

Krueger, J. I. (2008). From social projection to social behaviour. *European Review of Social Psychology*, **18**(1), 1-35.

Krueger, J., & Stanke, D. (2001). The role of self-referent and other-referent knowledge in perceptions of group characteristics. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**(7), 878-888.

Kurtz, J. L. (2008). Looking to the future to appreciate the present: The benefits of perceived temporal scarcity. *Psychological Science*, **19**(12), 1238-1241.

Kutas, M., & Hillyard, S. A. (1980). Reading senseless sentences: Brain potentials reflect semantic incongruity. *Science*, **207**(4427), 203-205.

Lewin, T. (2015, June 3). John Paulson gives $400 million to Harvard for Engineering School. *The New York Times*. (https://www.nytimes.com/2015/06/04/education/john-paulson-gives-400-million-to-harvard-for-engineering-school.html)

Mani, A., Mullainathan, S., Shafir, E., & Zhao, J. (2013). Poverty impedes cognitive function. *Science*, **341**(6149), 976–980.

Maynard, M. (2007, July 4). Say 'hybrid' and many people will hear 'Prius.' *The New York Times*. (http://www.nytimes.com/2007/07/04/business/04hybrid.html)

McClelland, R., & Brooks, A. C. (2004). What is the real relationship between income and charitable

giving? *Public Finance Review*, **32**(5), 483-497.

McGuire, W. J. (1968). Personality and susceptibility to social influence. In E. F. Borgatta & W. W. Lalmbert (Eds.), *Handbook of Personality Theory and Research*. Chicago: Rand McNally, pp.1130-1187.

Moss, A. J. (1976). *Blood donor characteristics and types of blood donations, United States-1973*. U.S. Department of Health, Education, and Welfare.

Mullainathan, S., & Shafir, E. (2013). *Scarcity: Why having too little means so much*. Times Books.（ムッライナタン S. ・ シャフィール E. 大田直子 (訳) (2015). いつも「時間がない」あなたにー欠乏の行動経済学 早川書房）

Nakashima, K. & Lee, S. (2016). Benefits and pitfalls of high economic status based on three findings in Japanese samples. In Geoffrey Perkins (Ed.) *Socioeconomic status: Influences, disparities and current issues*. New York: NOVA Science Publishers.

緒方雄大・渡辺丘 (2011, 4月23日). 警官4人殉職、意志継ぐ交番 プレハブで再出発 岩手. 朝日新聞DIGITAL. (http://www.asahi.com/special/10005/TKY201104220636.html)

及川昌典・及川晴 (2010). 無意識の認知、行動、動機づけー同化効果と対比効果のメカニズムと調整要因ー. 心理学評論, **53**(4), 483-496.

Oyer, P. (1998). Fiscal year ends and nonlinear incentive contracts: The effect on business seasonality. *The Quarterly Journal of Economics*, **113**(1), 149-185.

Piff, P. K., Kraus, M. W., Côté, S., Cheng, B. H., & Keltner, D. (2010). Having less, giving more: the influence of social class on prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **99**(5), 771–784.

Piff, P. K., Stancato, D. M., Côté, S., Mendoza-Denton, R., & Keltner, D. (2012). Higher social class predicts increased unethical behavior. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, **109**(11), 4086-4091.

Piketty, T., & Saez, E. (2014). Inequality in the long run. *Science*, **344**(6186), 838-843.

Putnum, R. D. (2001). *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon and Schuster.（パットナム R. D. 柴内康文 (訳) (2006). 孤独なボーリングー米国コミュニティの崩壊と再生 柏書房）

Radel, R., & Clément-Guillotin, C. (2012). Evidence of motivational influences in early visual perception: Hunger modulates conscious access. *Psychological Science*, **23**(3), 232-234.

Reed. D. (1998). *Giving is receiving*. Precision Marketing, 15-16.

Regnerus, M. D., Smith, C., & Sikkink, D. (1998). Who gives to the poor? The influence of religious tradition and political location on the personal generosity of Americans toward the poor. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **37**(3), 481-493.

Risen, J. L., & Critcher, C. R. (2011). Visceral fit: While in a visceral state, associated states of the world seem more likely. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**(5), 777-793.

Rodeheffer, C. D., Hill, S. E., & Lord, C. G. (2012). Does this recession make me look Black? The effect of resource scarcity on the categorization of biracial faces. *Psychological Science*, **23**(12), 1476-1478.

Rogers, K. (2013, April 24). Poor, middle class and rich: Who gives and who doesn't? *FOX Business*. (http://www.foxbusiness.com/features/2013/04/24/poor-middle-class-and-rich-who-gives-and-who-doesnt.html)

Rooney, P. M., Steinberg, K. S., & Schervish, P. G. (2001). A methodological comparison of giving surveys: Indiana as a test case. *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, **30**(3), 551-568.

Ross, L., Greene, D., & House, P. (1977). The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**(3), 279-301.

Russell, S. A. (2006). *Hunger: An unnatural history*. New York: Basic Books.

Saugstad, P., & Schioldborg, P. (1966). Value and size perception. *Scandinavian Journal of Psychology*, **7**(1), 102-114.

Schervish, P. G., & Havens, J. J. (1995a). Do the poor pay more: Is the U-shaped curve correct? *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, **24**(1), 79-90.

Schervish, P. G., & Havens, J. J. (1995b). Explaining the U in the U-shaped curve. *Voluntas*, **6**(2), 202-225.

Shah, A. K., Mullainathan, S., & Shafir, E. (2012). Some consequences of having too little. *Science*, **338**(6107), 682-685.

Sheng, F., & Han, S. (2012). Manipulations of cognitive strategies and intergroup relationships reduce the racial bias in empathic neural responses. *Neuroimage*, **61**(4), 786-797.

Sheng, F., Liu, Y., Zhou, B., Zhou, W., & Han, S. (2013). Oxytocin modulates the racial bias in neural responses to others' suffering. *Biological Psychology*, **92**(2), 380-386.

Smith, V. H., Kehoe, M. R., & Cremer, M. E. (1995). The private provision of public goods: Altruism

and voluntary giving. *Journal of Public Economics*, **58**(1), 107-126.

Stellar, J. E., Manzo, V. M., Kraus, M. W., & Keltner, D. (2012). Class and compassion: Socioeconomic factors predict responses to suffering. *Emotion*, **12**(3), 449-459.

Stern, K. (2013, March 20). Why the rich don't give to charity. *The Atlantic*. (https://www.theatlantic.com/magazine/archive/2013/04/why-the-rich-dont-give/309254/)

Trautmann, S. T., van de Kuilen, G., & Zeckhauser, R. J. (2013). Social class and (un) ethical behavior: A framework, with evidence from a large population sample. *Perspectives on Psychological Science*, **8**(5), 487-497.

豊沢純子・竹橋洋毅 (2015). 生活史と貧困プライミングが割引品の購入意図に与える影響. 日本社会心理学会第56回大会発表論文集, 45.

Toyosawa, J. & Takehashi, H. (2016). *Poor mindset and preference to discount foods: A life history theory approach*. The 17th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, CA.

豊沢純子・竹橋洋毅 (2016). 生活史と貧困プライミングが割引品の購入意図に与える影響 (2). 日本社会心理学会第57回大会発表論文集, 154.

Tversky, A., & Shafir, E. (1992). Choice under conflict: The dynamics of deferred decision. *Psychological Science*, **3**(6), 358-361.

上野徳美 (1994). 説得的コミュニケーションに対する被影響性の性差に関する研究. 実験社会心理学研究, **34**(2), 195-201.

Van Boven, L., & Loewenstein, G. (2003). Social projection of transient drive states. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**(9), 1159-1168.

Van den Berg, J., & Frenken, F. (2010, September 11). Around 400 thousand blood donors in the Netherslands. *CBS*. (https://www.cbs.nl/en-gb/news/2010/45/around-400-thousand-blood-donors-in-the-netherlands)

Varnum, M. E., Blais, C., Hampton, R. S., & Brewer, G. A. (2015). Social class affects neural empathic responses. *Culture and Brain*, **3**(2), 122-130.

Varnum, M. E. W., Na, J., Murata, A., & Kitayama, S. (2012). Social class differences in N400 indicate differences in spontaneous trait inference. *Journal of Experimental Psychology: General*, **141**(3), 518-526.

Weininger, E. B., & Lareau, A. (2009). Paradoxical pathways: An ethnographic extension of Kohn's

findings on class and childrearing. *Journal of Marriage and Family*, **71**(3), 680-695.

Weissmann, J. (2015, June 3). Billionaire's ego donates $400 million to Harvard. *Slate*. (http://www.slate.com/blogs/moneybox/2015/06/03/billionaire_s_ego_donates_400_million_to_harvard_nbsp.html)

Wiepking, P. (2004). *Do the poor donate more? The effect of income on philanthropic donations*. The 33rd Annual Conference of the Association for Research on Nonprofit Associations and Voluntary Action, Los Angeles, CA. （Wiepking, P. (2007). The philanthropic poor: In search of explanations for the relative generosity of lower income households. *Voluntas*, **18**(4), 339-358. より引用）

Wiepking, P. (2007). The philanthropic poor: In search of explanations for the relative generosity of lower income households. *VOLUNTAS: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations*, **18**(4), 339-358.

Wiepking, P., & Bekkers, R. (2012). Who gives? A literature review of predictors of charitable giving. Part Two: Gender, family composition and income. *Voluntary Sector Review*, **3**(2), 217-245.

Wiepking, P., & Heijnen, M. (2011). The giving standard: Conditional cooperation in the case of charitable giving. *International Journal of Nonprofit and Voluntary Sector Marketing*, **16**(1), 13-22.

Wilson, T. D. (2002). *Strangers to ourselves: Discovering the adaptive unconscious*. Cambridge, MA: Belknap. (ウィルソン T. D. 村田光二 (監訳) (2005). 自分を知り、自分を変える－適応的無意識の心理学 新曜社)

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々にお世話になりました。様々な欠乏に直面したにも関わらず本論文を書き上げることができたのは、本当に皆さまのお蔭です。まず、本論文で扱った6つの実験に参加してくれた学生の皆さんに感謝いたします。皆さんが快く実験に参加してくれたお蔭で、重要なデータを得ることができました。また、本論文を執筆するにあたり、先生・先輩方や研究仲間たちから、たくさんのご支援をいただきました。特に、指導教員である村田光二先生には本当にお世話になりました。森津太子先生（放送大学）、大江朋子先生（帝京大学）、中島健一郎先生（広島大学）、橋本剛明さん（東京大学）には、本論文の研究について貴重なコメントをいただきました。泉明宏先生（武蔵野大学）、豊沢純子先生（大阪教育大学）、竹橋洋毅先生（関西福祉科学大学）、立川公子先生（武蔵野大学）、松崎圭佑さん（首都大学東京）、加藤樹里さん（金沢工業大学）、津村健太さん（帝京大学）、吉野伸哉さん（早稲田大学）にも、様々なサポートをいただきました。もちろん、他の方々にも大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。最後に、大学院生活を様々な面で支えてくれた家族や親族にも、心より感謝申し上げます。

2017年10月30日　竹部成崇

付録

資料A　実験1の質問紙（欠乏感高条件）

資料B　実験2の質問紙（欠乏感高条件）

資料C　実験3の質問紙（欠乏感高条件）

資料D　実験4の質問紙（欠乏感高条件）

資料E　実験5の質問紙（欠乏感高条件）

資料F　実験6の質問紙（欠乏感高条件）

調査ご協力のお願い

一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程 竹部成崇

今回はみなさんに２種類の異なる調査にご協力いただきたいと思います．１つ目は大学生の食生活に関する調査で，２つ目は想像に関する調査です．

１つ目の調査は，こちらの合図にしたがって回答を進めていただきます．架空のシナリオが示されますので，その状況をイメージし，あなたがその状況に置かれたら，どのように考えるのかを記入してください．

２つ目の調査は，あなたのペースで回答を進めることができます．調査票の指示に従って，**順番通りに**回答を進めていってください．

なお，質問に対する回答に正解・不正解はありません．ご自身の思ったとおりに回答してください．

選択形式の質問では，以下のように，当てはまる数字を〇で囲んでください．

【回答例】
絵を描くのが好きだ。

全く当て はまらない　　どちらとも 言えない　　とてもよく 当てはまる

１ － ２ － ３ － ４ － ５ － ６ － ７ － ８ － ９

みなさんの回答は集計され，統計的な分析にかけられます．また，この調査以外の目的でデータが使用されることはありません．個人の回答が問題とされることはありませんので，思ったままご回答いただけますと幸いです．

それでは，以下に性別・学年・年齢・留学生かどうかを記入し，合図があるまでお待ちください．

性別　（　男　・　女　）

学年　（　１　・　２　・　３　・　４　）

年齢　（　　）歳

日本語を母語としない留学生の方ですか？（　はい　・　いいえ　）

指示があるまで，ページをめくらないでください

資料 A　実験 1 の質問紙（欠乏感高条件）

大 学 生 の 食 生 活 に 関 す る 調 査

以下の文章を読み，想像してください.

鈴木さんは，大学 1 年生です．この春，実家から遠く離れた大学に進学し，一人暮らしを始めました．学費と家賃以外の仕送りはなく，アルバイトをして生計を立てています．さて，次の給料日まであと 3 日となりました．今月は余裕がなく，3 日間で食費に 1,000 円しか使うことができません.

①. もし，あなたが鈴木さんの状況に置かれたら，このお金をどのように使いますか.
あなたが考える「3 日間の食事の計画」を記入して下さい（4 分間）.
※今日は月曜日で，水曜日まで毎日，午前と午後に授業があるとします.
※このお金は，食費以外には使えないとします.
※冷蔵庫には何も入っておらず，米などの備蓄もありません.

		食事の内容 *例）パン，学食*	予算
1 日目 （月）	朝		円
	昼		円
	夜		円
2 日目 （火）	朝		円
	昼		円
	夜		円
3 日目 （水）	朝		円
	昼		円
	夜		円
		合計（1,000 円以内）	円

指示があるまで，ページをめくらないでください

1 つ目の調査はこれで終了です.
ページをめくり，2 つ目の調査へ進んでください.

資料Ａ　実験１の質問紙（欠乏感高条件）

想像に関する調査

１．以下の文章は、とある大学生（A さん）について書かれています。
文章をよく読み、その後の質問へ回答してください。

A さんは、都内の大学生です。
ある日、別の大学に通う高校時代の友人と、2 人で旅行に行く約束をしました。
行き先や、具体的にどんなことをするかを決めていたわけではありませんが、なんとなく、「この月に 2 人で温泉旅行に行こうか」と話していました。
しかし、旅行の時期が近づくにつれ、A さんは、旅行に行くことが難しいことに気が付き始めました。
A さんは、旅行に行く約束を、いったんなしにしてもらい、余裕ができたらまた声をかけることにしようと考えています。

（１）A さんが旅行に行くことが難しい理由としてより重大なのは、以下のどちらだと思いますか？
より重大な理由となっていると思う方に〇をつけてください。
正解・不正解はありませんので、あなたが感じたままにお答えください。

（　　忙しい　　／　　お金がない　　）

（２）A さんが旅行に行くことが難しい理由として、以下のそれぞれはどの程度重大だと思いますか？
最も適当な数字に〇をつけてお答えください。

忙しい

まったく重大でない　　とても重大

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6 － 7 － 8 － 9 － 10

お金がない

まったく重大でない　　とても重大

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6 － 7 － 8 － 9 － 10

回答が終わったら、次のページへ進んでください

（３）Ａさんと友達はどのような関係だと思いますか？当てはまる選択肢に〇をつけてお答えください。

（　非常に仲が良い　／　まあまあ仲が良い　／　そこまで仲が良くない　）

（４）Ａさんが約束をいったんなしにしてもらうようお願いしたら，友達はどのように反応すると思いますか？当てはまる選択肢に〇をつけてお答えください。

（　許してくれる　／　怒る　／　怒りはしないがやや不機嫌になる　）

（５）Ａさんと友達はどこの地方に旅行に行く約束をしていたと思いますか？
当てはまる選択肢に〇をつけてお答えください。

（　関東　／　東北　／　中部　／　近畿　／　中国　／　四国　／　九州　）

回答が終わったら、次のページへ進んでください

２つ目の調査は以上で終了です。
最後に，今回の調査全体に関わることについてお尋ねします。

［1］１つ目の調査の食事計画を考える課題についてですが，描かれた状況（鈴木さんが置かれた状況）に対して，どのくらい金銭的な欠乏感（お金がないという気持ち）を感じましたか？

1	2	3	4
まったく感じなかった	あまり感じなかった	少し感じた	とても感じた

［2］１つ目の調査の食事計画を考える課題について思ったこととして，以下の各文章がどれくらい当てはまるか，数字に〇をつけてお答えください。

		まったく当てはまらない ←→ とてもよく当てはまる
1	鈴木さんのような状況になったことがないので，考えるのに困った	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
2	自分が鈴木さんのような状況になることを，現実味を持って考えられなかった	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
3	鈴木さんのような状況は，自分にとって身近なものである	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

［3］あなたは現在，１人暮らし（ルームシェアや寮生活も含む）ですか？
それとも実家暮らしですか？当てはまる方に〇をつけてお答えください。

（　１人暮らし　・　実家暮らし　）

本日の調査について，ご意見，ご感想などがございましたら，以下に自由にお書きください。
１つ目の調査についてでも，２つ目の調査についてでも，全体を通して感じたことでも構いません。

ご協力ありがとうございました
指示があるまで表紙を上にしてお待ちください

調査ご協力のお願い

一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程 竹部成崇

今回はみなさんに2種類の異なる調査にご協力いただきたいと思います．1つ目は大学生の食生活に関する調査で，2つ目は児童養護施設問題に関する調査です．

1つ目の調査は，こちらの合図にしたがって回答を進めていただきます．架空のシナリオが示されますので，その状況をイメージし，あなたがその状況に置かれたら，どのように考えるのかを記入してください．

2つ目の調査は，あなたのペースで回答を進めることができます．調査票の指示に従って，**順番通りに**回答を進めていってください．

なお，質問に対する回答に正解・不正解はありません．ご自身の思ったとおりに回答してください．

選択形式の質問では，以下のように，当てはまる数字を〇で囲んでください．

【回答例】
絵を描くのが好きだ。

全く当てはまらない　　どちらとも言えない　　とてもよく当てはまる

１ － ２ － ３ － ４ － ５ － ６ － ７ － ８ － ９

みなさんの回答は集計され，統計的な分析にかけられます．また，この調査以外の目的でデータが使用されることはありません．個人の回答が問題とされることはありませんので，思ったままご回答いただけますと幸いです．

それでは，以下に性別・学年・年齢・留学生かどうかを記入し，合図があるまでお待ちください．

性別　（　男　・　女　）

学年　（　1　・　2　・　3　・　4　）

年齢　（　　）歳

日本語を母語としない留学生の方ですか？（　はい　・　いいえ　）

指示があるまで，ページをめくらないでください

資料B　実験2の質問紙（欠乏感高条件）

大学生の食生活に関する調査

以下の文章を読み，想像してください.

鈴木さんは，大学1年生です．この春，実家から遠く離れた大学に進学し，一人暮らしを始めました．学費と家賃以外の仕送りはなく，アルバイトをして生計を立てています．さて，次の給料日まであと3日となりました．今月は余裕がなく，3日間で食費に1,000円しか使うことができません.

①. もし，あなたが鈴木さんの状況に置かれたら，このお金をどのように使いますか.
あなたが考える「3日間の食事の計画」を記入して下さい（4分間）.
※今日は月曜日で，水曜日まで毎日，午前と午後に授業があるとします.
※このお金は，食費以外には使えないとします.
※冷蔵庫には何も入っておらず，米などの備蓄もありません.

		食事の内容 *例）パン，学食*	予算
1日目 （月）	朝		円
	昼		円
	夜		円
2日目 （火）	朝		円
	昼		円
	夜		円
3日目 （水）	朝		円
	昼		円
	夜		円
		合計（1,000円以内）	円

指示があるまで，ページをめくらないでください

1 つ目の調査はこれで終了です.
ページをめくり，2 つ目の調査へ進んでください.

児童養護施設問題に関する調査

以下の文章は、とある児童養護施設に暮らす子どもたちに関する内容について書かれています。
子どもたちが置かれている状況を想像しながら読み、その後の質問へ回答してください。

この児童養護施設は、親から虐待されたり親が亡くなったりして、他の親戚もいない子どもたちが暮らす施設です。
子どもたちはこの施設以外に帰る場所はなく、毎日の生活をこの施設で送っています。

この児童施設はNPOの活動の一環で運営されています。
施設の管理や子どもの生活のサポートを行うボランティア、人々からの寄付によって、この施設の運営はまわっています。

しかし最近、人手が足りなくなったり、活動資金が不足したりして、施設の運営が厳しくなってきています。
もし児童養護施設が閉鎖されれば、子どもたちの行き場はなくなってしまいます。

（1）この児童養護施設の運営が厳しい原因としてより重大なのは、以下のどちらだと思いますか？
より重大な原因となっていると思う方に〇をつけてください。
正解・不正解はありませんので、あなたが感じたままにお答えください。
※ ただし、NPOなので、資金があってもボランティアは雇えません。

（　　人手不足　　／　　資金不足　　）

回答が終わったら、次のページへ進んでください

（２）この児童養護施設の運営が厳しい原因として、以下のそれぞれはどの程度重大だと思いますか？
最も適当な数字に〇をつけてお答えください。

人手不足

まったく重大でない　　とても重大

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6 － 7 － 8 － 9 － 10

資金不足

まったく重大でない　　とても重大

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6 － 7 － 8 － 9 － 10

回答が終わったら、次のページへ進んでください

２つ目の調査は以上で終了です。
最後に，今回の調査全体に関わることについてお尋ねします。

［1］１つ目の調査の食事計画を考える課題についてですが，描かれた状況（鈴木さんが置かれた状況）に対して，どのくらい金銭的な欠乏感（お金がないという気持ち）を感じましたか？

１ ―――――― ２ ―――――― ３ ―――――― ４
まったく感じなかった　あまり感じなかった　少し感じた　とても感じた

［2］１つ目の調査の食事計画を考える課題について思ったこととして，以下の各文章がどれくらい当てはまるか，数字に〇をつけてお答えください。

		まったく当てはまらない ←→ とてもよく当てはまる
1	鈴木さんのような状況になったことがないので，考えるのに困った	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
2	自分が鈴木さんのような状況になることを，現実味を持って考えられなかった	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
3	鈴木さんのような状況は，自分にとって身近なものである	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

［3］あなたは現在，１人暮らし（ルームシェアや寮生活も含む）ですか？
それとも実家暮らしですか？当てはまる方に〇をつけてお答えください。

（　１人暮らし　・　実家暮らし　）

本日の調査について，ご意見，ご感想などがございましたら，以下に自由にお書きください。
１つ目の調査についてでも，２つ目の調査についてでも，全体を通して感じたことでも構いません。

ご協力ありがとうございました
指示があるまで表紙を上にしてお待ちください

資料C　実験3の質問紙（欠乏感高条件）

調査ご協力のお願い

一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程 竹部成崇

今回はみなさんに2種類の異なる調査にご協力いただきたいと思います．1つ目は大学生の食生活に関する調査で，2つ目は児童養護施設問題に関する調査です．

1つ目の調査は，こちらの合図にしたがって回答を進めていただきます．架空のシナリオが示されますので，その状況をイメージし，あなたがその状況に置かれたら，どのように考えるのかを記入してください．

2つ目の調査は，あなたのペースで回答を進めることができます．調査票の指示に従って，**順番通りに**回答を進めていってください．基本的にはすべての質問にお答えいただきますが，「前の質問で●●と回答した方にのみお尋ねします」といった指示がある場合は，その指示に従ってください．そういった指示が特にない場合は，すべての方が回答してください．

なお，質問に対する回答に正解・不正解はありません．ご自身の思ったとおりに回答してください．

選択形式の質問では，以下のように，当てはまる数字を〇で囲んでください．

【回答例】

絵を描くのが好きだ。

全く当てはまらない　　どちらとも言えない　　とてもよく当てはまる

１ － ２ － ３ － ４ － ５ － ６ － ７ － ８ － ９

みなさんの回答は集計され，統計的な分析にかけられます．また，この調査以外の目的でデータが使用されることはありません．個人の回答が問題とされることはありませんので，思ったままご回答いただけますと幸いです．

それでは，以下に性別・学年・年齢・留学生かどうかを記入し，合図があるまでお待ちください．

性別　（　男　・　女　）

学年　（　１　・　２　・　３　・　４　）

年齢　（　　）歳

日本語を母語としない留学生の方ですか？（　はい　・　いいえ　）

指示があるまで，ページをめくらないでください

資料C　実験3の質問紙（欠乏感高条件）

大学生の食生活に関する調査

以下の文章を読み，想像してください.

鈴木さんは，大学1年生です．この春，実家から遠く離れた大学に進学し，一人暮らしを始めました．学費と家賃以外の仕送りはなく，アルバイトをして生計を立てています．さて，次の給料日まであと3日となりました．今月は余裕がなく，3日間で食費に1,000円しか使うことができません.

①. もし，あなたが鈴木さんの状況に置かれたら，このお金をどのように使いますか.
あなたが考える「3日間の食事の計画」を記入して下さい（4分間）.
※今日は月曜日で，水曜日まで毎日，午前と午後に授業があるとします.
※このお金は，食費以外には使えないとします.
※冷蔵庫には何も入っておらず，米などの備蓄もありません.

		食事の内容 *例）パン，学食*	予算
1日目 （月）	朝		円
	昼		円
	夜		円
2日目 （火）	朝		円
	昼		円
	夜		円
3日目 （水）	朝		円
	昼		円
	夜		円
		合計（1,000円以内）	円

指示があるまで，ページをめくらないでください

1つ目の調査はこれで終了です.
ページをめくり，2つ目の調査へ進んでください.

児童養護施設問題に関する調査

以下の文章は、とある児童養護施設に暮らす子どもたちに関する内容について書かれています。
子どもたちが置かれている状況を想像しながら読み、その後の質問へ回答してください。

この児童養護施設は、親から虐待されたり親が亡くなったりして、他の親戚もいない子どもたちが暮らす施設です。
子どもたちはこの施設以外に帰る場所はなく、毎日の生活をこの施設で送っています。

この児童施設はNPOの活動の一環で運営されています。
施設の管理や子どもの生活のサポートを行うボランティア、人々からの寄付によって、この施設の運営はまわっています。

しかし最近、人手が足りなくなったり、活動資金が不足したりして、施設の運営が厳しくなってきています。
もし児童養護施設が閉鎖されれば、子どもたちの行き場はなくなってしまいます。

（1）この児童養護施設の運営が厳しい原因としてより重大なのは、以下のどちらだと思いますか？
より重大な原因となっていると思う方に〇をつけてください。
正解・不正解はありませんので、あなたが感じたままにお答えください。
※ ただし、NPOなので、資金があってもボランティアは雇えません。

（　　人手不足　　／　　資金不足　　）

回答が終わったら、次のページへ進んでください

（２）この児童養護施設の運営が厳しい原因として、以下のそれぞれはどの程度重大だと思いますか？
最も適当な数字に〇をつけてお答えください。

人手不足

まったく重大でない　　とても重大

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6 － 7 － 8 － 9 － 10

資金不足

まったく重大でない　　とても重大

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6 － 7 － 8 － 9 － 10

（３）このNPOにボランティア（専門家でないとできない作業ではなく、あなたにもできる作業）
や寄付をお願いされた場合、あなたはどうしますか？
以下の4つのうちから、当てはまるものを1つ選び、数字を〇で囲んでください。

① ボランティアだけする　　② 寄付だけする

③ ボランティアも寄付もする　　④ どちらもしない

（４）（３）で①か③を選んだ人にお尋ねします。②と④を選んだ人は回答しないでください。
あなたは合計何時間くらいボランティアしますか？

約30分　約1時間　約2時間　約3時間　約4時間
約5時間　約7時間　約10時間　約15時間　それ以上

回答が終わったら、次のページへ進んでください

（５）（３）で②か③を選んだ人にお尋ねします。①と④を選んだ人は回答しないでください。
あなたは何円くらい寄付しますか？
あてはまる金額を１つ選び、〇で囲んでください。

約 100 円	約 200 円	約 300 円	約 400 円	約 500 円
約 700 円	約 1000 円	約 1500 円	約 3000 円	それ以上

（６）文章を読んだり写真を見たりしたときにあなたが感じたこととして、以下の各文章がどの程度あてはまるか、数字に〇をつけてお答えください。

		まったく当てはまらない ← → とてもよく当てはまる
1	児童養護施設の子どもを、かわいそうだと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
2	児童養護施設の子どものために、何かしてあげたいと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
3	この NPO が活動しても、児童養護施設の子どもの生活は改善しないと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
4	この児童養護施設の子どもは、自分とは関係がないと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
5	この NPO の活動は、児童養護施設の子どものためになると思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
6	児童養護施設の子どもを思い、胸が苦しくなった	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
7	児童養護施設の子どもと自分との間に、心理的な距離を感じた	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6

回答が終わったら、次のページへ進んでください

２つ目の調査は以上で終了です。
最後に，今回の調査全体に関わることについてお尋ねします。

［1］１つ目の調査の食事計画を考える課題についてですが，描かれた状況（鈴木さんが置かれた状況）に対して，どのくらい金銭的な欠乏感（お金がないという気持ち）を感じましたか？

1	2	3	4
まったく感じなかった	あまり感じなかった	少し感じた	とても感じた

［2］あなたはこれまでに、自発的に困っている誰かのために寄付をしたことがどれくらいありますか？ただし、学校などの行事で自分の意思と関係なく行った寄付は除きます。

1	2	3	4	5
したことがない	1 度だけ	数回した	しばしばする	よくする

［3］［2］で 1 以外を選んだ人（1 回以上自発的な寄付をしたことがある人）にお尋ねします。
1 を選んだ人は回答しないでください。
平均的な 1 回の寄付額は約何円ですか？
あてはまる金額を 1 つ選び、○で囲んでください。

数十円	約 100 円	約 200 円	約 300 円	約 400 円	約 500 円
約 700 円	約 1000 円	約 1500 円	約 3000 円	それ以上	

［4］あなたはこれまでに、自発的にボランティアに参加したことがどれくらいありますか？
ただし、学校などの行事で自分の意思と関係なく参加したボランティアは除きます。

1	2	3	4	5
したことがない	1 度だけ	数回した	しばしばする	よくする

回答が終わったら、次のページへ進んでください

［5］［4］で1以外を選んだ人（1回以上自発的なボランティアをしたことがある人）にお尋ねします。1を選んだ人は回答しないでください。
平均的な1回のボランティア時間は約何時間ですか？
あてはまる時間を1つ選び、○で囲んでください。

（　数十分　約1時間　約2時間　約3時間　約4時間　約5時間
約7時間　約10時間　約15時間　約30時間　それ以上　）

［6］あなたの普段の生活で、使おうと思ったときにちゅうちょなく自由に使える金額はどれくらいですか？あてはまる金額を1つ選び、○で囲んでください。

（　約300円　約500円　約700円　約1000円　約1500円
約3000円　約5000円　約7000円　約10,000円　それ以上　）

［7］あなたの普段の生活で、授業・勉強・サークル・部活・アルバイトなどがなく、自分で自由に使える時間は1週間でどれくらいありますか？
あてはまる時間を1つ選び、○で囲んでください。

（　約1時間　約2時間　約3時間　約4時間　約5時間
約7時間　約10時間　約15時間　約30時間　それ以上　）

本日の調査について，ご意見，ご感想などがございましたら，以下に自由にお書きください。
1つ目の調査についてでも，2つ目の調査についてでも，全体を通して感じたことでも構いません。

ご協力ありがとうございました
指示があるまで表紙を上にしてお待ちください

資料Ｄ　実験４の質問紙（欠乏感高条件）

調査ご協力のお願い

一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程 竹部成崇

今回はみなさんに２種類の異なる調査にご協力いただきたいと思います．１つ目は旅行計画の立て方に関する調査で，２つ目は児童養護施設問題に関する調査です．

１つ目の調査は，こちらの合図にしたがって回答を進めていただきます．架空のシナリオが示されますので，その状況をイメージし，あなたがその状況に置かれたら，どのように考えるのかを記入してください．

２つ目の調査は，あなたのペースで回答を進めることができます．調査票の指示に従って，**順番通りに**回答を進めていってください．基本的にはすべての質問にお答えいただきますが，「前の質問で●●と回答した方にのみお尋ねします」といった指示がある場合は，その指示に従ってください．そういった指示が特にない場合は，すべての方が回答してください．

なお，質問に対する回答に正解・不正解はありません．ご自身の思ったとおりに回答してください．

選択形式の質問では，以下のように，当てはまる数字を〇で囲んでください．

【回答例】

絵を描くのが好きだ。

全く当てはまらない				どちらとも言えない				とてもよく当てはまる
１	２	３	４	５	６	７	８	９

みなさんの回答は集計され，統計的な分析にかけられます．また，この調査以外の目的でデータが使用されることはありません．個人の回答が問題とされることはありませんので，思ったままご回答いただけますと幸いです．

それでは，以下に性別・学年・年齢・留学生かどうかを記入し，合図があるまでお待ちください．

性別　（　男　・　女　）

学年　（　１　・　２　・　３　・　４　）

年齢　（　　）歳

日本語を母語としない留学生の方ですか？（　はい　・　いいえ　）

指示があるまで，ページをめくらないでください

資料D　実験4の質問紙（欠乏感高条件）

旅行計画の立て方に関する調査

以下の文章を読み，想像してください.

鈴木さんは大学生です．今度の連休に友人と2人で，1泊2日で温泉街に旅行に行く約束を，夏休み前からしていました．ところが，計画を立てる段階で，鈴木さんはその頃お金に余裕がなく，どれだけ頑張っても宿と食費に8,000円しか使えないことに気がつきました．友人は，仕方ないので鈴木さんに合わせてくれると言っています.

もし，あなたが鈴木さんの状況に置かれたら，このお金をどのように使いますか.
あなたが考える，宿と食事のプランを，下の選択肢から選んで，表に記入して下さい.
※ 使える金額は「1人8,000円」です.
※ このお金は，宿泊費と食費以外には使えないとします.
※ 記載されている宿の料金は，食事抜きです.

		内容 *例）2人で8畳の和室*	予算 *7,800円*
1日目	昼食		円
	夕食		円
	宿		円
2日目	朝昼兼用の食事		円
		合計（8,000円以内）	円

宿の選択肢

・2人で15畳の和室：　1人12,000円，エアコンあり，露店風呂付客室（温泉），大浴場なし
・2人で12畳の洋室：　1人10,000円，エアコンあり，大浴場3種類あり（温泉）
・2人で8畳の和室：　1人7,800円，エアコンあり，大浴場あり（温泉）
・2人で4畳の和室：　1人4,800円，築40年，エアコンなし，部屋風呂のみ（温泉ではない）
不衛生（ホコリっぽく，カビらしきものも見える）
・ネットカフェ：　1人2,000円，シャワーなし，ベッドなし（椅子とテーブルのみ）

食事の選択肢 ※コースは昼でも可

・現地の高級な和食屋のコース料理（9,000円）　・現地の高級な洋食屋のコース料理（9,000円）
・現地の人気店のコース料理（6,000円）　・現地の人気店の定食（3,500円）
・現地の平凡なお店の定食（1,500円）　・全国チェーン店の定食（1000円）
・コンビニのお弁当（600円）　・コンビニのおにぎり（1つ150円）　・なし（0円）

指示があるまで，ページをめくらないでください

１つ目の調査はこれで終了です.
ページをめくり，２つ目の調査へ進んでください.

児童養護施設問題に関する調査

以下の文章は、とある児童養護施設に暮らす子どもたちに関する内容について書かれています。
子どもたちが置かれている状況を想像しながら読み、その後の質問へ回答してください。

この児童養護施設は、親から虐待されたり親が亡くなったりして、他の親戚もいない子どもたちが暮らす施設です。
子どもたちはこの施設以外に帰る場所はなく、毎日の生活をこの施設で送っています。

この児童施設はNPOの活動の一環で運営されています。
施設の管理や子どもの生活のサポートを行うボランティア、人々からの寄付によって、この施設の運営はまわっています。

しかし最近、人手が足りなくなったり、活動資金が不足したりして、施設の運営が厳しくなってきています。
もし児童養護施設が閉鎖されれば、子どもたちの行き場はなくなってしまいます。

（1）この児童養護施設の運営が厳しい原因としてより重大なのは、以下のどちらだと思いますか？
より重大な原因となっていると思う方に〇をつけてください。
正解・不正解はありませんので、あなたが感じたままにお答えください。
※ ただし、NPOなので、資金があってもボランティアは雇えません。

（　　人手不足　　／　　資金不足　　）

回答が終わったら、次のページへ進んでください

（2）この児童養護施設の運営が厳しい原因として、以下のそれぞれはどの程度重大だと思いますか？
最も適当な数字に〇をつけてお答えください。

人手不足

まったく重大でない　　とても重大

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6 － 7 － 8 － 9 － 10

資金不足

まったく重大でない　　とても重大

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6 － 7 － 8 － 9 － 10

（3）このNPOにボランティア（専門家でないとできない作業ではなく、あなたにもできる作業）
や寄付をお願いされた場合、あなたはどうしますか？
以下の4つのうちから、当てはまるものを1つ選び、数字を〇で囲んでください。

① ボランティアだけする　　② 寄付だけする

③ ボランティアも寄付もする　　④ どちらもしない

（4）（3）で①か③を選んだ人にお尋ねします。②と④を選んだ人は回答しないでください。
あなたは合計何時間くらいボランティアしますか？

約30分　約1時間　約2時間　約3時間　約4時間
約5時間　約7時間　約10時間　約15時間　それ以上

回答が終わったら、次のページへ進んでください

（5）（3）で②か③を選んだ人にお尋ねします。①と④を選んだ人は回答しないでください。
あなたは何円くらい寄付しますか？
あてはまる金額を1つ選び、〇で囲んでください。

約100円	約200円	約300円	約400円	約500円
約700円	約1000円	約1500円	約3000円	それ以上

（6）文章を読んだり写真を見たりしたときにあなたが感じたこととして、以下の各文章がどの程度あてはまるか、数字に〇をつけてお答えください。

		まったく当てはまらない ←→ とてもよく当てはまる
1	児童養護施設の子どもを、かわいそうだと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
2	児童養護施設の子どものために、何かしてあげたいと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
3	このNPOが活動しても、児童養護施設の子どもの生活は改善しないと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
4	この児童養護施設の子どもは、自分とは関係がないと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
5	このNPOの活動は、児童養護施設の子どものためになると思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
6	児童養護施設の子どもを思い、胸が苦しくなった	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
7	児童養護施設の子どもと自分は、似ていると思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6

回答が終わったら、次のページへ進んでください

２つ目の調査は以上で終了です。
最後に，今回の調査全体に関わることについてお尋ねします。

[1] １つ目の調査の旅行計画を考える課題を行っているときに，どのくらい金銭的な欠乏感（お金が足りないという気持ち）を感じましたか？

1	2	3	4
まったく感じなかった	あまり感じなかった	少し感じた	とても感じた

[2] １つ目の調査の旅行計画を考える課題について思ったこととして，以下の各文章がどれくらい当てはまるか，数字に〇をつけてお答えください。

		まったく当てはまらない ←→ とてもよく当てはまる
1	この旅行において，宿と食事は重要ではないと思った	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
2	自分が鈴木さんのような状況になることを，現実味を持って考えられなかった	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
3	鈴木さんのような状況は，自分にとって身近なものである	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

[3] あなたはこれまで，自分で計画を立てた旅行にどれくらい行ったことがありますか？

（　１度もない　・　１度だけある　・　2～3 回ある　・　４回以上ある　）

[4] あなたはこれまでに、自発的に困っている誰かのために寄付をしたことがどれくらいありますか？ただし、学校などの行事で自分の意思と関係なく行った寄付は除きます。

1	2	3	4	5
したことがない	１度だけ	数回した	しばしばする	よくする

[5] [4]で <u>１以外を選んだ人（1 回以上自発的な寄付をしたことがある人）</u>にお尋ねします。
<u>１を選んだ人は回答しないでください</u>。
平均的な１回の寄付額は約何円ですか？
あてはまる金額を１つ選び、〇で囲んでください。

（　数十円　約 100 円　約 200 円　約 300 円　約 400 円　約 500 円
約 700 円　約 1000 円　約 1500 円　約 3000 円　それ以上　）

回答が終わったら、次のページへ進んでください

［6］あなたはこれまでに、自発的にボランティアに参加したことがどれくらいありますか？
ただし、学校などの行事で自分の意思と関係なく参加したボランティアは除きます。

1	2	3	4	5
したことがない	1 度だけ	数回した	しばしばする	よくする

［7］［6］で 1 以外を選んだ人（1 回以上自発的なボランティアをしたことがある人）にお尋ねします。1 を選んだ人は回答しないでください。
平均的な 1 回のボランティア時間は約何時間ですか？
あてはまる時間を 1 つ選び、○で囲んでください。

（　数十分　約 1 時間　約 2 時間　約 3 時間　約 4 時間　約 5 時間
約 7 時間　約 10 時間　約 15 時間　約 30 時間　それ以上　）

［8］あなたの普段の生活で、使おうと思ったときにちゅうちょなく自由に使える金額はどれくらいですか？あてはまる金額を 1 つ選び、○で囲んでください。

（　約 300 円　約 500 円　約 700 円　約 1000 円　約 1500 円
約 3000 円　約 5000 円　約 7000 円　約 10,000 円　それ以上　）

［9］あなたの普段の生活で、授業・勉強・サークル・部活・アルバイトなどがなく、自分で自由に使える時間は 1 週間でどれくらいありますか？
あてはまる時間を 1 つ選び、○で囲んでください。

（　約 1 時間　約 2 時間　約 3 時間　約 4 時間　約 5 時間
約 7 時間　約 10 時間　約 15 時間　約 30 時間　それ以上　）

本日の調査について，ご意見，ご感想などがございましたら，以下に自由にお書きください。
1 つ目の調査についてでも，2 つ目の調査についてでも，全体を通して感じたことでも構いません。

ご協力ありがとうございました
指示があるまで表紙を上にしてお待ちください

調査ご協力のお願い

一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程 竹部成崇

今回はみなさんに２種類の異なる調査にご協力いただきたいと思います．１つ目は旅行計画の立て方に関する調査で，２つ目は児童養護施設問題に関する調査です．

１つ目の調査は，こちらの合図にしたがって回答を進めていただきます．架空のシナリオが示されますので，その状況をイメージし，あなたがその状況に置かれたら，どのように考えるのかを記入してください．

２つ目の調査は，あなたのペースで回答を進めることができます．調査票の指示に従って，**順番通りに**回答を進めていってください．基本的にはすべての質問にお答えいただきますが，「前の質問で●●と回答した方にのみお尋ねします」といった指示がある場合は，その指示に従ってください．そういった指示が特にない場合は，すべての方が回答してください．

なお，質問に対する回答に正解・不正解はありません．ご自身の思ったとおりに回答してください．

選択形式の質問では，以下のように，当てはまる数字を〇で囲んでください．

【回答例】

絵を描くのが好きだ。

全く当てはまらない				どちらとも言えない				とてもよく当てはまる
１	２	３	４	５	６	７	８	９

みなさんの回答は集計され，統計的な分析にかけられます．また，この調査以外の目的でデータが使用されることはありません．個人の回答が問題とされることはありませんので，思ったままご回答いただけますと幸いです．

それでは，以下に性別・学年・年齢・留学生かどうかを記入し，合図があるまでお待ちください．

性別　（　男　・　女　）

学年　（　１　・　２　・　３　・　４　）

年齢　（　　）歳

日本語を母語としない留学生の方ですか？（　はい　・　いいえ　）

指示があるまで，ページをめくらないでください

資料E　実験5の質問紙（欠乏感高条件）

旅行計画の立て方に関する調査

以下の文章を読み，想像してください.

鈴木さんは大学生です．今度の連休に友人と2人で，1泊2日で温泉街に旅行に行く約束を，夏休み前からしていました．ところが，計画を立てる段階で，鈴木さんはその頃お金に余裕がなく，どれだけ頑張っても宿と食費に8,000円しか使えないことに気がつきました．友人は，仕方ないので鈴木さんに合わせてくれると言っています.

もし，あなたが鈴木さんの状況に置かれたら，このお金をどのように使いますか.
あなたが考える，宿と食事のプランを，下の選択肢から選んで，表に記入して下さい.
※ 使える金額は「1人8,000円」です.
※ このお金は，宿泊費と食費以外には使えないとします.
※ 記載されている宿の料金は，食事抜きです.

		内容 *例）2人で8畳の和室*	予算 *7,800円*
1日目	昼食		円
	夕食		円
	宿		円
2日目	朝昼兼用の食事		円
		合計（8,000円以内）	円

宿の選択肢

・2人で15畳の和室：　1人12,000円，エアコンあり，露店風呂付客室（温泉），大浴場なし
・2人で12畳の洋室：　1人10,000円，エアコンあり，大浴場3種類あり（温泉）
・2人で8畳の和室：　1人7,800円，エアコンあり，大浴場あり（温泉）
・2人で4畳の和室：　1人4,800円，築40年，エアコンなし，部屋風呂のみ（温泉ではない）
不衛生（ホコリっぽく，カビらしきものも見える）
・ネットカフェ：　1人2,000円，シャワーなし，ベッドなし（椅子とテーブルのみ）

食事の選択肢 ※コースは昼でも可

・現地の高級な和食屋のコース料理（9,000円）　・現地の高級な洋食屋のコース料理（9,000円）
・現地の人気店のコース料理（6,000円）　・現地の人気店の定食（3,500円）
・現地の平凡なお店の定食（1,500円）　・全国チェーン店の定食（1000円）
・コンビニのお弁当（600円）　・コンビニのおにぎり（1つ150円）　・なし（0円）

指示があるまで，ページをめくらないでください

１つ目の調査はこれで終了です.
ページをめくり，２つ目の調査へ進んでください.

児童養護施設問題に関する調査

以下の文章は、とある児童養護施設に暮らす子どもたちに関する内容について書かれています。
子どもたちが置かれている状況を想像しながら読み、その後の質問へ回答してください。

この児童養護施設は、親から虐待されたり親が亡くなったりして、他の親戚もいない子どもたちが暮らす施設です。
子どもたちはこの施設以外に帰る場所はなく、毎日の生活をこの施設で送っています。

この児童施設はNPOの活動の一環で運営されています。
施設の管理や子どもの生活のサポートを行うボランティア、人々からの寄付によって、この施設の運営はまわっています。

しかし最近、人手が足りなくなったり、活動資金が不足したりして、施設の運営が厳しくなってきています。
もし児童養護施設が閉鎖されれば、子どもたちの行き場はなくなってしまいます。

（１）このNPOがボランティア（専門家でないとできない作業ではなく、あなたにもできる作業）や寄付を募っているところを見かけた場合、あなたはどうしますか？
以下の４つのうちから、当てはまるものを１つ選び、数字を〇で囲んでください。

①　ボランティアだけすると言う	②　寄付だけすると言う
③　ボランティアも寄付もすると言う	④　特に何もしない

回答が終わったら、次のページへ進んでください

（２）（１）で①か③を選んだ人にお尋ねします。②と④を選んだ人は回答しないでください。
あなたは合計何時間くらいボランティアしますか？

（　約 30 分　約 1 時間　約 2 時間　約 3 時間　約 4 時間
　約 5 時間　約 7 時間　約 10 時間　約 15 時間　それ以上　）

（３）（１）で②か③を選んだ人にお尋ねします。①と④を選んだ人は回答しないでください。
あなたは何円くらい寄付しますか？
あてはまる金額を１つ選び、〇で囲んでください。

（　約 100 円　約 200 円　約 300 円　約 400 円　約 500 円
　約 700 円　約 1000 円　約 1500 円　約 3000 円　それ以上　）

（４）文章を読んだり写真を見たりしたときにあなたが感じたこととして、以下の各文章がどの程度あてはまるか、数字に〇をつけてお答えください。

		まったく当てはまらない ←→ とてもよく当てはまる
1	児童養護施設の子どもを、かわいそうだと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
2	児童養護施設の子どものために、何かしてあげたいと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
3	この NPO が活動しても、児童養護施設の子どもの生活は改善しないと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
4	この児童養護施設の子どもは、自分とは関係がないと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
5	この NPO の活動は、児童養護施設の子どものためになると思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
6	児童養護施設の子どもを思い、胸が苦しくなった	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6

回答が終わったら、次のページへ進んでください

２つ目の調査は以上で終了です。
最後に，今回の調査全体に関わることについてお尋ねします。

[1] １つ目の調査の旅行計画を考える課題を行っているときに，どのくらい金銭的な欠乏感（お金が足りないという気持ち）を感じましたか？

1	2	3	4
まったく感じなかった	あまり感じなかった	少し感じた	とても感じた

[2] １つ目の調査の旅行計画を考える課題について思ったこととして，以下の各文章がどれくらい当てはまるか，数字に〇をつけてお答えください。

		まったく当てはまらない ←→ とてもよく当てはまる
1	この旅行において，宿と食事は重要ではないと思った	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
2	自分が鈴木さんのような状況になることを，現実味を持って考えられなかった	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
3	鈴木さんのような状況は，自分にとって身近なものである	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6

[3] あなたはこれまで，自分で計画を立てた旅行にどれくらい行ったことがありますか？

（　１度もない　・　１度だけある　・　2～3 回ある　・　４回以上ある　）

[4] あなたはこれまでに、自発的に困っている誰かのために寄付をしたことがどれくらいありますか？ただし、学校などの行事で自分の意思と関係なく行った寄付は除きます。

1	2	3	4	5
したことがない	１度だけ	数回した	しばしばする	よくする

[5] [4]で <u>１以外を選んだ人（1 回以上自発的な寄付をしたことがある人）</u>にお尋ねします。
<u>１を選んだ人は回答しないでください</u>。
平均的な１回の寄付額は約何円ですか？
あてはまる金額を１つ選び、〇で囲んでください。

（　数十円　約 100 円　約 200 円　約 300 円　約 400 円　約 500 円
約 700 円　約 1000 円　約 1500 円　約 3000 円　それ以上　）

回答が終わったら、次のページへ進んでください

［6］あなたはこれまでに、自発的にボランティアに参加したことがどれくらいありますか？
ただし、学校などの行事で自分の意思と関係なく参加したボランティアは除きます。

1	2	3	4	5
したことがない	1 度だけ	数回した	しばしばする	よくする

［7］［6］で 1 以外を選んだ人（1 回以上自発的なボランティアをしたことがある人）にお尋ねします。1 を選んだ人は回答しないでください。
平均的な 1 回のボランティア時間は約何時間ですか？
あてはまる時間を 1 つ選び、○で囲んでください。

（　数十分　約 1 時間　約 2 時間　約 3 時間　約 4 時間　約 5 時間
約 7 時間　約 10 時間　約 15 時間　約 30 時間　それ以上　）

［8］あなたの普段の生活で、使おうと思ったときにちゅうちょなく自由に使える金額はどれくらいですか？あてはまる金額を 1 つ選び、○で囲んでください。

（　約 300 円　約 500 円　約 700 円　約 1000 円　約 1500 円
約 3000 円　約 5000 円　約 7000 円　約 10,000 円　それ以上　）

［9］あなたの普段の生活で、授業・勉強・サークル・部活・アルバイトなどがなく、自分で自由に使える時間は 1 週間でどれくらいありますか？
あてはまる時間を 1 つ選び、○で囲んでください。

（　約 1 時間　約 2 時間　約 3 時間　約 4 時間　約 5 時間
約 7 時間　約 10 時間　約 15 時間　約 30 時間　それ以上　）

本日の調査について，ご意見，ご感想などがございましたら，以下に自由にお書きください。
1 つ目の調査についてでも，2 つ目の調査についてでも，全体を通して感じたことでも構いません。

ご協力ありがとうございました
指示があるまで表紙を上にしてお待ちください

調査ご協力のお願い

一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程 竹部成崇

今回はみなさんに2種類の異なる調査にご協力いただきたいと思います．1つ目は旅行計画の立て方に関する調査で，2つ目は児童養護施設問題に関する調査です．

1つ目の調査は，こちらの合図にしたがって回答を進めていただきます．架空のシナリオが示されますので，その状況をイメージし，あなたがその状況に置かれたら，どのように考えるのかを記入してください．

2つ目の調査は，あなたのペースで回答を進めることができます．調査票の指示に従って，**順番通りに**回答を進めていってください．基本的にはすべての質問にお答えいただきますが，「前の質問で●●と回答した方にのみお尋ねします」といった指示がある場合は，その指示に従ってください．そういった指示が特にない場合は，すべての方が回答してください．

なお，質問に対する回答に正解・不正解はありません．ご自身の思ったとおりに回答してください．

選択形式の質問では，以下のように，当てはまる数字を〇で囲んでください．

【回答例】
絵を描くのが好きだ。

全く当てはまらない　　どちらとも言えない　　とてもよく当てはまる

１ － ２ － ３ － ４ － ５ － ６ － ７ － ８ － ９

みなさんの回答は集計され，統計的な分析にかけられます．また，この調査以外の目的でデータが使用されることはありません．個人の回答が問題とされることはありませんので，思ったままご回答いただけますと幸いです．

それでは，以下に性別・学年・年齢・留学生かどうかを記入し，合図があるまでお待ちください．

性別　（　男　・　女　）

学年　（　1　・　2　・　3　・　4　）

年齢　（　　）歳

日本語を母語としない留学生の方ですか？（　はい　・　いいえ　）

指示があるまで，ページをめくらないでください

資料 F　実験 6 の質問紙（欠乏感高条件）

旅行計画の立て方についての調査

以下の文章をよく想像しながら読み，下の設問に回答してください．

あなたは大学生です．友人と応募した，ある温泉街への 1 泊 2 日の旅行券があたったため，今度の連休に一緒に行くことにしました．ところが，旅行が近くなったある時，1 日目の夕方と 2 日目のお昼に，地元でどうしてもやらなければいけないことが入ってしまいました．宿のチェックインは最も遅くて 20 時までですが，現地の駅に到着するのは 19 時になってしまいます．また，翌朝は現地の駅を 9 時半に出発しなければいけません．しかし，この機会を逃すと旅行券の有効期限が過ぎてしまうので，旅行はこの機会に行くことにしました．友人は，旅行計画はあなたに合わせてくれると言っています．

あなたはどのような旅行計画を立てますか？下の選択肢から選んで，表に記入して下さい．

※ 使える時間は，**1 日目は 1 時間以内**，**2 日目も 1 時間以内**です．

※ **所要時間は選択肢に書いてあるものから変更できません**．**宿は食事なし**です．

※ 1 日目の「宿へ移動」と 2 日目の「宿から移動」は，同じことを記入します．

		内容（記号で可） *例）　B*	所要時間 *例）　0.4 時間*
1 日目	観光（O～R から選択）		時間
	観光（O～R から選択）		時間
	夕食（U～Z から選択）		時間
	宿へ移動（A～C から選択）		時間
	合計（**1 時間以内**）		時間
2 日目	宿から移動（A～C から選択）		時間
	朝昼兼用の食事（U～Z から選択）		時間
	観光（O～R から選択）		時間
	合計（**1 時間以内**）		時間

宿の選択肢

A　旅館：やや遠いが，きれいで雰囲気が良く，温泉で露天風呂も充実．移動所要時間 1.2 時間

B　ビジネスホテル：普通のビジネスホテル．温泉ではない．移動所要時間 0.4 時間

C　ネットカフェ：駅のすぐ近くにある．シャワーもベッドもない．移動所要時間 0.1 時間

食事の選択肢

U　現地で人気のコース料理（洋食）：美味しいがやや遠い．所要時間 1.5 時間

V　現地で人気の定食（和食）：美味しいがやや遠い．所要時間 1 時間

W　現地の平凡な定食：所要時間 0.7 時間　　**X**　全国チェーン店の定食：所要時間 0.5 時間

Y　駅の近くにある，普通のコンビニ：所要時間 0.1 時間　　**Z**　なし：所要時間 0 時間

観光の選択肢

O　貴重な物がある有名博物館：所要時間 1 時間　**P**　平凡だが整った庭園：所要時間 0.6 時間

Q　特徴のない美術館：所要時間 0.3 時間　　**R**　行かない：所要時間 0 時間

指示があるまで，ページをめくらないでください

１つ目の調査はこれで終了です.
ページをめくり，２つ目の調査へ進んでください.

児童養護施設問題に関する調査

以下の文章は、とある児童養護施設に暮らす子どもたちに関する内容について書かれています。
子どもたちが置かれている状況を想像しながら読み、その後の質問へ回答してください。

この児童養護施設は、親から虐待されたり親が亡くなったりして、他の親戚もいない子どもたちが暮らす施設です。
子どもたちはこの施設以外に帰る場所はなく、毎日の生活をこの施設で送っています。

この児童施設は NPO の活動の一環で運営されています。
施設の管理や子どもの生活のサポートを行うボランティア、人々からの寄付によって、この施設の運営はまわっています。

しかし最近、ボランティア・スタッフの時間が足りなくなったり、活動資金が不足したりして、施設の運営が厳しくなってきています。
もし児童養護施設が閉鎖されれば、子どもたちの行き場はなくなってしまいます。

（1）この施設の運営が厳しい原因として、以下のそれぞれはどの程度重大だと思いますか？
それぞれについて、最も適当な数字に〇をつけてお答えください。
正解・不正解はありませんので、あなたが感じたままにお答えください。
※　ただし、NPO なので、資金があってもボランティアは雇えません。

ボランティア・スタッフの時間が足りない

まったく重大でない　　とても重大

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6 － 7 － 8 － 9 － 10

資金が足りない

まったく重大でない　　とても重大

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6 － 7 － 8 － 9 － 10

回答が終わったら、次のページへ進んでください

（2）このNPOがボランティア（専門家でないとできない作業ではなく、あなたにもできる作業）や寄付を募っているところを見かけた場合、あなたはどうしますか？
以下の4つのうちから、当てはまるものを1つ選び、数字を〇で囲んでください。

① ボランティアだけすると言う　　② 寄付だけすると言う
③ ボランティアも寄付もすると言う　　④ 特に何もしない

（3）（2）で①か③を選んだ人にお尋ねします。②と④を選んだ人は回答しないでください。
あなたは合計何時間くらいボランティアしますか？

約30分　約1時間　約2時間　約3時間　約4時間
約5時間　約7時間　約10時間　約15時間　それ以上

（4）（2）で②か③を選んだ人にお尋ねします。①と④を選んだ人は回答しないでください。
あなたは何円くらい寄付しますか？
あてはまる金額を1つ選び、〇で囲んでください。

約100円　約200円　約300円　約400円　約500円
約700円　約1000円　約1500円　約3000円　それ以上

（5）文章を読んだり写真を見たりしたときにあなたが感じたこととして、以下の各文章がどの程度あてはまるか、数字に〇をつけてお答えください。

		まったく当てはまらない ←→ とてもよく当てはまる
1	児童養護施設の子どもを、かわいそうだと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
2	児童養護施設の子どものために、何かしてあげたいと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
3	このNPOが活動しても、児童養護施設の子どもの生活は改善しないと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
4	この児童養護施設の子どもは、自分とは関係がないと思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
5	このNPOの活動は、児童養護施設の子どものためになると思った	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
6	児童養護施設の子どもを思い、胸が苦しくなった	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
7	児童養護施設の子どもの話は、自分とは遠い話のように感じた	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
8	児童養護施設の子どものことを、身近に感じた	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6

回答が終わったら、次のページへ進んでください

２つ目の調査は以上で終了です。
最後に，今回の調査全体に関わることについてお尋ねします。

[1] １つ目の調査の旅行計画を考える課題を行っているときに，どのくらい時間的な欠乏感（1 日目 1 時間，２日目 1 時間では足りないという気持ち）を感じましたか？

1	2	3	4
まったく感じなかった	あまり感じなかった	少し感じた	とても感じた

[2] あなたはこれまでに、自発的に困っている誰かのために寄付をしたことがどれくらいありますか？ただし、学校などの行事で自分の意思と関係なく行った寄付は除きます。

1	2	3	4	5
したことがない	1 度だけ	数回した	しばしばする	よくする

[3] [2]で 1 以外を選んだ人（1 回以上自発的な寄付をしたことがある人）にお尋ねします。
1 を選んだ人は回答しないでください。
平均的な 1 回の寄付額は約何円ですか？
あてはまる金額を 1 つ選び、○で囲んでください。

数十円	約 100 円	約 200 円	約 300 円	約 400 円	約 500 円
約 700 円	約 1000 円	約 1500 円	約 3000 円	それ以上	

[4] あなたはこれまでに、自発的にボランティアに参加したことがどれくらいありますか？
ただし、学校などの行事で自分の意思と関係なく参加したボランティアは除きます。

1	2	3	4	5
したことがない	1 度だけ	数回した	しばしばする	よくする

[5] [4] で 1 以外を選んだ人（1 回以上自発的なボランティアをしたことがある人）にお尋ねします。1 を選んだ人は回答しないでください。
平均的な 1 回のボランティア時間は約何時間ですか？
あてはまる時間を 1 つ選び、○で囲んでください。

数十分	約 1 時間	約 2 時間	約 3 時間	約 4 時間	約 5 時間
約 7 時間	約 10 時間	約 15 時間	約 30 時間	それ以上	

回答が終わったら、次のページへ進んでください

［6］あなたの普段の生活で、授業・勉強・サークル・部活・アルバイトなどがなく、自分で
自由に使える時間は 1 週間でどれくらいありますか？
あてはまる時間を 1 つ選び、○で囲んでください。

約 1 時間	約 2 時間	約 3 時間	約 4 時間	約 5 時間
約 7 時間	約 10 時間	約 15 時間	約 30 時間	それ以上

本日の調査について，ご意見，ご感想などがございましたら，以下に自由にお書きください。
1 つ目の調査についてでも，2 つ目の調査についてでも，全体を通して感じたことでも構いません。

ご協力ありがとうございました
指示があるまで表紙を上にしてお待ちください